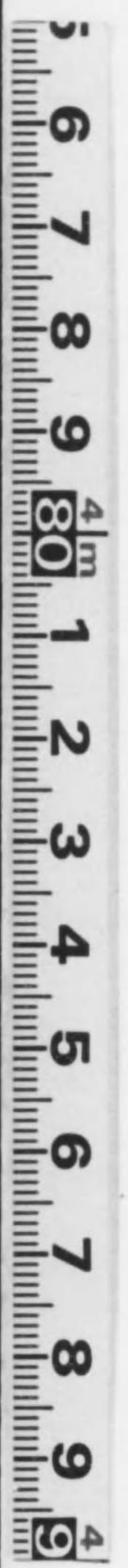


41  
103a

41-103□  
1200501255200



始





工トW-59

41  
103<sub>口</sub>



日本書紀通釋

第五



飯田武郷著

内外書籍株式會社



慶長敕版日本書紀 (宮内省圖書寮所蔵)

慶長四年、後陽成天皇の勅旨により、活字を以て神代卷上下を

刊行せるものが本書で、日本書紀刊行の嚆矢である。本書は山田

道忠の手澤本で、調點朱點を加へ、行間所々に註を附して居る。

表紙に左の手記がある。題簽は畏くも後陽成天皇の宸筆を知した

ものといはれて居る。

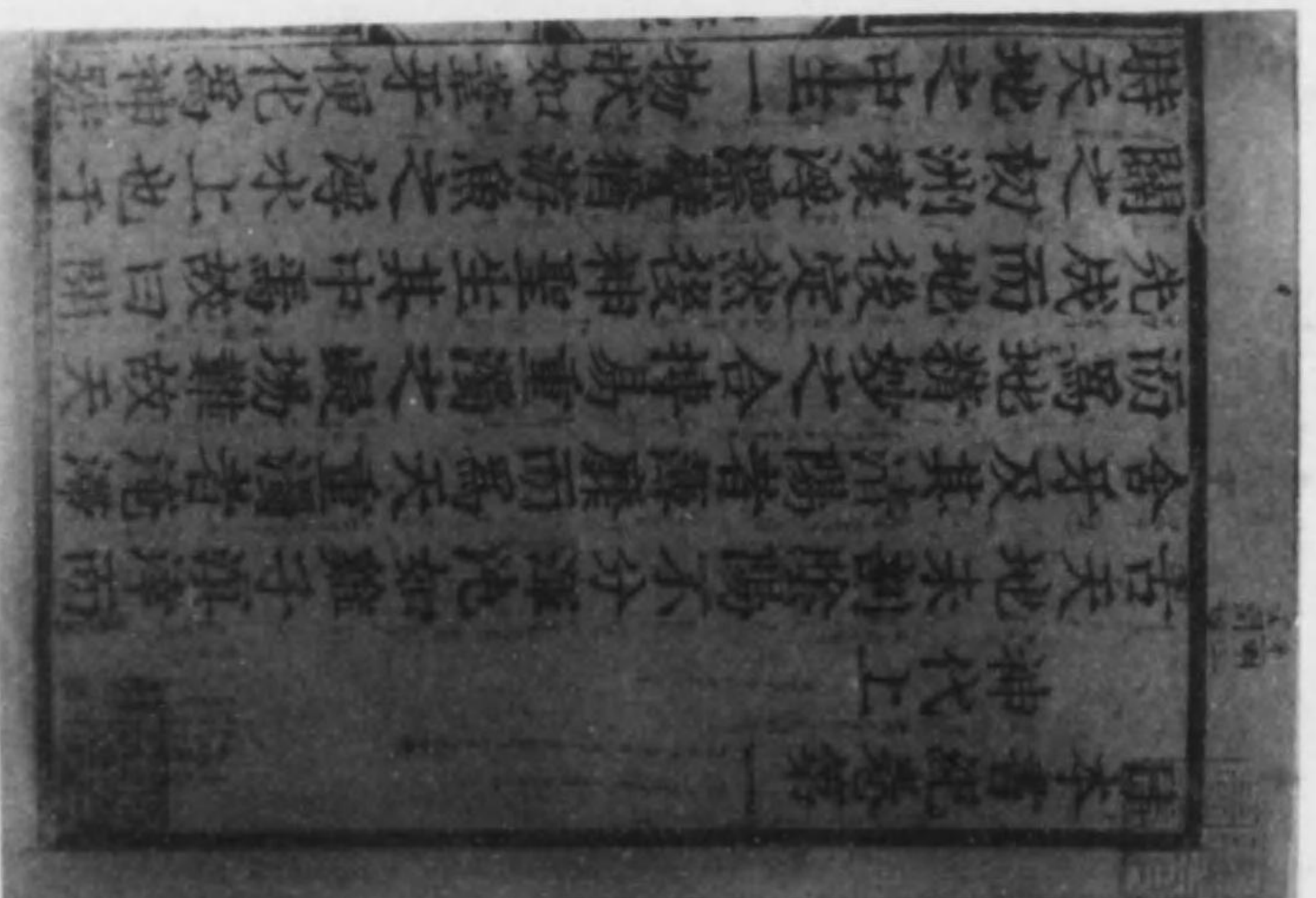
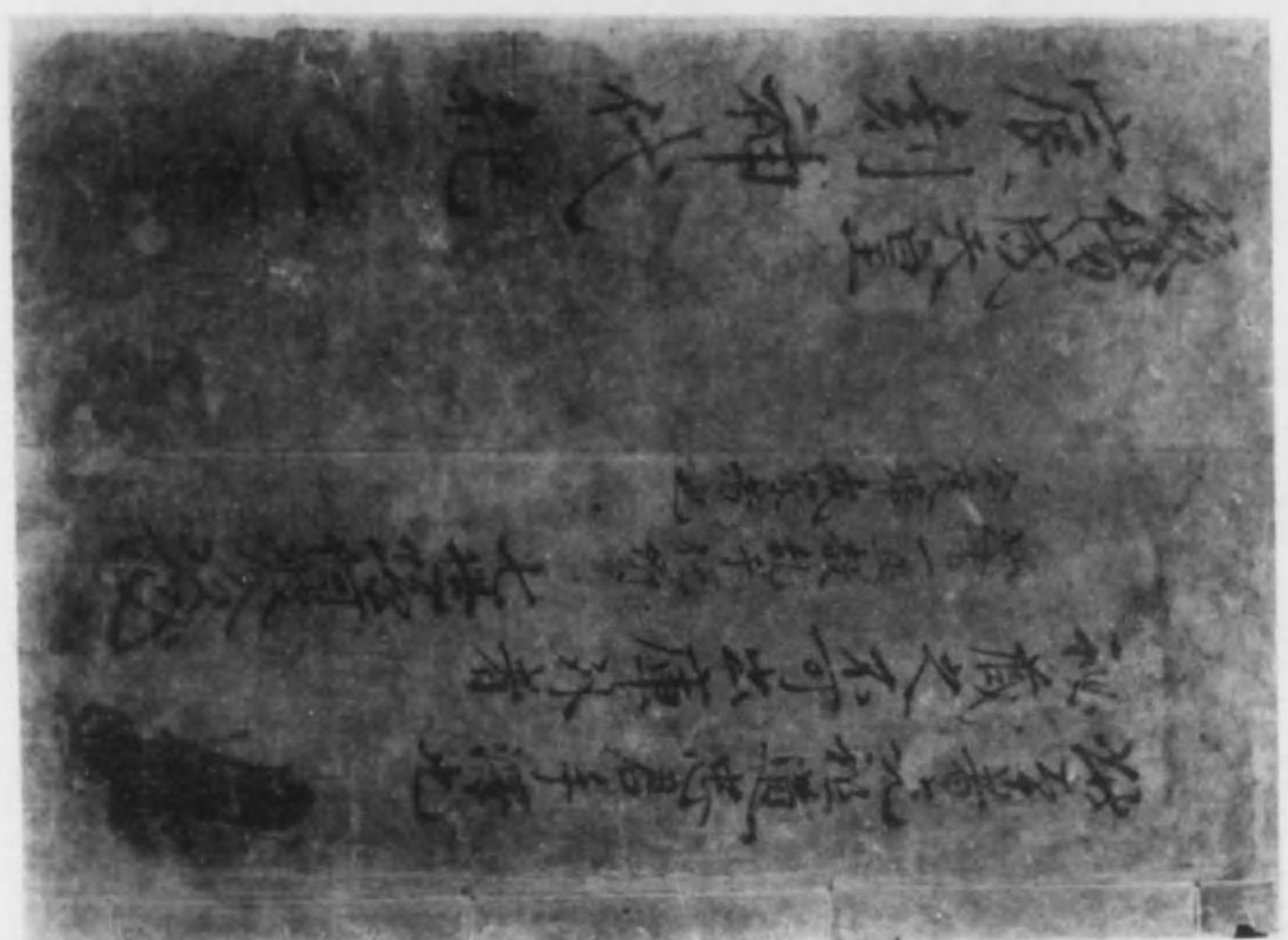
此本書先祖道忠手澤也。秘藏之不可出屋外。

七世孫阿波介以(花押)

本書成立の詳細は、清原綱賢の跋文に記してある。其の一節に、

舊本頗舛叙不一、求教本考正之、去其駁而錄其純云々。

とあるに見ても、其の一端は知らるゝのである。





Handwritten text on a curved strip of paper, likely a page from a book or manuscript. The text is written in a cursive script and is oriented vertically on the page. The strip is placed on the left page of an open book.

飯田武郷先生筆



41-103

日本書紀通釋第五

目次

卷之五十六

日本書紀卷第二十四

皇極天皇紀

三〇九五

卷之五十七

日本書紀卷第二十五

孝德天皇紀

三一六七

卷之五十八

孝德天皇紀續

三二一七

卷之五十九

孝德天皇紀續

三二五七

○日本書紀通釋第五目次



卷之六十

日本書紀卷第二十六

齊明天皇紀

卷之六十一

日本書紀卷第二十七

天智天皇紀

卷之六十二

天智天皇紀續

卷之六十三

日本書紀卷第二十八

天武天皇紀上

卷之六十四

天武天皇紀上續

卷之六十五

日本書紀卷第二十九

天武天皇紀下

卷之六十六

天武天皇紀下續

卷之六十七

天武天皇紀下續

卷之六十八

天武天皇紀下續

卷之六十九

日本書紀卷第三十

三五五七

三六〇二

三六四五

三六九六

三七六三

三四四四

三三八五

三三一五

三四九九



持統天皇紀 ..... 三八〇九

卷之七十

持統天皇紀續 ..... 三八七三

日本書紀卷第三十終

日本書紀通釋第五目次終

日本書紀通釋卷之五十六

飯田武郷謹撰

日本書紀卷第二十四

天豐財重日足姬天皇 皇極天皇

御名義。天豐は美稱。財は天皇の御名。前紀に寶皇女とあり。重日足姬。みな後に稱へ奉りし美稱。重は嚴また茂字をも古く書たり。○皇極の御論は。尙書洪範に。建用皇極。孔安國曰。皇大極中也。謂大中之道也。とあり。さて此天皇。後に重祚まじくして。又齊明天皇とも申し奉れり。其等の事は其御紀に云。

皇極天皇紀

天豐財重日重日。此云伊柯之比。足姬天皇。淳中倉太珠敷天皇曾孫。押坂彥人大兄皇子孫。茅渟王女也。母曰吉備姬王。天皇順考古道而爲政也。息長足日廣額天皇二年立爲皇后。十三年十月。息長足日廣額天皇崩。

曾孫。垂仁紀に出。倭名抄曾孫比々古とあり。一訓にヒコとあるは急呼なり。箋注に。釋名。曾孫義如。

○日本書紀通釋卷之五十六

三千九十五



曾祖也。新撰字鏡。垂仁神功持統紀同訓。急呼爲比古。見宇治拾遺物語。今俗所呼亦同。與孫訓混。非是。とあるか如し。○茅渚王。地名か。又姓に因れるか。諸陵式。片岡葦田墓。茅渚皇子。在大和國葛下郡。兆域東西五町。南北五町。無守戸。大和志に。在所未詳。或曰葛下郡筑山村。今日城山。基畔有小冢四。とあり。陵墓一隅抄には。葛下郡平野村。字清岡。山頂世俗曰顯宗陵之地。と云り。○吉備姫王。紹運錄に。欽明天皇孫。櫻井皇子之女とあり。この姫王の事は。吉備島皇祖母命ともあり。二年の下に出たり。○順考古道。平田翁云。天皇古道に考へて。御政を爲玉へるは。佛法にて。入鹿等か雨を祈れるに。驗なかりしかは。止めさせ玉ひて。御自ら南淵河上に幸坐て。祈玉ひしかは。五日かほと大雨ふりて。五穀よくみのり。天下百姓みな萬歳を唱へて。至徳天皇と申奉れるなどなり。と云り。○立爲皇后。これより前に高向王に適坐て。漢皇子を生玉ひしこと。齊明紀に見えたり。其文此にあるへし。○廣額天皇崩。大日本史云。一代要記一説。舒明帝臨崩。禪位于皇后。未レ知何據。とあり。

元年壬寅

元年春正月丁巳朔辛未。皇后即天皇位。以蘇我臣蝦夷爲大臣。如故。大臣兒入鹿。更名、自執國政。威勝於父。由是盜賊恐懼。路不拾遺。乙酉。百濟使人大仁阿曇連比羅夫。從筑紫國。乘驛馬來言。百濟國聞天皇崩。奉遣弔使。臣隨弔使。共到筑紫。而臣望仕於葬。故先獨來也。然其國者。今大亂矣。

也。然其國者。今大亂矣。

辛未。十五日なり。○入鹿。記仲哀段に。毀鼻入鹿魚とあり。倭名抄。鯨大魚。和名伊流可。とあり。魚に依れる名なり。○鞍作は。乳母の姓を取れるにや。○恐懼。本に懼を攝に誤る。今秘閣本中臣本考本釋紀等に據て改む。訓ヒシは今ひしけると云り。されど此詞舊くは見えず。源氏。徒然草などには見えず。り。下文に。合眼をメヒシキアと訓るも。一つ詞と聞えたり。其處に云ふ。○乙酉。二十九日なり。○阿曇連比羅夫。此人上に見えず。阿曇連。推古紀三十一年に出。なほ次に云。○驛馬。孝德紀訓同し。早馬なり。○今大亂矣。東國通鑑に。百濟義慈王二年秋七月。百濟王親帥兵侵新羅。取西彌猴等四十餘城。八月。又與高句麗謀。欲取新羅黨項城。以絕歸唐之路。とあり。是年義慈王の二年に當れり。されど此時の亂は。其にはあらず。太子傳曆に。二月百濟使弔天皇之喪。使人言國內大亂。弟王子兒翹岐。及男女。並内佐平高名人等四十餘人。爲島王所殺云々。緣斯國則大亂也。とあるを以て見れば。其國の内亂なり。

二月丁亥朔戊子。遣阿曇山背連比良夫。草壁吉士磐金。倭漢書直縣。遣百濟弔使所。問彼消息。弔使報言。百濟國主謂臣言。塞上恒作惡之。請付還使。天朝不許。百濟弔使倭人等言。去年十一月。大佐平智積



卒。又百濟使人擲崐崙使於海裏。今年正月。國主母薨。又弟王子兒翹岐。及其母妹女子四人。內佐平岐味。有高名之人四十餘。被放於嶋。

戊子。二日なり。阿曇山背連。上の阿曇連比羅夫と同人なり。されどこのみにのみ。山背連と書したるはいふかし。此姓他に見えず。三代實錄に。山背思寸大海金子。以奉幣氏神。向阿波國。神名式。名方郡和多。都美豐玉比賣神社。儀名抄那賀郡海部山代などあるは。此姓によしあるか考へし。遣百濟。遣は行か。又於字などの誤か。○弔使報言。此より以下被放於嶋までの文。不審きことあり。錯簡などあるにか。○百濟國主。考本に主を王とあり。此時の王の名は義慈なり。上に云。塞上恒作惡。孝德紀白雉元年下に。百濟君豐璋。其弟塞城。齊明紀六年に。天皇立豐璋爲王。立塞上爲輔。とあり。上城通用せしなり。此者既く皇國に來居りしものなるか。本國の爲に惡しき事など爲しなるへし。○大佐平智積卒。下文七月紀に。饗百濟使人智積とあり。こゝに卒とあるは。倭人等か誤聞せしものか。さて大佐平は。百濟の宰相。內佐平は。それに嗣たる官と見えたり。○崐崙使。崐崙在臨羌西。西戎西域也。と尙書禹貢注に見えたり。聖武紀。平群朝臣廣成入唐條に。漂着崐崙國云々。得見崐崙王。類史延曆十八年七月。有二人。乘小船。漂着參河國。以布覆背。有犢鼻。不着袴。左肩着紺布。形似袈裟。年可廿。身長五尺五分。耳長三寸餘。言語不通。不知何國人。大唐人等見之。僉曰。崐崙人。彼頗習中國語。自謂天竺人。常彈一絃琴。歌聲哀楚。閱其資物。有如實者。謂之綿種。依其願。令住。

川原寺云々。なごももあり。崐崙を古訓にクロとあり。通證。今按。倭名抄崐崙音久呂。又晋李太后形長而色黑。宮人皆謂之崐崙。今呼崐崙奴。爲久呂牟坊。是也。と云り。按に崐崙は。南海赤道直下の國にて。俗に黑人。外に。しばし見えて。黄河の水源。と云る崐崙とは。素より別なり。さて使は。其國より百濟に來れる使人か。詳ならず。○國主母。訓欽明紀に見ゆ。女子訓。雄略紀に見ゆ。○弟王子兒。下文に。百濟國主兒翹岐弟王子。とあると合せて考るに。義慈王の子か。こゝも弟王子にあたる百濟王の兒翹岐。と云る文なるへし。○內佐平。通證に猶言內大臣也。とあり。○四十餘。本に四十を冊に作る。今集解に據て改。○被放於島。太子傳には爲島王所殺とあり。

壬辰。高麗使人泊難波津。丁未。遣諸大夫於難波郡。檢高麗國所貢金銀等。并其獻物。使人貢獻既訖。而諮云。去年六月。弟王子薨。秋九月。大臣伊梨柯須彌殺大王。并殺伊梨渠世斯等百八十餘人。仍以弟王兒爲王。以己同姓都須流。金流。爲大臣。戊申。饗高麗百濟客於難波郡。詔大臣曰。以津守連大海。可使於高麗。以國勝吉士水鷄。可使於百濟。水鷄。此云。以草壁吉士眞跡。可使於新羅。以坂本吉士長兄。可使於任



那。庚戌。召翹岐。安置於安曇山背連家。辛亥。饗高麗百濟客。癸丑。高麗使人百濟使人並罷歸。

壬辰。六日なり。○丁未。二十一日なり。○難波郡。通證に謂大郡之館とあり。信友校本云。一作館とあり。されど次にも難波郡とあれば。誤れりとも見えす。○去年六月弟王子薨。この弟王子は。高麗の弟王子なり。上なるとは異なり。なほ次に云。○大臣は。音讀たるへし。次なるも同じ。○伊犁柯須彌。釋紀私記曰。伊犁姓。柯須彌名とあり。太子傳曆に入露と書たり。通鑑に蓋蘇文とあり。次に引り。○以弟王兒爲王。中臣本及太子傳曆所引文には。王下子字あり。其方よろし。東國通鑑に。唐貞觀十六年。高句麗榮留王二十五年。寶藏王元年。高句麗蓋蘇文。弑其君建武。立王姪賊。蓋蘇文一名蓋金。姓泉氏。自云生水中。以惑衆。狀貌雄偉。意氣贊悍。其父東部大人對盧死。蘇文當嗣。而國人惡猜惡不之立。蘇文謝衆請攝。如有不可。雖廢無悔。衆哀之。遂嗣父。而凶殘尤甚。諸大人與王密議。欲誅事洩。蘇文悉集部兵。若將校閱者。盛陳酒饌於城南。召諸大夫臨視。皆殺之。凡百餘人。遂入宮弑王。斷爲數段。棄之溝中。立賊。とあり。弟王兒とあるは。即この賊の事なるへし。さて是歲天皇元年にあたり。太子傳曆云。二月百濟使弔天皇之喪使人言云々。高麗使來朝貢調言曰。去年九月。大臣入露。殺大王并伊犁渠世斯等一百八十餘人。仍以弟王子兒爲王。即以己同姓人爲大臣。○都須流金

流。釋紀に。私記曰。師說人名也。○戊申。二十二日なり。○百濟客。本に客字なし。今本書旁注秘閣本考本通證引一本等によりて補。○津守連大海。通證云。田袋見宿禰十四代廣麻呂弟とあるは。何に據て書るか。○國勝吉士水鷄。詳ならず。これには誤あるへし。齊明紀二年に。小山下難波吉士國勝等。自百濟還。とあるに據るに。こゝも難波吉士國勝水鷄とありて。二人の名か。また國勝は衍にもあるへし。かにかくに。國勝吉士と云姓は他に見えず。○坂本吉士。詳ならず。坂本臣とは異なるへし。○庚戌。二十四日なり。○召翹岐。翹岐は。上に百濟弟王子兒にて。正月に島に放たれたるよし見えたるに。此に召とあるは。二月に至りて島より還して。皇國に召玉へるか。さるにまた四月の處に太使とある。うたかはし。誤などあるか。○辛亥。二十五日なり。○癸丑。二十七日なり。

三月丙辰朔戊午。無雲而雨。辛酉。新羅遣賀騰極使。與弔喪使。庚午。新羅使人罷歸。是月霖雨。夏四月丙戌朔癸巳。太使翹岐將其從者拜朝。乙未。蘇我大臣。畝傍家喚百濟翹岐等。親對話。仍賜良馬一疋。鐵二十錠。唯不喚塞上。是月霖雨。五月乙卯朔己未。於河內國依網屯倉前。召翹岐等。令觀射獵。庚午。百濟國使船。與吉士船。俱泊于難波。



津。蓋吉士前奉使於百濟乎壬申。百濟使人進調。吉士服命。乙亥。翹岐從者一人死去。丙子。翹岐兒死去。是時。翹岐與妻。畏忌兒死。果不臨喪。凡百濟新羅風俗。有死亡者。雖父母兄弟夫婦姊妹。永不自看。以此而觀。無慈之甚。豈別禽獸。丁丑。熟稻見。戊寅。翹岐將其妻子。移於百濟大井家。乃遣人葬兒於石川。

戊午。三日なり○辛酉。六日なり。本になし。今補○新羅遣賀騰極使。持統紀に。騰極古云三日嗣也。ごあり。秘閣本。信友校本云。古本新羅上有辛酉二字。ごあり。大日本史にも。六日辛酉の二字を加へて。本書干支闕。據兼永本補之。ごあり。後に脱しものなるへし○庚午。十五日なり○癸巳。八日なり○太使。二字うたがはし。私記に此太の讀を渾ごあるも。いかなるよしか詳ならず○乙未は十日なり○畝傍家。本に畝を敏に誤る。今中臣本考本及下文等に依て改む。中臣本。畝上於字あり。さて此家は。下文に起家於畝傍山東ごあり○不喚塞上。塞上は義慈王か弟と見えたり。翹岐等に冠したるもの故不喚と見えたり○己未。五日なり○依網屯倉。仁德紀に出。河内志に。丹北郡三宅村馬場池即此城。ごあり○射獵。通證に。端午騎射之始。延喜式。凡五月五日。天皇親騎射走馬。設御座於武德

殿。國史歲時部。五月五日駒牽。ごあり。田沼善一此の文を説て云。是は只騎射のみにあらず。獵ごいへれば。實に獸を射る獵なり。さて是らのおとを追て。五日の騎射も起れるなるへし。然れども其騎射。この射獵ご全同きにはあらず。猶是よりは前。推古紀十九年五月五日に。藥獵於鬼田野ごも見えたり。この藥獵のなごりか。武德殿にて見そなはし給ふ騎射走馬なり。ご云り。けにも此説の如く。獵字あるからには。單の騎射にはあるへからねご。後の稱を以て。ウマユミごは訓しものなるへし。なほ同氏説に。うまゆみの名は。空種物語祭の使に。右近のせうよりはしめて。はひのりつご。騎射つかうまつる。うまゆみ果て。舍人ごもこまかたわきて。舞あそぶ云々ごあり。此稱なほ物に見えたり。騎射の狀は。十戒圖に出たる狩する人の狀にて見知へし。いはゆる射獵なごいふ物も。かゝる。○庚午。十六日なり○百濟國使船。使上秘閣本中臣信友校本に調字あるよろし○吉士船は。百濟國使ご一つに來るなれば。國勝吉士なるへし。しかるに此に。蓋吉士前奉使於百濟乎。の十字あるは叶はず。集解に私記攙入ご云り。さることなり○壬申。十八日なり○服命。契冲服當作レ報ご云れご。通證に。服命又見天智紀。ごもあるか如く。あやまりにあらず。水戸本には復に作れり。さかしらに改めたるものなるへし○乙亥。二十一日なり○丙子。本に子を申に作れり。長曆に據に此月丙申なし。今考本に據て改む。丙子二十二日なり○妹姉。集解姉妹に改めたり○丁丑。二十三日なり○熟稻見。水戸本信友校本。見上始字あり。訓は萬十八。和我佐世流安加良多知婆奈。十九に。島山爾安可流橋ごの。安加良安可流も同じく。實の熟じて色つけるを云なり○戊寅。二十四日なり○百濟大井。敏達紀に見ゆ○石川。河内國石川郡。



六月乙酉朔庚子。微雨。是月大旱。秋七月甲寅朔壬戌。客星入月。乙亥。饗百濟使人大佐平智積等於朝。或本云。百濟使人大佐平智積。乃命健兒相撲於翹岐前。智積等宴畢而退。拜翹岐門。丙子。蘇我臣入鹿豎者獲白雀子。是日同時。有人以白雀納籠而送蘇我大臣。

○庚子。十六日なり○壬戌。九日なり○客星。史記天官書。隋書天文志等に見ゆ○乙亥。二十二日なり○大佐平智積。通證云。今按上文既言去年十一月大佐平智積卒。如何○健兒を。諸國より出さしめしこと。續紀聖武紀廢帝紀に見えて。其を軍士に充たりしことなとあれと。此はそれとは異りて。此の訓に見えたる如く。たゞ力者なり。されは此時のは。諸國より出しにもあるへからず。また後の健兒は。一の名稱ありて。古牟傳以と唱へたり。平家物語等に見えたり○相撲のことは。垂仁紀に出。さて此時のを通證に。此七月相撲節之始也と云れと。それまでにもあらじ。おのつから月の合へるなるへし○拜翹岐は。弟王子の兒なれば。智積等か敬禮して退けるなるへし○丙子は二十三日なり○豎者。和名抄に。童未冠之稱也。和良波。辰子和良波倍と注せり。これは中古に聞えたる内豎の類か。また何となきたるの童子にもあるへし○白雀は。治部式に中瑞とあり。蘇我氏のかゝる祥瑞を得たるを悦ひしは。内心に欲する事のありしか故なり。故其意に阿諛して。かく度々かゝるものをも見せしなるへし。

戊寅。群臣相謂之曰。隨村々祝部所教。或殺牛馬。祭諸社神。或頻移市。或禱河伯。既無所効。蘇我大臣報曰。可於寺々轉讀大乘經典。悔過如佛所說。敬而祈雨。庚辰。於大寺南庭嚴佛菩薩像。與四天王像。屈請衆僧。讀大乘經等。于時蘇我大臣手執香鑪。燒香發願。辛巳。微雨。壬午。不能祈雨。故停讀經。八月甲申朔。天皇幸南淵河上。跪拜四方。仰天而祈。即雷大雨。遂雨五日。溥潤天下。於

戊寅。二十五日なり○相謂。秘閣本中臣本に。謂を語に作りり○村々祝部所教。この頃となりては。いつしかまことの神祇の道をわすれて。祝部ともに至るまで。外國風の淫祀の事などを。人にも教へしなりけり○殺牛馬祭諸社神。この事漢土より起れり。漢書于定國傳曰。郡中枯旱三年。卜筮其故。于公曰。孝婦不當死。前太守彊斷之咎。黨在是乎。於是太守殺牛。祭孝婦冢。因表其墓。天立大雨。歲熟。とある。これらの説に據れるものなるへし。俗多淫祀。民常以牛祭神。廣州記曰。薛林郡有池。池有石牛。歲旱百姓殺牛取血。和泥塗石牛背。祀。皇國にては。神代以來。かゝる事は甚く神の忌給ひしこと。古語拾遺。○移市。後漢書



禮儀志請雨注曰。董仲舒春秋繁露曰。大旱雩祭而請雨。又曰。後漢書禮儀志中注云。仲舒奏。江都王云。求雨之方。損陽益陰。願大王無收廣陵女子爲人祝者一月租。賜諸巫母大小。皆相聚於郭門。爲小壇。以脯酒祭之。女獨擇寬大便處。移市。市使無內之丈夫。丈夫無得相從飲食。令吏妻各往視。其夫皆到。即起雨注而已。また同書郎顛傳曰。自冬涉春。訖無嘉澤。數有西風。反逆時節。朝廷勞心。廣爲祈禱。薦祭山川。暴龍移市。梁簡文帝有移市教。なごあり。移市とは。市場を異處に移して。市廛の門を閉て。集り來る人を内に入れさらしむる祭と見えたり。文武紀に。慶雲二年八月。太政官奏。比日亢旱。田園燠卷。雖久雩祈。未蒙嘉澍。請遣京畿内淨行僧等。祈雨。及罷出市廛。閉塞南門。奏可。大唐新語に。則天朝旱澇。輒閉坊市南門。以禱之。なごあり。河伯は。集解に按謂水靈とあるか如し。これは水を乞ふより。河伯神を祭るなるへし。但し此も皇國風の祭にはあらし。大乘經典。通證云。佛教有大乘小乘。天台四教義曰。究竟大乘。無過華嚴大集大法華涅槃。五部大乘經自此起。○如佛所說敬而祈雨。通證云。有佛說大雲請雨經。請雨法式。以牛糞塗場地。以牛乳酪食法師。見經。なごあり。○庚辰。二十七日なり。○大寺。舒明紀十一年に造れる大寺なり。○燒香。香を古里と訓こと。萬葉十六。香塗流塔爾莫依とあり。雅澄云。香はコリと訓て古言なり。字音に非ず。これはもと加乎理の切りたる言なり。と云り。齋宮式忌詞に。堂稱香燃と云ことあり。太子傳備講に。淨名疏曰。香是離穢之名。而有宣芬散。覆騰馨之用とあり。○辛巳。二十八日なり。○壬午。二十九日なり。○不能祈

雨。通證に謂無雨也とあり。太子傳曆云。尙不能雨。○南淵河上。大和志云。高市郡男淵女淵在畑村。南淵即此とあり。○跪拜四方。通證に四方拜始見とあれと。後世の四方拜とは意味異なり。此は天地四方を拜して。天神地祇に祈給ふにこそあれ。屬星など拜し給ふ始と見たるは誤なり。江次第に拜屬星名云々。次北向南向再拜。西向再拜。北向再拜云々。○遂雨。太子傳曆には連雨とあり。○九穀は。古今注に。九穀黍稷稻粱三豆二麥とあり。されど水戸本に。九を五とあり。其方なるへし。太子傳曆には。百穀成熟とあり。

己丑。百濟使參官等罷歸。仍賜大舶與同船三艘。同船母慮紀舟是日夜半雷鳴。西南角而風雨。參官等所乘船舶觸岸而破。丙申。以少德授百濟質達率長福。中客以下。授位一級。賜物各有差。戊戌。以船賜百濟參官等。發遣。己亥。高麗使人罷歸。己酉。百濟新羅使人罷歸。

○己丑。六日なり。○參官。敏達紀に既出。○大舶の訓。既に出。○同船の事も。既に欽明紀十四年出。○注同船母慮紀舟。信友校本云。一本分注同船下。有此云二字。又云。分注舟字可疑。不似前後例とあり。集解には。六字私記摺入として刪れり。○雷鳴の下。秘閣本水戸本於字あり。○丙申。十三日なり。○少德。中臣本信友校本。少を小に作る。○質の訓。ムカハリの誤なるへし。身代の義なり。○授位一級は。皇朝



の冠位を授玉へるなり。此等にてても。此時の冠位の轉昇ありしことを知へし○戊戌。本に戌を辰に作る。長曆を考ふるに此月戊辰なし。今考本に據て改む。戊戌は十五日なり○己亥は十六日なり○己酉は二十六日なり○新羅使人。集解に新羅二字削去れり。按に上文三月庚午新羅使既歸れり。其後更に來れるもの見えす。故削れるなるへし。

九月癸丑朔乙卯。天皇詔大臣曰。思欲起造大寺。宜發近江與越之丁。復課諸國。使造船舫。辛未。天皇詔大臣曰。起是月。限十二月以來。欲營宮室。可於國國取殿屋材。然東限遠江。西限安藝。發造宮丁。癸酉。越邊蝦蟻數千内附。冬十月癸未朔庚寅。地震而雨。辛卯。地震。是夜地震而風。甲午。饗蝦蟻於朝。丁酉。蘇我大臣設蝦蟻於家。而躬慰問。是日。新羅弔使船與賀騰極使船泊于壹岐島。丙午夜中地震。是月行夏令。無雲而雨。

乙卯は三日なり○起造大寺。集解云。舒明天皇十一年詔曰。造作大宮及大寺。蓋未落成。而天皇崩。故有此舉。○百濟大寺。拾芥抄云。大安寺本名百濟寺。元慶四年大安寺三綱呈文云。天武天皇以三十市郡百

濟大寺。遷立高市郡。號曰高市大官寺。とあり。なほ大安寺縁起にも出たるを。天武紀に引て云へし。さて此注四字は集解に削れり。いかにも私記の注文の摺入なるへし○船舫。史記注に。舫謂並兩船也とあれど。こゝはたゞの船なり。船舶など云も同じ○辛未は十九日なり○限十二月以來。とある以來を。コナタと訓るを思ふに。十二箇月の内に。造り畢へむとの詔なるへし○欲營宮室。この宮室は飛鳥板蓋の宮なり。扶桑略記に。九月都大和國飛鳥宮。一云川原板蓋宮。とあるは誤あるへし。また十二月遷都於小治田宮。ともあり。此事はここに云ふ。太子傳曆に。此天皇の御事を。明香川原板蓋宮治三年ともある。板蓋宮はさることなれど。川原宮とあるには疑はしきよしあり。下に云○屋材の材を。本に材とあるは誤なり。今集解に據て改○蝦蟻。集解云。檢字書無蟻字。蓋因蝦字誤同施虫。而唐書亦作蟻。とあり。されは夷字に改めたるは。中々非なり○庚寅。八日なり○辛卯。九日なり○甲午。十三日なり○丁酉。十五日なり○泊于壹岐島。集解云。三月庚午所罷歸。蓋途中逗留。以是日至于壹岐島。○丙午。二十四日なり○行夏令。と訓へし。夏令とは政事の事にてはなし。時令のことなり。時令か夏の氣候の流行せることなり。月令に。孟冬行夏令。則國多暴風。方冬不寒。蟄虫復出。などあり○無雲而雨。本に而字脱たり。今秘閣本中臣本信友校本に據て補。

十一月壬子朔癸丑。大雨雷。丙辰夜半。雷一鳴於西北角。己未。雷五鳴於



西北角。庚申。天暖如フクハカナル春氣。辛酉雨下。壬戌。天暖如フクハカナル春氣。甲子。雷一鳴於北方。而風發。丁卯。天皇御キコシノスニハナヒ新嘗。是日。皇太子大臣。各自新嘗。十二月壬午朔。天暖如フクハカナル春氣。甲申。雷五鳴於晝。一鳴於夜。甲午。初發。息長足日廣額天皇喪。是日。小德巨勢臣德太。代カヘリテ大派皇子而誄。次小德粟田臣細目。代シノヒキヨクツル輕皇子而誄。次小德粟山田公。奉誄日嗣。辛丑。雷二鳴於東北角。庚寅。雷一鳴於東。而風雨。壬寅。葬。息長足日廣額天皇于滑谷崗。是日。天皇遷ウツリヨマフ移於小墾田宮。本或云。遷於東宮。兩庭之權宮。甲辰。雷一鳴於夜。其聲若裂。辛亥。天暖如フクハカナル春氣。

十一月壬子。本に壬子二字なし。今中臣本考本に據て補○癸丑。二日なり○丙辰。四日なり○己未。七日なり○庚申。八日なり○辛酉。九日なり。さて此下春海云。恐有誤と云り○壬戌。十日なり○甲子。十二日なり○丁卯。十五日なり○御新嘗。神祇令に。仲冬下卯大嘗祭。義解謂。若有三卯者。以中卯爲二祭日。とあり。或人云。十一月甲卯を祭日と定給ひしは。全此御代よりなりけりと云り。考へし。○皇太子。按に類史に太字なし。諸本或は傍に補太

子ものあるは。此紀に據て書入たるものなるへし。こゝは太字衍なるへし。さるは上にも既に云るか如く。舒明紀に東宮開別皇子とあるか如く。一時は太子にも立給ひしか。蝦夷等か爲に忘れて。位に即玉ふこと能はず。もとの皇子になり給ひしなどにも有へし。されは此御時もまた。太子に立給ふべき時のさまならず。また重胤云。此時の新嘗は。踐祚大嘗會なり。然れども臣下の私の新嘗も。當日物爲へき詔なごそ有けらし。此を以違例と爲て載られたるなめり。然らずては。唯に常の例の事を。殊更に記されさる古書の内なり。と云り。此説に依て考るに。各自とある文に據ても。諸皇子大臣各自の義なるへし。もし皇太子ならんには。天皇の新嘗御めす日に。御自ら別に新嘗し給はんも。事のさまにたかへるか如し。かにかくに類史の方よろしかるへし○甲申は三日なり。此下に次の庚寅九日一條入へし。次に云○甲午。十二日なり○初發天皇喪。集解云。舒明天皇崩。在三十三年十月。至此十有五月。言發喪者。謂發行葬禮也。とあり○巨勢臣德太。本に臣を巨に誤。今諸本に據て改。公卿補任に。德太。雄柄宿禰七世孫。父胡孫子也。男人大臣之後。大日本史に。雄柄七世孫也。曾祖男人繼體朝爲大臣とあり。雄柄此紀には見えねど。續紀十八に。巨勢男柄宿禰之男有三人。星川連日等者云々。伊刀宿禰者云々。平利宿禰者。巨勢朝臣等祖也云々。三代實錄五に。武内大臣第五男。巨勢男韓宿禰。是巨勢朝臣之祖也。とあり。大化五年四月甲午。任左大臣。年五十一。任右大臣。年月未詳とあり。扶桑略記にも。任左大臣。年五十一とあり。孝德紀には德陀古とあり。古は子なり。大日本史に。大化五年進大紫。按續日本紀廢帝紀。稱難波長柄豐崎朝大續德太古。而日本紀不載其進大紫。とあり。さて齊明帝四年薨年六十六。と公卿補任にあり○大派皇子。敏達皇子なり。上に出○粟田臣細目。推古紀十九年に出○輕皇子は。孝德天皇なり○乙



未。十四日なり。○息長山田公。姓氏錄左京皇別。息長真人。出自譽田天皇皇子。稚淳毛二侯王之後也。天武紀十三年十二月。息長公賜姓曰真人。とあり。また姓氏錄右京に。息長連。息長丹生真人あり。みな同じ。息長は近江國坂田郡地名。既に出。氏族志云。按三代實錄貞觀中。使近江坂田郡穴太氏譜圖。與息長坂田酒人二氏一同。坂田郡人息長某。息長近江地名。即其本貫也。と云り。山田は名なり。延喜式。近江國坂田郡山田神社あれば。これも地名なり。さて此氏は。廢帝紀。外從五位下息長丹生真人大國あり。同姓廣長。東大寺古。文書に見えたり。孝謙紀。及萬葉集に。常陸大目息長丹生真人國島。防人部領使と爲れる事みゆ。稱徳紀に。右京人内藏寮史生。息長連清繼賜真人。清和紀。左京人從八位上息長真人淨主等。齊衡中削除籍帳者。至此還附本貫。と云こと見えたり。一條帝時。近江筑摩御厨長息長光保。外記日記にみえ。堀河帝時。内藏史生息長宿禰眞正。朝野群載に出。これら後に宿禰に改めたるなり。崇徳帝時。紀伊牟婁郡人。息長常貞。任木本御厨檢校職。子孫或爲莊司職。其後爲莊司氏と。紀伊莊司氏文書に見えたり。また姓氏錄山城に。息長竹原公。應神天皇二世孫。阿居乃王之後也。とあるは。これも二派王の裔か。未詳。○奉諫日嗣。持統紀に。當麻真人智徳。奉諫皇祖等之騰極次第禮也。古云日嗣也。とあり。日本後紀に。畏哉平安宮爾御坐志。天皇乃天津日嗣乃。御名事遠。恐牟恐母諫白。とあるも。即此事の形なから。後世に残れるなり。○辛丑。二十日なり。○庚寅。九日なり。甲午前前にあるへきなり。信友校本集解等には。前に移し置たり。○壬寅。二十一日なり。○滑谷岡。寺島氏三才圖會に。滑谷岡在大和國高市郡冬野村邊とあり。大和志には見えす。さて二年九月に。又押坂陵に葬奉れり。○小聖田宮は。推古天皇の舊

宮なるへし。さるは此九月に。欲營宮室とありて。起是月限十二月以來。欲營宮室との詔はありつれども。其間しはらく小聖田宮に遷移給ひしなるへし。されは此時のは權宮なり。次に云。遷於東宮南庭之權宮。中臣本に東を常に作れり。いつれにても。まことの宮にはあらて。舊宮の傍なる宮と見えたり。南庭之權宮とあるにて知られたり。さて此より後に。板蓋宮に遷坐しは。明年の四月紀に見えたり。○甲辰。二十三日なり。○辛亥。三十日なり。

是歲。蘇我大臣蝦蟇。立己祖廟於葛城高宮。而爲八佾之舞。遂作歌曰。野麻騰能。飫斯能毗稜栖鳴。倭拖羅務騰。阿庸比拖豆矩梨。舉始豆矩羅符母。

祖廟は祭舎なり。襄十二年傳に。同姓於宗庶。同宗於祖庶。杜預曰。始封君之庶とあり。此氏にては。武内宿禰。蘇我石河宿禰などより以下を。祀れる廟なるへし。○葛城高宮。大和志に。葛上郡高宮已廢。存宮戸森脇二村。高丘廟在森脇村とあり。葛城は此氏の本居なれば。彼處に立しなり。○八佾之舞。通證に。言僭之甚也。論語。子謂季子。八佾舞於庭。注。佾舞列也。左氏傳。天子用八。諸侯用六。とあり。杜預注に。執羽人數八々六十四人。六々三十六人。などもあり。○遂作歌。守部云。八佾の儼の驕れるのみならず。遂にかゝるおふけなき歌をさへに。よめると云意なり。抑雄略天皇朝までは。未漢學の見



には。聊奪はれさりけるに。其後追々吳韓の史生多く入來て。やうく臣連等。彼國の惡風俗を見習ひ。且は進られ。そのかされもして。無禮者等。次々に多くなりて。遂に此蝦夷か如き。狂賤も出來しこそあさましけれ。是を思へは。殺害は婆羅門に起り。臣の僭上は漢學に始りつる事。いちしるし。其が中にも。異國の史生等か入來る比は。殊に甚しかりきと見えたり。其は奈良朝は。頻に漢學行はれつれ。萬葉の歌をみるに。未眞情を失ひ果さりき。これ其程は。行て學ふ事はありしかど。史を召す事のなかりし故とそおほしき。中昔の末にても。鎌倉へ異國の僧をあまた入て後。俄に無敬かりしなどに合せて。思合することこそおほかりけれ。と云れたり○野摩騰能。飯斯能毗稜栖鳴は。大和之忍之廣瀬をなり。守部云。忍は忍海郡。廣瀬は其處に廣瀬神社おはす是なり。天武紀四年に。祭大忌神廣瀬川とあれば。名所の廣瀬川も。一流なれども。此は其川曲の廣き處を云るなり。抄解に。別になして。葛上郡の北忍海郡なれば。彼處にある河の廣瀬を云なり。廣瀬川は。忍海の北に葛下郡ありて。其北の廣瀬郡にある河の名なれば。うれならぬ事明らかし。おしは。大の意。忍海郡の名も。この大廣瀬につきての名なり。と云はひかことなり。さて此に大和之としも云出たるは。此二句に。大八洲を押領せんの下意を比したるなり。と云り○倭陀羅務騰。將渡となり。通證に。此乃到葛城高宮之事と云れたるは。さもあるへし。されどそれは表の意なり。裏の意は別にあり○阿庸比陀豆矩梨は。脚帶手作なり。萬葉に。和可久佐能。安由比多豆久利。解云。手は手わすれ。手はかる。の手にて添言。つくりはつくりひの約なり。と云り。略解には。手して作れば云。よし翁の説なりと云り。○舉始豆矩羅符母は。腰馭なり。母は辭なり。一首の意は守部云。歌の表は。大倭の忍海の河の。廣き

瀬を渡らんと。足結手刷り。腰のわたりまでも引揚て。身の用意すといひて。裏には。今間なく大八洲を。廣く押領せん。それ故に。まつ先祖廟をも。天子と等しく祭りおくそとなり。と云り。解にも。既に解たり。

又盡發<sup>オコシテ</sup>舉<sup>コソラフ</sup>國之民。并百八十部曲。預造<sup>フクツク</sup>雙<sup>フタツツ</sup>墓<sup>ツツ</sup>今來。一曰<sup>オホホサヤ</sup>大陵。爲<sup>ニ</sup>大臣墓。一曰<sup>オホホサヤ</sup>小陵。爲<sup>ニ</sup>入鹿臣墓。望死之後。勿<sup>ナケム</sup>使<sup>イ</sup>勞<sup>イ</sup>人。更<sup>オホホサヤ</sup>悉<sup>オホホサヤ</sup>聚<sup>オホホサヤ</sup>上宮乳部之民。乳部。此云。美文。役<sup>ツツ</sup>使<sup>ツツ</sup>營<sup>ツツ</sup>兆<sup>ツツ</sup>所。於是上宮大娘姬王。發憤而歎曰。蘇我臣專擅<sup>ホソキマ</sup>國政。多行<sup>サヘニス</sup>無禮。天無<sup>ニ</sup>一日。國無<sup>ニ</sup>一王。何由任意。悉<sup>ツツ</sup>役<sup>ツツ</sup>封<sup>ツツ</sup>民。自茲結<sup>ツツ</sup>恨<sup>ツツ</sup>。遂<sup>ツツ</sup>取<sup>ツツ</sup>俱<sup>ツツ</sup>亡<sup>ツツ</sup>。是年也太歲壬寅。

百八十部曲。百八十は多き事を云。部曲。安閑紀に出。そこには氏奴と訓り。此にカキノタミと訓る。カキは雄略紀に。民部をカキへと訓るに同意なり○造雙墓今來。墓下秘閣本水戸本に於字あり。來下太子傳曆に引るに野字あり。今來は既に雄略紀に云り。この墓は大和志に。葛上郡今木雙墓。在古瀬水泥邑。與吉野郡今木村隣此。とあり○大陵小陵は。一本の訓に。オホハカ小ハカと訓たり。此方よろしかるへし○上宮乳部。乳部は。仁德紀七年なる壬生部と同じ。そこに既に云り。御産部なり。こと



に乳部と書るは。凡そ兒を養すわさは。乳をむねとすればなり。上宮乳部は。聖德太子の爲に。定め置れたる乳部の民にて。太子の御子孫に傳へて。領したまふ所の人民なり○注の美文の文を。秘閣本中臣本には父とあり○營兆。中臣本に瑩兆とあり。營はいかにも誤なるへし。孝經注。兆、瑩、界域也。とあり○大娘姫王。聖德太子の御女なり。法王帝説に據に。春米女王。母善岐々美郎女。膳臣加多夫古臣女。或云。山背大兄王庶妹。適山代大兄王。とある姫王なるへし。長谷王同母なり○役封民は。一度上宮乳部と封し給へる地なれば。二主あるへきよしなきを。いかて專擅に役ふへきこのたまへるなり○取俱亡。考本信友校本に。取を所に作れり。其方まされり。さて此事明年二月にあり○太歲壬寅。年代記を考るに。唐太宗貞觀十六年にあたれり。

二年癸卯

二年春正月壬子朔旦。五色大雲。滿覆於天。而闕於寅。一色青霧。周起於地。辛酉大風。二月辛巳朔庚子。桃華始見。乙巳。雹。傷草木華葉。是月。風雷冰雨。行冬冷。國內巫覡等。折取枝葉。懸挂木綿。伺候大臣。渡橋之時。爭陳神語入微之説。其巫甚多。不可悉聽。

辛酉。十日なり○庚子。二十日なり○乙巳。二十五日なり○雹。倭名抄。陸詞云。雹雨冰也。和名阿良

禮○華葉。秘閣本中臣本。華を花に作る○是月風雷冰雨行冬令。氷雨を中臣本に雨氷とあり。さて此月以下九字。次の三月の下にもあれば。もしくは一は衍なるへし○巫覡。倭名抄乞盜類。説文云。巫祝女也。和名加牟奈岐。文字集略云。覡男祝也。和名乎乃古加牟奈岐。とあり。巫は古くカムナキとも。カムコとも云。女子にて神に奉仕せるものと稱なり。名義カムナキは。神を和し奉る意なり。此事豊原の古語拾遺神代に。片巫。觥巫の名見えたれども。詳ならず。神祇官八神殿に。大御巫の仕奉ること。拾遺延喜式等に見えて。いと上古よりのことなり。御巫は合に見えて。集解に取處女堪事充之とあり。臨時祭式にも。凡御巫。御門巫。生島巫。各一人。其中宮東宮唯有御巫各一人。取處女堪事充之。但考選准散事宮人。と有れば。處女を以其事に仕玉へるものなり。なほ合集解に。巫者知鬼神之道者也。とあるを。祝詞皇朝の巫は。其神に仕奉る業を爲のみ。況て少女を用ひ。考に弁へて。知鬼神之道と云るは。漢國の事を云り。るれば。鬼神之道を知ると云へきかは。とあり。其如し。神祇官の八神を齋奉りて。他社と異なれば。取分きて大御巫とは申すことなり。又大宮主御巫と云こと。續紀神龜九年八月の下に見ゆ。又巫名義。神之子にもあるへし。カムノコと云ことは。天野信景が鹽尻に。世俗稱巫女爲神子。或曰。美加武乃古。按楚辭雲中君。朱注云。靈神所降也。楚人名巫。爲靈子。若曰神之子也。以此見之。神子之稱。倭漢同其意。とあるはさることなり。又云。楚辭禮魂に。成禮兮會鼓。傳芭兮代舞。宋注云。芭與葩同。巫所持香草也。とあるは。神代天鈿女命の神事の。彼に傳はれるなりと云れたり。さることなり○折取枝葉云々。通證に。枝葉與柴同。訓繁葉之義。此蓋玉申之類。萬葉集云。爾波奈加能。阿須波乃可美爾。古志



波佐之。阿例波伊波々牟。加倍理久麻低爾。又云。齋戶木綿取四手而忌日管。とあり。枝葉はまことに後に云玉申なるへし。巫覡ともか。手毎にもたりしものなるへし。○大臣度橋。これはいと心得かたきを。つら／＼考るに。上文元年の下に。蘇我大臣蝦夷。祖廟を葛城高宮に立て。八僧の儔を爲し。遂に歌を作りて。やまごのおしのひろせを渡らむと。あよひたつくり腰つくらふも。と云るは。其處に注せりし如く。蝦夷の此祖廟に詣むと。いみじき裝束を爲して。已に乗輿車駕にもまされる。出立を爲しなるへし。さて歌には。阿庸比拖豆矩梨。舉始豆矩羅符。とはあれと。まことには。廣瀬に大橋をわたし。其橋を亘るさまを。水を渡るか如くに詠るなるへし。されは其橋を打渡らむとするさまの行装は。いかにも嚴重しき事なりしなるへし。其今渡らむとする前驅を伺候ひて。大臣のよろこぶへき祥瑞ともを。神語に托して。巫覡ともか。諂諛ふ心に。争ひ陳じものと通えたり。さてまたこの事下文三年二月の下にもあり。それは重複にもあるへし。また按に。其時にも劔池の蓮の祥瑞を得て。其を寺に献じなごして。再ひかの祖廟に詣てしこと。ありしにもあるへし。さらはまた此の時の例を追て。巫覡ともか賜物を得んとて。此年も前の如く。神語を陳じにもあるへし。いつれにしても。かゝる事の始まりしは。風移るへき兆なりとて。老たる人は眉をひそめけらし。○神語入微之説。此時いかなることを陳けん知られねと。ことゝある時に。かゝる説など陳るは。古風の残れるものなり。されと今。巫等か蘇我氏に諛へる。また下文なる。東國不盡河にて。大生部多加虫を祭りて。村里の人を勧めける時。巫

覡等に神語に託して。言はしむる説など。此頃となりては。神語にことつけて。人を欺きし事をり／＼あり。既に乞盜類となりしなりけり。倭名抄に。乞盜類に巫覡遊女など並へ出されたる。このよしなり。

三月辛亥朔癸亥。災難波百濟客館堂。與民家室。乙亥。霜傷草木華葉。是月。風雷雨氷。行冬令。夏四月庚辰朔丙戌。大風而雨。丁亥。風起天寒。己亥。西風而雹。天寒人著絺袍三領。庚子。筑紫大宰。馳驛奏曰。百濟國主兒翹岐弟王子。共調使來。丁未。自權宮移幸飛鳥板蓋新宮。甲辰。近江國言雹下。其大徑一寸。

癸亥。十三日なり。○家室。中臣本に室を屋とあり。○乙亥。二十五日なり。○雨氷。倭名抄。私記云。雨氷和名比左女。俗云比布留。爾雅注云。霰。冰雪雜下也。孫愐云。寒。雨雪相雜也。和名美曾禮。○丙戌。七日なり。○丁亥。八日なり。○己亥。二十日なり。○庚子。二十一日なり。○百濟國主兒云々。考本集解。主を王に作る。さて翹岐此より先に本國に歸りしが。此時に又來りしものと見えたり。○丁未。二十八日なり。類史遷御條に。此日を庚子の日に係たり。さらは此丁未二字は衍なるへし。此事次に云。○自權宮移幸飛鳥板蓋



新宮。これ前年しはし小墾田權宮に移り坐しか。今新造の宮に移幸せるなり。扶桑略記に。一説云。同年移都於飛鳥板蓋新宮。是大和國高市郡丘本宮同地也。とある是なり。此年より此大宮に坐て。天下を治しとなりけり。さて其地は大和志に。板蓋宮川原宮。俱在國飛鳥二村間。舊都趾要覽云。高市郡高市村大字川原。字宮山。村社板蓋神社所在の地。これ皇居の一局部なり。とあり。この宮號にはいと紛らはしき事あり。齊明紀元年に云るを見るへし。さて板蓋とは。上代の大宮は多く葺草蓋なるを。此御時に檜皮葺に造り給ひしよりの稱なるへし。齊明紀瓦覆の名目あるにても。しかならんと押測られたり。○甲辰は二十五日なり。大日本史には。此條を移して。上の丁未上に置たり。其注に今推干支訂之と云り。此事上にも云り。

五月庚戌朔乙丑。月有蝕之。六月己卯朔辛卯。筑紫大宰馳驛奏曰。高麗遣使來朝。群卿聞而謂之曰。高麗自己亥年不朝。而今年朝也。辛丑。百濟進調船。泊于難波津。秋七月己酉朔辛亥。遣數大夫於難波郡。檢百濟國調與。獻物。於是大夫問調使曰。所進國調。欠少前例。送大物。不改去年所還之色。送群卿物。亦全不將來。背違前例。其狀何

也。大使達率自斯。副使恩率軍善。俱答詰曰。即今可備。自斯質達率武子之子。是月。茨田池水大臭。小虫覆水。其虫口黑而身白。八月戊申朔壬戌。茨田池水變如藍汁。死虫覆水。溝瀆之流亦復凝結。厚三四寸。大小魚。鼻如夏爛死。由是不中喫焉。

乙丑。十六日なり。○辛卯。十二日なり。○自己亥年不朝。舒明天皇十一年より。今年に至て五年なり。○辛丑。二十三日なり。○辛亥。三日なり。○背違。秘閣本中臣本。背を皆に作る。○達率武子之子。集解云。元年紀曰。以小德授百濟質達率長福。蓋是。とあり。○茨田池。河内國茨田郡平池村。既出。○八月の前。閏七月あり。八月下。戊月二字あり。衍。秘閣本中臣本考本等に據て削。○壬戌。十五日なり。○藍汁。和名抄。藍澱。阿井之流。○九月の前に。秘閣本中臣本に。閏八月十九日。吉士國勝。吉士久比奈。遣於百濟。の十九字あり。交本消之とあり。されど此文は疑はし。八月戊申朔。九月丁丑朔の間に。閏月あるへきやうなし。閏月は七月なり。また十九日と日を書れたるも。例にたかへり。かにかくに誤なるへし。

九月丁丑朔壬午。改葬息長足日廣額天子于押坂陵。或本云。呼廣額天皇。爲高市天皇也。丁亥。吉備島皇祖母命薨。癸巳。詔土師娑婆連猪手。視皇祖母命喪。天皇自



皇祖母命臥病。及至發喪。不避床側。視養無倦。乙未。葬皇祖母命于檀弓崗。是日大雨而雹。丙午。罷造皇祖母命墓。仍賜臣連伴造帛布。各有差。是月。茨田池水漸變。成白色。亦無臭氣。

○壬午。六日なり○改葬。本に改字なし。今京極本及扶桑略記に據て補○押坂陵。諸陵式。押坂内陵。高市岡本宮御宇舒明天皇。在大和國城上郡。東西九町。南北六町。陵戸三烟。太子傳曆に。押坂内山陵とあり。記傳云。此御陵。大和志に。在忍坂村上。今稱丹家と云て。押坂墓田村皇女。押坂内墓。大伴皇女。押坂墓鏡王。俱在舒明天皇陵域内と云り。此御陵忍坂村の東北方の山上にありて。南方崩れて。大なる岩搆へ。少し顯れて見ゆと云り○高市天皇。萬葉集に。高市岡本宮御宇天皇とあり○丁亥。十一日なり○吉備島皇祖母命は。吉備姫王。即天皇並に孝德天皇の大御母にます。島は地名にて。大和高市郡なり。其地に住ひしなるへし。後に舒明天皇の御母も。其處に住坐りと通えたり。さて祖母は親母の義なり。記傳云。御母と申すことなるに。皇祖母ともし書れたる事は。古は母を多く美意夜と申して。古書ともに御祖とかければ。其例のまゝに祖字を書き。又皇祖尊と書ては。先代天皇にまさるゝ故に。御母なる事を知しめむ爲に。母字をも添られたる物なり。かゝる例ほかにもあり。と云れたるか如し。然るに集解に。島命即爲外祖母也。

○癸巳。十七日なり○皇祖母命喪。本に命字脱したり。今秘閣本中臣本信友校本に據て補○乙未。十九日なり○檀弓崗。諸陵式。眞弓丘陵。岡宮御宇天皇。在高市郡。檜隈墓。吉備姫王。在高市郡檜隈陵域内とあり。志に眞弓村あり。さて此御墓を志に在越村とあり。陵墓一覽に。吉備姫王墓。高市郡平田村。岡宮天皇陵。高市郡森村。とあり○大雨。考本に大を氷に作る○丙午。三日なり○漸變。漸下。中臣本及太子傳曆拾遺記所引文に。一漸字あり。

冬十月丁未朔己酉。饗賜群臣伴造於朝堂庭。而議授位之事。遂詔國司。如前所勅。更無改換。宜之厥任。慎爾所治。壬子。蘇我大臣蝦蟇。緣病不朝。私授紫冠於子入鹿。擬大臣位。復呼其弟曰。物部大臣。大臣之祖母。物部弓削大連之妹。故因母財。取威於世。

己酉。三日なり○群臣下。與清曰。恐は國造二字脱かと云り○如前所勅。類史に勅を賜に作るは是ならず。さて此處の文。考云。位を授給ふ御つもりにて有たれども。又思召ありて。國司らに。只今までの通りに。任所を慎めと命し給ふなり。と云り。されと授位の事はありしか。それを省けるものにもあるへし。たゞ議し給ふのみとも定めかたし。さて前所勅とはいかなる勅にか。載されは知かたし○



壬子。六日なり○私授紫冠云々。通證云。弄朝權。亂名器。罪之大者也。據推古十一年紀。則紫冠蓋大德之冠也。孝德三年紀。以紫冠爲第二。此時改舊制也。と云り○呼其弟。弟は誤なるへし。弟は恐くは号かとも思ひ。久米幹文は名かと云り。されど太子傳曆には。復呼其弟。字曰物部大臣とあり。さも有へし○物部大臣。姓氏錄布留宿禰條に。齊明天皇御世。宗我蝦夷大臣。號武藏臣。物部首。并神主首。云々とあり。齊明天皇は皇極天皇の誤なるへし。此事は既に垂仁紀にも云り。さてかく物部氏を胃せるは。大連の遺財を領せんか爲なり○祖母。此事は崇峻天皇紀に云り。倭名抄祖母於波とあり。大母なり。

戊午。蘇我臣入鹿。獨謀將廢上宮王等。而立古人大兄爲天皇。于時有童謠曰。伊波能杯爾。古佐屢渠梅野俱。渠梅多爾母。多礙底騰哀羅栖。歌麻之之能鳥賦。蘇我臣入鹿。深忌上宮王等。威名振於天下。獨謀僭立。是月。茨田池水還清。

戊午。十二日なり○立古人大兄。秘閣本。立字なし。舒明天皇皇子。母蘇我馬子の女なるか故に。立むとしたるなり。此時皇太子に立たりしなるへし。これにても前に中大兄命の東宮を。廢したりしことありけんとは知られたり○童謠は。新撰字鏡。詔和佐字太と注せり。態歌なり。この事神代紀注に云り。守部云。童謠とは。時の異變を。善惡ともに。神の謠はしめ玉ふを云。即和邪は神態の和邪なり。此

は上宮王等の亡ひ玉ふよしを。豫て衝にて歌ひたるなり○伊波能杯爾。於岩上なり。下文の本注に喻上宮とあり○古佐屢渠梅野俱。小猿米燒なり。本注に。以古佐屢。喻林臣。以渠梅野俱。喻燒上宮とあり。守部云。記者の自注は。信みにもならされど。是は其世の傳へて見えて。何れもよく當れり。初句。上と云を。上宮に喻へたるのみならず。彼斑鳩宮は。石上とも云へきものなり。二句。蝦夷か子なれば。入鹿を喻へて子孫とも云へきものなり。また上宮太子の王及妃等を。燒亡すなりければ。子妻燒と云ふへきものなり。と云り。太子傳曆に。贈駒山に子孫の岩あり。この歌によしある事か。考へし。○渠梅多爾母。米たにもは辭なり。俗に米なりとも。又米てもなど云かこことし○多礙底騰哀羅栖は。喫而行去なり。飲食ふことを古く多礙と云り。上宮法王帝説。伊我留我乃。止美能井乃美豆。伊加奈久爾。多義氏麻之母乃。止美乃井能美豆。萬葉二。妻毛有者。採而多宜麻之。佐美乃山。野上乃宇波疑。過去計良受也。とある多義多宜に同じ。此句太子傳曆には。やかて喫而今核と書るにて明らけし。これをシヒアイヤサ。子と訓るは非なり。騰哀羅栖は通らせなり。この詞の事は。神代下卷注に云り。山背王の山隠り給はむに。せめて米なりとも。喫て通らせとあり。下文に。四五日間淹留於山。不得喫飲とある。其前兆なり○歌麻之之能鳥賦は。山羊之老翁なり。下文に。山背王頭髮斑雜。毛似山羊と云る。此喻なり。一首の意は。こたひ上宮の王等をは。蘇我の子孫か燒亡すなり。遁れかたかれど。其時に當りて。せめて米たにも喫て走ませ。山羊に似たる山背王よとなり○獨謀僭立。謀を本に謀に誤れり。今改む。僭崇峻紀に替に作る。僭替同。正字通僭他協切音鐵。僭



倭狡猾也。ごあり。なほ崇峻紀に云り。訓は通證に。獨擅之意。雄略紀。專用威命四字。訓古呂多知奴。ごあり。古玉篇。和玉篇に。替に。なほ雄略紀に云り。

十一月丙子朔。蘇我臣入鹿。遣小德巨勢德太臣。大仁土師娑婆連。掩山背大兄王等於斑鳩。或本云。以巨勢德太臣。倭馬飼首。為三將軍。於是奴三成。與數十舍人。出而拒戰。土師娑婆連中。箭而死。軍衆恐退。軍中之人相謂之曰。一人當千。謂三成歟。山背大兄仍取馬骨。投置內寢。遂率其妃并子弟等。得間逃出。隱膽駒山。三輪文屋君。舍人田目連。及其女菟田諸石。伊勢阿部堅經。從焉。巨勢德太臣等。燒斑鳩宮。灰中見骨。誤謂王死。解圍退出。

掩山背大兄王等於斑鳩。かく俄に掩ひまつれるは。其不意を襲ひしものなるへし。此時諸王等の然諾し給ひし補闕記の文は。既に上に引り。鎌足家傳云。後崗本天皇二年冬十月。宗我入鹿與諸王子共謀。欲害上宮太子之男山背大兄等。曰。山背大兄吾家所生。明德惟馨。聖化猶餘。崗本天皇嗣位之時。諸臣云々。舅甥有隙。亦依誅。境部臣摩理勢。怨望已深。方今天子崩殂。皇后臨朝。心必不安。焉无亂乎。不忍外甥之親。以成國家之計。諸王然諾。但恐不從。害及於身。所以共許也。ごあり。倭馬飼首云々。

系下に云。孝德紀大化元年馬飼造名あり。續紀天平十一年。養得馬飼連乙麻呂。天平神護元年。播磨守從四位上。部下宿禰子麻呂等言。部下賀古郡人。外從七位下馬養造人上款云。人上先祖。吉備都彥之苗裔。上道臣息長借鎌。於難波高津朝廷。家居播磨國賀古郡印南野。其六世之孫牟射志。以能養馬。仕上宮太子。被任馬司。因斯庚午年造籍之日。誤編馬養造。伏願取居地之名。賜印南野臣之姓。國司覆審所申有實。許之。ごあるによらは。こなる馬飼首。また天平十一年紀なる養得馬飼連も。みな同姓なるへし。將軍。考本に軍將に作れり。奴は。斑鳩寺の寺奴なるへし。太子傳曆云。家人馬手。革衣。香見。中見。大吉。波多。犬養。弓削。許母。河見等十人。為奴婢首領。其胤子今在法隆寺。分在四天王寺。婢黑女。奴連。鷹等。常訴冤柱。連鷹弟益浦。為性堪領寺。為法隆寺法頭。冤柱奴婢等根本。於妙教寺。訪定藏置。于今未免。ごあるは。斑鳩寺の奴にはあらざれども。寺々にかゝる奴婢の多かりしご知へし。右等の奴名。補闕記にも見えたり。誤字あり。山背大兄下。王字を脱するか。内寢の訓は夜殿なり。和名抄居處部。寢殿彌夜。方言要目云。寢室也與止乃。得間。太子傳曆に。從間道。出云々ごあり。田目連。姓氏錄左京神別。多米連。多米宿禰同祖。神魂命五世孫。天日和志命之後也。成務天皇御世。仕奉炊職。賜多米連也。右京多米宿禰。神魂命二十二世孫。意保止命之後也。攝津多米連。神魂命五炊寮。御飯香美。特賜嘉名。大和多米宿禰。神魂命二十二世孫。意保止命之後也。攝津多米連。神魂命五世孫。天比和志命之後也。河内多米連。神魂命兒。天石都倭居命之後也。また政事要略に。姓氏錄を引て。



此文今の録。多米宿禰。出三神魂命五世孫。天日鷲命也。四世孫四上一有二十小長田。稚足彦天皇謚成御世。仕奉大炊寮。御飯香美。特賜嘉名。負三朕御多米。六世孫三枝連男倭古連之後。天停中原真人天皇謚天御世。改賜宿禰上に云る意保止命。天石都後居。命の後とあるも。其本は一なり。天武紀十三年十二月。田目連賜姓曰宿禰。氏人は。光孝紀に大炊寮々掌多米貞成あり。類聚符宣抄。一條帝時。左大史多米宿禰國平あり。後に朝臣を賜。此事伊呂波字見ゆ。外記日記に左衛門少志多米國定あり。なほ多米の事は。神代紀下卷天甜酒の下に云おけり。引合すへし。○菟田諸石は。菟田に住る人なるへし。○伊勢阿部堅經。伊勢に在る阿部氏なり。通證に。多氣郡有敢氏人。見日本紀。敢は阿部也。今安濃郡有阿部村とあり。○見を。美豆々と訓るは。見出而の義なり。神武紀にもあり。○退去。本に去を出とあり。今中臣本信友校本に。一本作去とあるに據て改。

由是山背大兄王等。四五日間。淹留於山。不得喫飲。三輪文屋君進而勸。曰。請移向於深草屯倉。從茲乘馬。詣東國。以乳部爲本。興師還戰。其勝必矣。山背大兄王等對曰。如卿所導。其勝必然。但吾情冀。十年不役百姓。以一身之故。豈煩勞萬民。又於後世。不欲民言由吾之故。喪己父母。豈其戰勝之後。方言大夫哉。夫損身固國。不

亦大夫者歟。有人遙見上宮王等於山中。還導蘇我臣入鹿。入鹿聞而大懼。速發軍旅。述王所在於高向臣國押。曰。速可向山求捉彼王。國押報曰。僕守天皇宮。不敢出外。入鹿即將自往。于時古人大兄皇子。喘息而來問。向何處。入鹿具說所由。古人皇子曰。鼠伏穴而生。失穴而死。入鹿由是止行。遣軍將等。求於膽駒。竟不能覓。

淹留の訓は。經住の意なるへし。○不得喫飲の訓。モノモエマウノホラスのノは。衍なるへし。○深草屯倉は。山城國紀伊郡深草あり。上宮の屯倉なるへし。○從茲乘馬。屯倉には御料の馬あるへければなり。○乳部は。上宮太子の御産部と。定置れたる民の。東國に在しなり。○必矣の訓カナラシハ。異ならしか。○冀十年云々。與清云。此十年は上宮薨後の間を謂ふか。然れども太子は推古二十九年に薨し給へれば。今年に至りてすてに二十三年を經にたり。此十年の語疑へしと云り。○高向臣國押。高向臣舒明紀に出。さて此人は續紀に。和銅元年。攝津大夫從三位高向朝臣麻呂薨。難波朝廷刑部尙書國忍之子也。とあり。○求捉。本に捉を投に作る。今中臣本集解に據て改む。訓カスウ。カスキイ。イは行な。齊明紀天武紀にも出。○守天宮云々は。非常に備ふるを託言に。此任を遁れしなるへし。○喘息の訓。雄略紀駭を訓るに



同じ。既に云り○鼠伏穴而生云々。集解に。按言喻入鹿莫自往と云るか如く。入鹿もし此を離れな  
は。いかなる難に逢も知かたじとなり。入鹿を惡むものあまたあるべければなり。

於是山背大兄王等。自山還入斑鳩寺。軍將等即以兵圍寺。於是山背大  
兄王。使三輪文屋君謂軍將等曰。吾起兵伐入鹿者。其勝定之。然由  
一身之故。不欲傷殘百姓。是以吾之一身賜於入鹿。終與子弟妃妾。  
一時自經俱死也。于時五色幡蓋種々伎樂。照灼於空。臨垂於寺。衆人仰  
觀稱嘆。遂指示於入鹿。其幡蓋等變爲黑雲。由是入鹿不能得見。蘇  
我大臣蝦蟇。聞山背大兄王等摠被亡於入鹿。而嗔罵曰。噫入鹿極甚愚  
癡。專行暴惡。爾之身命不亦殆乎。

定之の訓は。無慮なり。一訓ウツムナシは。慮も無なり○子弟妃妾云々。太子傳曆一説曰。癸卯年十二  
月十一日丙戌。亥時蘇我大臣兒林臣入鹿。致奴王子兒名輕王。巨勢德太古臣。大伴馬甘連。中臣鹽屋連枚  
夫等六人。發惡逆計。太子々孫男女二十三人王。補闕記無罪被害。山背大兄王。殖粟王。茨田王。率末呂

王。古(補闕)管手女王。春米女王。近代王。桑田女王。磯部女王。三枝王。三枝末呂古王。馬屋女王。財王。日置王。片  
岡女王。白髮部王。手島女王。孫難波王。末呂女王。弓削王。佐保女王。佐々王。三島女王。甲可王。尾張王。  
見數二十五人の中。女王九人なり。かくては二十三人とたかへるか如し。こゝに上宮太子拾遺記に。  
上宮記下卷注云とて。引たる系圖は。いと古體なるものにて。かつ詳なれば。今それをくらへ見るに。  
殖粟王。茨田王。率末呂王。管手女  
王。四柱は。太子の御兄弟なり。太子の御子の中に。近代王と申すは。己乃斯里王。字長谷王とあり。帝説には。近  
代王なし。磯部女王は。波等利女王とあれは。磯は磯の誤にて。ハトリなり。三枝王は一柱の御名にあらず。系  
圖に。兄伊等斯古王。弟麻里古王。次に馬屋女王三人。三子にて生れ玉ふに依て。それを惣稱して三  
枝王と申せるよし見えたり。但し右に引る太子傳には。伊等斯古王を缺たり。三枝王はその王にあて  
る數ふへし。補闕記に。此王なきはよろし。但し  
馬屋女王なきは。脱たるなるへし。さて其孫とある中に。末呂女王は麻里古王とあり。次に佐保  
女王。帝説に  
もなし。三島女王と申すは。系圖になし。帝説に  
はあり。かく考もてゆけば。太子の御兄弟四人。太子の  
御子十三人。御孫六人或は七人。右の三島  
女王を入れて云。にて。二十三人の數は合り。されは右の中。佐保女王。三島女  
王二柱は。誤なるへし。帝説に云る所も。大方此系圖に同じけれど。此系圖の方は。合數をさへ其御  
子等の下に記して。いと詳なれば。今は其方を正しとして。さて此傳曆なる二十三人の數にも合へ  
は。其によるへし。なほ此系圖は。其他にもめつらしき事とも  
あまたあり。極めて當時のもの見えたり。○自經。本に經を經に誤れり。秘閣本に據て改。  
中臣本信友校本に。經下而字あり○五色幡蓋云々。平田翁説に。かゝる事は。實は取るにも足らぬ事な



るを。まことにさる事ありしならば。其はいかなる禍神の心にてか。世人を迷はしたるなり。と云れたり。當世にはかゝる事を。いみじと信じられたる心より。記し傳へたるなりけり。○寺は斑鳩寺なり。さて山背大兄王の御墓。此地にあり。式に北岡墓これなり。大和志に。在平群郡法隆寺。墓上有寺。曰法積寺。四畔圓丘五。とあり。大兄王のみにあらず。此時死り給ひし二十三人の御屍をも取集めて。此處に葬りしものなるへし。○備之。記樞原宮段に。屬言云。伊賀所作仕奉云々とある。記傳に。伊賀風土記。吾娥津媛命の條によるに。伊賀は阿賀と通へり。さておのれとは自己を云稱なるに。又人を賤めて云にも用ゐ。おれとは人を賤めて云稱なるを。今世にはみつからの事を然云。これらの例を以見れば。阿賀と云も自己の事なるを。又人を賤めて云にも用しにや。これまた今世にも然りと云り。こゝも其ご一なるへし。此事はなほ神武紀に云り。鎌足家傳云。父豊浦大臣愠曰。鞍作如爾癡人。何處有哉。吾宗將滅。憂不<sub>レ</sub>自勝。とあり。

時人説<sub>レ</sub>前<sub>レ</sub>謠<sub>レ</sub>之應<sub>レ</sub>曰。以<sub>レ</sub>伊波能杯<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>。而<sub>レ</sub>喻<sub>レ</sub>上宮。以<sub>レ</sub>古佐屢<sub>レ</sub>。而<sub>レ</sub>喻<sub>レ</sub>林臣。林臣入<sub>レ</sub>。以<sub>レ</sub>渠梅野<sub>レ</sub>俱<sub>レ</sub>。而<sub>レ</sub>喻<sub>レ</sub>燒<sub>レ</sub>上宮。以<sub>レ</sub>渠梅拖<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>母。陀礙底騰<sub>レ</sub>哀羅<sub>レ</sub>栖。柯麻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>鳴<sub>レ</sub>臑<sub>レ</sub>。而<sub>レ</sub>喻<sub>レ</sub>山背王之頭髮<sub>レ</sub>班雜<sub>レ</sub>毛。似<sub>レ</sub>山羊。又曰。棄<sub>レ</sub>捨<sub>レ</sub>其宮。匿<sub>レ</sub>蕃息。

深山相也。是歲。百濟太子餘豐。以<sub>レ</sub>蜜蜂房<sub>レ</sub>四枚。放<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>三輪山。而<sub>レ</sub>終不<sub>レ</sub>蕃息。

林臣。太子傳曆に。蘇我大臣兒林臣入鹿とあり。林地名なるへし。○頭髮班雜。訓フ、キとあるに依へし。フ、セは誤なるへし。通證に。源順集云。君きかは鳴け杜鵑黒髮の。布々伎になれば我もおどらす。今按。落和名布々木。以<sub>レ</sub>其花老如<sub>レ</sub>轉逢<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>名。又雪曰<sub>レ</sub>布々伎。亦此義也。曰<sub>レ</sub>波多禮。與<sub>レ</sub>班訓義通。謂<sub>レ</sub>其半消<sub>レ</sub>也。と云り。按に雪の布々伎は。吹雪の義なるへし。さらば此のフ、キとは異なれど。落はさもあるへし。或人云。このふとまきと云調。いと希なり。四季物語に。すりしきの眼あしきかざり。○山羊。倭名抄毛群部。麀羊。字亦作<sub>レ</sub>羴。加萬之師。箋注云。新撰字鏡。狹。とあり。名義通證に。鹿也と云り。又或説に。鎌鹿なりとも云り。此獸の角節ありて。鎌の如き所あり。と云り。○餘豐。この人の事。既に舒明紀に云り。舒明紀に。豐草とあるは誤に。豐下。環字を補へるは非なり。○蜜蜂房。倭名抄蟲多部。蜜蜂和名美知波知。蜜見<sub>レ</sub>飲食部。黒蜂在<sub>レ</sub>竹木<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>孔。又有<sub>レ</sub>室者也。とあり。このもの事。箋注に委し。

三年春正月乙亥朔。以<sub>レ</sub>中臣鎌子連<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>神祇伯。再<sub>レ</sub>三固辭<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>就。稱<sub>レ</sub>疾退<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>三嶋。于<sub>レ</sub>時輕皇子患<sub>レ</sub>脚<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>朝。中臣鎌子連<sub>レ</sub>曾<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>輕皇子。故<sub>レ</sub>詣<sub>レ</sub>。



彼宮。而將侍宿。輕皇子深識臣鎌子連中之意氣高逸。容止難犯。乃使寵妃阿陪氏淨掃別殿。高鋪新褥。靡不具給。敬重特異。中臣鎌子連便感所遇。而語舍人曰。殊奉恩澤。過前所望。誰能不使王天下耶。謂下苑舍人。爲中駟使也。舍人便以所語陳於皇子。皇子大悅。

鎌子連は。姓氏錄左京神別。藤原朝臣。天兒屋根命二十三世孫。内大臣大織冠中臣連鎌子。古記云鎌足。公卿補任に。天兒屋尊二十二世孫。小徳冠御食子之長子也。などあり。御食子は。可多能詰大連の子也。系圖にあり。孝徳紀には鎌足連ともあり。さて大鏡に。鎌足常陸に生るとあり。この事は他にも證ありて。既に云へり。然るにまた鎌足家傳に。内大臣諱鎌足。字中郎。大倭國高市郡人也云々。美氣古卿之長子也。母曰大伴夫人。ごあり。元亨釋書にも倭國の人ごあり。通證に。今按。欽明紀有。中臣連鎌子。此蓋鎌祖名者也。猶神功紀允恭紀。俱有中臣類推也。鳥賦津使主也。且此案稱鎌子。自種子命始。如國稱國子。鎌氣稱御食子。亦以類推也。○神祇伯。この事既に繼體紀に云り。但し蒲生氏か職官志に。此に神祇伯ご云るは。祭主なるへし。繼體紀にも此稱あり。伯ごあるは。追稱なるへしと云り。伯の追稱なることは本よりなれども。此なるはけにも祭主なるへし。祭主は此氏の職任なれば。さもあるへし○三嶋は。攝津國なり。既出。此處には此氏の別業ありしこと。後の書にも見えたり。家傳云。及岡本天皇御宇之初。以良家子。簡

授錦冠。令嗣宗業。固辭不受。歸去三嶋之別業。養素丘園。高尙其事云々(感)訓カマケ。既に雄略紀に出○阿陪氏。孝徳大化元年に。元妃阿倍倉梯麻呂女小足媛ごある人か。詳ならず○語舍人曰。通證云。此孝徳紀所謂。立舅答民望之張本。雖似出一時知己之感。而其不食言也。蓋有自信者。可二以見二耳と云り。

中臣鎌子連爲人忠正。有匡濟心。乃憤蘇我臣入鹿失君臣長幼之序。挾關闕社稷之權。歴試接王宗之中。而求可立功名哲主。便附心於中大兄。疏然未獲展其幽抱。偶預中大兄於法興寺槻樹之下。打毬之侶。而候皮鞋隨毬脫落。取置掌中。前跪恭奉。中大兄對跪敬執。自茲相善。俱述所懷。既無所匿。復恐他嫌。頻接而俱手把黃卷。自學周孔之教於南淵先生所。遂於路上往還之間。並肩潛圖。無不相協。

忠正。本に忠を惠に作る。今中臣本通證引一本。及集解に引壺本等に依て改○匡濟心。通證に匡是匡之誤字。二字見魏志ごあり。後漢書にもあり○蘇我臣。臣の上。中臣本大字あり○歴試の訓。ツカヒ



を。ツタヒとあるは誤なるへし。尙書序に。歴三試諸難。また三十在位。注に歴使二年。なごありて。使へて試用せらるゝを云詞なり。傳への意にはあらず。○接王宗。接の下秘閣本於字あり。王宗は王家之同宗の義にて。後に云宮達の御事なり。さて家傳には。歴見王宗とあり。○疏然。本のまよにても聞えたれど。猶按に。疏は雖の字の誤にもあるへし。○法興寺の下。契冲校本に西字を補ひしは。據あるか。おほつかなし。○打毬。倭名鈔。打毬。内典謂之拍毬。師說云萬利字知。公羊傳注曰。蹴鞠以足逆踏也。世間云萬利古由。とあり。此の訓の事は既に神代紀に云り。○皮鞋。通證引唐令曰。烏重皮底。倭名抄。線鞋千開乃久都。錦鞋此間音今開。絲鞋俗云之賀伊。○黃卷。聖賢の書の事を。漢土にて黃卷と云り。代醉編に。古人寫書皆用黃紙。以藥染之。所以辟蠹也。故名書曰黃卷。とあり。○周孔之教。周公孔子を云て。すへて聖賢の道の教なり。○南淵先生。通證に。先生未詳其名。疑南淵朝臣之先也。南淵氏也。有儒名云々。と云れと詳ならず。按に南淵朝臣は。繼躰皇子仲王より出たる皇別なり。公卿補任に見えたり。此は姓にはあらず。南淵に住る人にて。集解に。按推古天皇十六年紀。所謂學問僧南淵漢人請安是也。按此時釋氏兼儒。如孝德天皇之時。曼法師任國博士是也。由是觀之。請安亦兼得周孔之教者。故稱先生。と云る方叶ふべし。家傳云。嘗群公子成集于曼法師之堂。謂周易。馬。大臣後至。鞍作起立。抗禮俱坐。曼奇相。實勝此人。願深自愛。此文によらば。曼法師。曼法師。擊目留矣。因語大臣云。入吾堂者。无如宗我大耶。但公神もしくは曼法師南淵に住しにもあらんか。さて通證に。高市郡稻淵村。有神明家。或謂先生墓也。とあるは。まことに然るか。尋ぬへし。

於是中臣鎌子連議曰。謀大事者。不如有輔。請納蘇我倉山田石川麻呂長女爲妃。而成婚姻之昵。然後陳說。欲與計事。成功之路。莫近於茲。中大兄聞而大悅。曲從所議。中臣鎌子連即自往媒要。訖而長女所期之夜。被偷於族。族。謂一身。狹臣也。由是倉山田臣憂惶。仰臥不知所爲。少女恠父憂惶。就而問曰。憂惶何也。父陳其由。少女曰。願勿爲憂。以我奉進。亦復不晚。父便大悅。遂進其女。奉以赤心。更無所忌。中臣鎌子連舉佐伯連子麻呂。葛木稚犬養連網田於中大兄。曰云々。

蘇我倉山田。本に倉山を倒せり。今釋紀考本等に據て改む。此人は公卿補任に。右大臣蘇我山田石川麻呂。馬子大臣之孫。雄正子臣之子也。とあり。舒明紀に。蘇我倉山田臣。更名雄當とある。即雄正なり。蘇我も倉も地名。既に出。記欽明皇子に。宗賀之倉王と申す坐り。さて此人を引入れし事は。家傳云。知山田臣與鞍作相忌。白中大兄曰。察山田臣之爲人。剛毅果敢。威望亦高。若得其意。事必須成。請先作婚姻之昵。然後布心腸之策。○婚姻。爾雅曰。婿之父爲婚。婦之父爲婚。婦之父母。婿之父母。相謂爲婚姻。又云。女子之夫爲婚。和名無古。又云。夫之父曰舅。和名之字止。見和名鈔。と通證に云



り。字鏡。婚婦人之父。志比止とあり。訓ムココトは。ムコシヒトの誤なるへし。さて名義。ムコは親子。シヒトは大人なり。○曲從。通證に。見羊祐表。曲枉也。舊讀非。とあるは却て非なり。本の訓のまゝにてよく聞えたり○媒要。本に媒を謀に作る。今秘閣本中臣本考本。通證引校本等に據て改○注族謂身狹臣。この人の事は孝徳紀に。蘇我臣日向字身刺。諸倉山田大臣於皇太子。曰。僕之異母兄麻呂法王帝說に。曾我日向子臣字無邪志臣。とあり。身刺は即牟狹にて。山田麻呂の異母弟なり。家傳云。及三子春忽至。百兩新迎。其弟武藏挑レ女將去。山田臣憂惶不レ知所レ爲云々。終進ニ少女。中大兄怒ニ武藏之无レ禮。將レ行ニ刑戮。大臣諫曰。既定ニ天下之大事。何忿ニ家中之小過。中大兄即止矣。然後大臣徐說ニ山田臣曰。大郎暴逆。人神咸怨。若同惡相濟者。必有ニ夷レ宗之禍。公慎之。山田臣曰。吾亦思之。敬從レ命焉。遂共定レ策欲レ舉レ兵○遂進其女。天智紀納ニ四嬪。有ニ蘇我山田石川麻呂大臣女。曰ニ遠智娘。或本云。美濃津子娘生ニ一男一女。とありて。持統天皇の御母なり○葛木稚犬養連。姓氏錄攝津神別。若犬養宿禰。火明命十六世孫。尻網根命之後也。和泉若犬養宿禰。火明命十五世孫。古利命之後也。とあり。氏族志に。本書以ニ尻網根。爲ニ火明十六世孫。據ニ書事本紀。六當レ作ニ三。本書和泉若犬養條云。火明十五世孫古利命之後。而本紀有ニ十六世孫尾張古利連。即是人也。さいへり。天武紀十三年十二月。稚犬養連賜レ姓曰ニ宿禰。とあり。さて葛木は其居處を以て云なり。網田は。阿彌陀の義を以名けたるなり○云々は。轉寫の人の功を省きたりしか。後遂に原書の亡はれて。磨本の方の残れるなり。以下の卷々にもをりあり。みな同じ。

三月。休留イヒトモ産コウメ子於豊浦大臣大津宅倉。倭國言。頃者菟田郡人押坂直。關將テ一童子。欣ウレシ遊雪上。登ノボ菟田山。便見ミ紫菌ムラサキキノ挺雪而生。高六寸餘。滿ミ四町許。乃使シ童子採取。還キ示シ隣家。摠言ト不知。且疑ウ毒物。於是押坂直與ト童子。煮而食之。大有ク氣味。明日往見。都不在焉。押坂直與ト童子。因テ喫ク菌羹。無ク病而壽。或人云。蓋俗不知ク芝草。而妄言ク菌耶。夏六月癸卯朔。大伴馬飼連獻シ百合華。其莖長八尺。其本異而未連。

休留。水戸本鶴鶴に作るは正字なり。休留は省偏なり。倭名抄羽族部鶴鶴。張華博物志云。鶴鶴鳥。人截ニ手足爪ニ棄レ地。則入ニ其家。拾取之。漢語抄云。伊比止與。新撰字鏡。鶴鶴。並訓ニ伊比止與。蓋注云。按皇極紀作ニ休留。訓ニ布。同物異名耳。或以ニ鼻充レ之。或以ニ鶴鶴充レ之。其說不同也。廣雅。鶴鶴。鶴鶴也。鶴鶴即鶴鶴。則他鶴宜ニ合ニ怪鶴ニ訓ニ與多。賀ニ伊比止與ニ之名。宜ニ合ニ布久呂布條。然陳壽曰。鶴一名鼻。一名鶴。是以ニ他鶴ニ爲ニ鼻之別名ニ要ニ之。諸書所ニ說ニ多混雜不明。とあり。天武紀十年八月。伊勢國貢ニ白茅鶴ニ。○注休留茅鶴也。五字私記の攪入なるへし○豊浦大臣。蘇我大臣なり○大津は。和泉志に和泉郡大津とあり。これ大臣の別莊なり。また式に河内國河内郡。同。丹南郡等に。大津神社見ゆ。○産子。これをも祥瑞としたるものなるへし○倭國言。按に次に志紀上郡言とある如く。こゝも菟田郡言とあるへきなり。されど菟田郡邊までも。古くは倭國と大名を云へりしなり。この事は既に神武紀に云り○押坂



直は。其系詳ならず。氏人は天武紀に忍坂直大麻呂あり。稱徳紀。神護景雲元年三月。婢清賣賜姓忍坂。とあり。姓氏錄左京雜姓。忍坂連。火明命之後者未詳。とあれど。同異は知らず。さて光仁紀に。外正五位下刑部直蟲名。仁明紀に武藏多磨郡人刑部直道繼あり。同氏人と見えたりと部字あり。また左京神別に。大炊刑部造。火明命四世阿麻刀彌命之後也。とあるは。東大寺正倉院文書に。聖武帝時。大炊少屬大炊刑部造。藤原呂とある同族なり。また姓氏錄攝津に。刑部首。火明命十七世孫。屋主宿禰之後也。とあるも同族なり。これら押坂直と同氏なりや。別なりや詳ならず。また東大寺正倉院文書に。聖武帝時。出雲人刑部臣小友。刑部臣禰麻呂。出雲風土記に秋鹿郡大領刑部臣。神門郡擬少領刑部臣直臣あり。これらも何の族たりやしらす。○欣遊。集解云。欣中本作飲とあり。されど誤なるへし。○紫菌。倭名鈔飲食部。菌茸。崔禹食經云。菌茸。爾雅注云。菌有木菌土菌。石菌。和名皆多介。食之温有小毒。狀如人着笠者也。とあり。倭訓栞たけの條云。日本紀倭名鈔に。菌をよむは。氣味の猛き義なるへし。新撰字鏡に。英をみふたけとよめり。みみは耳の義なり。今佐渡に菌をみみといへり。たけかりは菌獵の義。古今集の辭書にみゆ。歌によめる例なしといへど。夫木集に松たけかりとよめり。と云り。たけは此類の總名なり。紫は其色を以て云。本草に紫芝と云ものあれど。これは一物の名にほあらず。○疑毒物。菌に毒なるかある事は。博物志に。菌食之有味。而常毒殺人。などあり。此間にて古くしか云慣ひしなりけり。○芝草は。音讀にシサウと古くよめり。天武紀。紀伊國伊刀郡。貢芝草。其狀似菌。莖長一尺。其蓋二圍。また續後紀四。文德實錄。日本紀略天長四年條にも

見えたり。通證に。芝神草也。本草有青赤黃白黑紫六色。注芝爲瑞草。服之。神仙高子傳。辟々紫芝可。以療飢。唐志。芝草爲下瑞。とあり。延喜治部式にも。祥瑞部に此もの見えたり。續紀聖武天皇御時に。内裡に玉來と云もの生せしかは。朝野道俗に。玉來詩賦を作らしめ給ひしことあり。この玉來また玉芝とも云て。これも芝草なり。と云り。されど玉來は靈芝にて。食ふに堪ざるものなり。なほ漢籍にも種々見えたるもの。一物なりとも聞えず。○百合華。倭名抄草木部。百合和名由里。記神武段に。其河謂佐草河。由者。於其河邊。山田利草多在。故取其山由利草之名。號佐草河也。山由理草之本名云。佐草也。とあるに據れば。佐草は佐由理の約なるへし。百合にはさゆりひめゆりなどの名もあり。萬葉以下の歌に多くよめり。また萬葉に。草深由利ともよめり。さて華字。秘閣本には花に作れり。

乙巳。志紀上郡言。有人。於三輪山。見猿晝睡。竊執其臂。不害其身。猿猶合眼歌曰。武舸都烏爾。陀底屢制羅我。備古禰舉曾。倭我底鳴騰羅每。拖我佐基泥。佐基泥曾母野。倭我底騰羅須謀野。其人驚。惟猿歌。放捨而去。此是經歷數年。上宮王等。爲蘇我鞍作。圍於膽駒山之兆也。

乙巳。三日なり。○志紀上郡。大和國磯城上郡なり。いつころ上下に分ちけん。詳ならねど。此にかく



あるを見れば。此頃は既にわかれしにこそ○合眼を。メヒシキテと訓むは。今俗に目を塞ぐを。目を  
つふすと云か如く。強く云る詞なるへし。この言は既に恐懼をヒシと訓る處に云おけり。さてかく猿  
の合眼きてあるは。神の憑坐たるにて。まことには。猿は眠りてえしらさりけるなるへし○歌曰。こ  
れ山背王の亡ひ給ふ前兆を。神の猿に憑て歌ひ給へるなり。さて此歌は。二年十一月の前にあるへき  
を。歌のさまを思ふに。當時には諱むことなどありて。言上せさりしか。今年に至りて奏言せしもの  
なるへし○武舸都鳥爾は。向峯になり。いつこの山ともなく。たゞ向に見えたる山を以て。よめるなる  
へし。萬葉に。向峰爾立有桃樹○陀底屢制羅我。所立夫等之なり。夫等は。猿の夫を指して云。捕へら  
れたる女猿の云ふ言なり。守部か。伊駒山に隠れ給ふ。山背大兄王を指て云なるへし。奈良山の向ひにあり。と云れたるはいかなり。○備古彌舉會。柔手こそなり。解  
説に依。彌は常は多く年の假字に用ゐる字なれど。漢音奴禮切。又乃禮切とあれば。此は泥の假字に用ゐ  
りて云。彌は常は多く年の假字に用ゐる字なれど。漢音奴禮切。又乃禮切とあれば。此は泥の假字に用ゐ  
たるなり。此紀は吳漢通はして。泥涅を傳にも彌にも用へるか如し。守部か。この句を大兄王の御手を  
云ふなり。と云れしはたかへり。○倭我  
底鳴騰羅每は。捉我手なり。毎は辭にて舉會の結ひなり。さて上よりのつゞきは。女猿の愛はしと  
思ふ。向つ峰の牡猿か。柔やかなる手以てこそ。わか手をはごらめ。と云なり。さて譬へたる意は。山  
背王をは。たごひいかなる事坐すとも。柔和やかに緩やかに。あつかひ奉るへきを。さはあらずして。  
荒げなく失ひ奉給ふは。甚道理なき事なりと云ことを。次に云なり。然るに解に。猿を山背王にありて。せらは山  
背王に相向ひ立る背らにて。入鹿にありて。王  
り。と云るはたかへり。また守部か。此句は大兄王等こそ。神の御守を蒙て。入鹿を殺給はめとの喩へなるへし。按に本文の上文に。三輪文  
屋君か。山背王を再臨観めたる事あり。是三輪君といひ。又三輪山猿といひ。自然守護神の御告なるへきに。山背王等。唯老佛にのみ淫して。

承引玉はすて亡ひしも。又神の御心なりけ  
らし。と云れしも。おぼつかなき説なり。 ○拖我佐基泥。解云。誰拆手なり。柔手に對して。恐ろしき手を云。と  
云れしがことし。これも守部説  
はかなはず。 ○佐基泥曾母野。本に佐基を基佐に作れり。今集解に。佐基原倒。佐基泥。  
疊上辭也。曾母野辭。ごあるに據て改む。曾は上の誰といふ疑言の結。母野は二ごもに歎息なり○倭  
我底騰羅須謀野は。捉我手耶なり。羅須は留の延言。謀野は上に同じ。さて一首の表の意は。向つ  
峰に立るわが夫の。柔やかなる手を以てこそ。我手をごらめ。誰か醜の拆手以て。荒げなくわか手を取  
るこそ。臂を執へし人を。猿の咎めて云るにて。裏の心は。山背王をは。柔やかに痛はり奉るへきに。  
入鹿があらけなき軍將等をつかはして。醜の拆手以て殺し奉るは。いかなる逆事そやと咎めたるなり。  
これを守部。向峰の伊駒山に隱る。山背大兄王等こそ。吾三輪君をかたらひて。入鹿をは討め。しかるに入鹿に。巨勢臣等かたらはれて。王  
等おめく亡ひ玉ふは何事そやと。云はとの喩しを。彼有人の猿の臂を執たるにつきて。手に臂へて。させせるなり。と云れたるは。例のい  
なり。

戊申。於<sub>ニ</sub>劔池蓮中。有<sub>ニ</sub>一莖二萼者。豐浦大臣妄推。曰。是蘇我臣將榮之  
瑞也。即以<sub>ニ</sub>金墨書。而獻<sub>ニ</sub>大法興寺丈六佛。是月。國內巫覡等。折<sub>ニ</sub>取枝  
葉。懸<sub>ニ</sub>掛木繻。伺<sub>ニ</sub>大臣度橋之時。爭<sub>ニ</sub>陳神語入微之說。其巫甚多。不可<sub>ニ</sub>  
具聽。老人等曰。移<sub>ニ</sub>風之兆也。



戊申。六日なり。○劔池蓮。この事舒明紀七年にも既に見えたり。一は重複ならむも知かたし。○將榮。本に榮を來に作る。今秘閣本活字本中臣本釋紀に據て改○金墨は。金泥なり。

于時有謠歌三首。其一日。波魯波魯爾。渠騰曾枳舉喻屢。之麻能野父播羅。其二日。烏知可拖能。阿婆努能枳枳始。騰余謀作儒。倭例播禰始柯騰。比騰曾騰余謀須。其三日。烏麼野始備。倭例烏比岐例底。制始比騰能。於謀提母始羅孺。伊弊母始羅孺母也。

波魯波魯爾。本に波魯魯爾と書たるは。上古の書法なり。記。出雲風土記。其他にも此例あまたあれど。遙々になり。萬葉に波呂波呂爾。於毛保由流可母。○渠騰曾枳舉喻屢。琴所所聞るなり。神の彈給ふ琴そきこゆるとなり。かよる音樂の遙にきこゆるは。今こそ鳥の宅地なれ。遠からず神の領し給ふへき。藪原になるへき兆の。またきにじられたるなり。但し人にこそ。大臣の宅地と見ゆれ。幽には既に藪原となりて。神の住給ひしなりけり。これを守部か。神の御告のほかに聞ゆる喻しなり。神懸の時、琴の音に。○之麻能野父播羅。鳥之藪原なり。鳥は大臣の宅地の名なり。終に藪原と成るへき兆を云なり。藪は古今集に。日の光やふじわかねは。仙覺説に。也夫謂水竭而蘆荻蕃茂之處。俗云也波羅。倭名抄引呂氏春秋曰。澤無水曰藪。和名也不。

とあれども。水邊に限るへからず。名義は彌生にて。草木の甚く生繁れる所を云て。今も然り。されは越中國新川郡。大刑於保也布など。刑字をもよめり。さて此歌下文云。於是或人説。第一謠歌曰。此即宮殿接起於鳥大臣家。而中大兄。與中臣鎌子連。密圖大義謀。戮入鹿之兆也。とあり。此鳥は。馬子の時より宅地として。鳥大臣とそ呼ける。後に日竝知皇子尊。領し給ひて。橘島宮と申せり。萬葉二に歌多く出たり。○鳥知可拖能。彼方之なり。地名にあらず。解は非なり。○阿婆努能枳々始。粟野之雉なり。守部か。粟鳥のある野邊を云るなり。と云れたるか如し。これも地名にはあらず。○騰余謀作儒は。不令響動なり。上一句は。此言を云出ん料に。軽く求出たるなり。○倭例播禰始柯騰は。吾者雖寢なり。さて喻の意は。集解に。我我上宮王也。上宮王之魂魄猶寢。雖不自報也。と云れたる如くなるへし。下文に。上宮王等性順。都無有罪。而爲入鹿。雖不自報。天使人誅。是之兆也。とあるに據に。其説然るへし。○比騰曾騰余謀須は。人を響動すなり。これも集解に。人謂中大兄鎌子連等也。と云り。さて上宮王已命は。御性女々しく坐て。入鹿の罪をも鳴し給はず。彼方の粟野の雉のこと。音に立給はずして。臥せて置しかど。雉子は夜明けは。鳴動響きて。人の眼を驚かすものなる事。古歌に見たり。天道是をゆるさず。中大兄鎌子をして。其罪を鳴らし誅さしめたりとなり。然るに守部は。下文によらず。此歌は入鹿か事にあらず。蝦夷か隱謀を。神の惡みむてども。幽冥より神の知しめして。おのつから人に知らしめ給へは。世に云懸くそかし。○鳥麼野始備は。小林になり。此句林臣ごきかせて。其林ご指所は宮中なり。と守部云り。されど其次に。宮中も百寮林にて。星の林など云類の詞なり。是問もあらず。蝦夷父子か亡ふる兆なり。と解れたり。されど叶へりともさかえず。







似養蠶カヒコケム

東國不盡河。和名抄駿河國富士郡これなり。其郡を流るゝに據て。不盡河と云なり。この河原は。信濃國伊那郡に出て。諏訪郡の堺を流れて。甲斐國に入り。巨摩郡鹽川と一になり。八代山梨二郡の諸流をあつめて。不盡河となるなり。此あたりには。富士山の水も流れ入るを以て。萬葉に。富士川と人の渡るも。其山の水のたきをちそ。ともよめり。然るに集解に。更後日記曰。富士川源出富士山。と書れたるは。其もとを知らぬ。誤なり。さて此なる不盡川は。いつこはかりの處と云に。黒川春村が。並山日記と云ものに云。今甲斐の國と駿河國との。堺近き所に。うつふさ村と云あり。文字は内房とかくといへど。本義はうつたかく。總やかなる心なるへし。うつふさは。うつまさを。よこなまれるなるへし。此あたりにての事なめりと云り。いとめづらかなる心つきてこそ思ゆれ。たゞしうつまさと云事は。いかにも解しかてなりしを。推總ならんには。心得やすかり。これによりておもへば。中々にうつまさの方こそ。よこなまれることはおほゆれ。なほ大生部に因ある地名も。此あたりにありと聞しかと。忘れたればかさねて云へし。武郡云。此大生部のこと。たつねへし。此内房村より。富士川をわたる釣橋とて。いとあやしき橋あり云々。以下こなければ。とあるによらば。大生部多は。此わたりの人なるべし。なほよく考へし。○大生部多。大生部姓氏録に見えず。續紀神龜元年二月。正八位下大生部直三穗磨等云々。授外從五位下。とあり。式但馬國出石郡大生部兵主神社。和名抄常陸國行方郡大生。などあり。 風土記にも。見えたり。 守部か。大生部は韓人に賜は

しと姓なり。と云るは據なし。甚杜撰なり○常世神。常世の事は既に云るか如く。此顯世ならぬ幽界の神と云義にて。尋常ならず絶れたる神なりと稱せしなり。常世虫も同じ○陳酒菜六畜。本に酒の下にも陳字あるは衍なり。今信友校一本に據て削る。集解にもなし。陳をフルと訓るは非なり。ツラ子と訓へし。六畜は守部云。小學紺珠に。馬牛羊豕犬鶏と見ゆ。皇國に羊なし。羊に猿を代る事。天武紀に見ゆ。されどこれはたゞ漢字を書るのみなれば。家々の飼物と見ればよしと云り○清座は。座の上に棚を構へ。薦をしきなどして。清淨にせしより云る稱と見えたり○葛野秦造。葛野は山城國葛野郡。即秦氏居地なり。秦造の事は。推古紀十一年に出。さて續紀三十八に。山背國葛野郡人秦忌寸春風。同四十八に同郡秦忌寸氏立など見えたるは。河勝の子孫なるへし○打大生部多。通證に。大生部蓋秦氏之所攝也。藤原高房。廢波渠之神。山田春城。糺阿氣之社等。載見正史。とあり。秦氏之所攝と云事證なし。つら／＼按に。此時秦造河勝。東國國司などに任られて。其國に下りけるか。所管の國に。かゝる事ありと書きて。其を惡みて。打懲したりしなどにもあるへし○禹都麻佐波。太秦者なり。上代秦も太秦も。相通はして云へり。故。私記に河勝之姓なりと見ゆ。既に出○柯微騰母柯微騰。神とも神となり。守部云。此は常に。いきとしいける。高しとも高し。ぬれにそぬれし。など重ねて。言を勤からしむる詞なり。と云れたるか如し○枳舉曳俱屢は。所聞來にて。解に流言の聞え來るなりと云れたるか如し。これは次の句に係て見るへし○騰舉預能柯微乎。常世神をなり○宇智岐多麻須母。令打



尉もなり。きたむるは。尉す意の語なり。續紀四十二。任法爾問賜比。支多米賜。母は助辭にて歎息の意あり。余と云ふか如し。岐多麻須を解に消給爲と云ひ。通證に。今ニ。打痛也。岐與伊同類通。とある共に非なり。一首の意は。太秦はと。初句にて切て。太秦河勝はもよ。世の流言に聞えわたる。常世の神を。打懲ましめたるそよ。となり。守部云。解に常世神とは。即大生部多を指て云といへる。たかへり。常世神と指ものは。多か詐れる虫の事にこそ。其よし上の前文にて。明らかなるものをや。さて太秦か打たるは多なれと。多を打ては。其神の根を断にあらすや。と云れしは。まことにさる事なり○生橘。生の下秘開本於字あり○蔓椒本に零耕と書り。古字なれども。今は考本集解等に據て改め書り。倭名抄に。蔓椒。以多知波之加美。一云保曾木。本草和名醫心方等にも。右の如く注せり。延喜式櫻椒油。通證に。今云犬山椒也と云り。字鏡に。椒訓曾保木とあるは誤なるへし。字も。○全似養蠶。通證に。詳ニ此狀。即今橘蠶虫也。一名蠶。淮南子曰。蠶與蜀相類。而愛憎異也。と云り。

冬十一月。蘇我大臣蝦蟇兒入鹿臣。雙起家於甘檮岡。稱大臣家。曰上宮門。入鹿家曰谷宮門。谷。此云ニ波佐麻。稱男女曰王子。家外作城柵。門傍作兵庫。每門置盛水舟一。木鈎數十。以備火災。恒使力人持兵守家。

大臣使長直於大丹穗山。造梓削寺。更起家於畝傍山東。穿池爲城。起庫儲箭。恒將五十兵士。繞身出入。名健人曰東方儼從者。氏氏人等入侍其門。名曰祖子孺者。漢直等全侍二門。

甘樞岡。高市郡にあり。既出○上宮門。宮門は御門と云ふに同じ。古語拾遺に通し書る例あり。さて本に上字なし。今中臣本に據て補。本の訓によるに。必あるべき字なり。さて上と云は。次なる谷に對ひたる名にて。其地形によれる稱なり。太子傳曆にも。海鳥飛來居上宮門と云事あり。上字ありし證なり○谷は。上に滑谷崗ともあり。迫間の義既に武烈紀に云へり○兵庫。和名抄。唐韻云。檣城上守禦樓。和名夜久良。とあれども。こゝは次なる庫をツハモノクラと訓るによりて。こゝをもしかよむへし。同抄。庫。豆波毛乃久良とあり○盛水舟は。通證に防虞水槽也と云り。用水桶と云ふものなり○木鈎。淮南子曰論訓に。木鈎而樵。高誘曰。鈎鎌也。とあり。三代實錄に鐵鈎あり○長直。姓氏錄和泉神別。長公。積羽八重事代主命之後也。とある同姓なるへし。氏人は。續紀三十二に。阿波國勝浦郡領長直人立。東寺文書に。仁明帝時。阿波那賀郡大領長公廣雄あり。類聚符宣抄に。朱雀帝時。式部大錄長廣兼。除目大成鈔に。一條帝時。典藥侍醫長宿禰義信あり。これらも此後なるへし○大丹穗山。三代實錄。元慶二年二月癸巳。大和國無位大仁保神に。從五位下を授くとあり。此神今高市郡入谷村にあり。春日とい



ふと。大和志名所圖書等に見えたり。○梓削寺。興福寺官務帳。嘉吉元年四月記す。云。梓削寺。在高市郡丹生谷。僧宇二十八坊。蘇我大臣本願。皇極帝三甲辰年。使長直於大丹穗山造之。とあり。大和志。高市郡廢梓削寺。古蹟在丹生谷村。とあり。削をスキと訓る義詳ならず。もしくは梓ホコ之木の義か。梓を削りたるか如き樹木などありて。地名となれるか。寺を京極本に等に作るは誤なるへし。○起庫儲箭。こはヤクラと訓方よろし。箭庫の義なり。ここの文にて明かなり。○健人は。力人なり。上文に健兒とあるも同じ。○東方價從者。我邦坂東の兵士は。天下に無雙れて壯猛なるよし。古來より云傳へしものなるへし。故東方の國々より。健人を集めおきしにこそ。この後にも稱徳紀詔に。是東人波常爾云久。額爾方箭波立止毛。背波箭方不立止云天。君乎一心乎以天護物會云々。萬葉二十。登利我奈久。安豆麻乎能故波。伊田牟可比。加幣里見世受豆。伊佐美多流。多氣吉軍卒等。彌疑多麻云々。などあり。太平記に。日本六十餘州の兵を集めて。武藏相模兩國に敵するとも。勝ことを得ずなどあり。然るに集解に。以二畝傍之東。故曰二東方。とあるは非なり。價從は。安閑紀に僮豎をシトヘワラハと訓るも同じ。後取部豎なり。○氏々人。水戸本に一氏字なきはよからず。諸氏の人なり。孝徳紀に出つ。○祖子孺者。孝徳紀に祖子の名あるは。皇子皇孫を云ふことにて。こゝと異なり。孝徳紀なるはミコと訓へし。其よし其處に云り。また聖武紀及靈異記に。親子を祖子と書きたることもあり。それも異なり。ここの祖子は。オヤノコと訓む。親の子の義にて。親しむ詞なるへし。萬葉十八に。伊爾之敵欲。伊麻乃乎追通爾。奈我佐敵流。於夜能子等毛會。とあるに同じ。通證に。此號猶三史記所謂家人子也。とあるは。さることにて。氏々人等を。蘇我臣の甚く親しみ睦まじ

みて。まことの親子孺者と稱せしものなるへし。まことの親の生みたる子と云が如し。嘉曆公卿勅使記に。家子一人とあり。後には家子郎黨など云ふこと常なり。これを集解に。按祖即親。子孫既近之義とある。爾か言まわらざれば。大方はかなへり。○漢直の事。次云。○二門は。上宮門谷門なり。さて此下に中臣本に。是歲大神粟隈君。私部君。使於百濟也。十六字ありて。其下に此分本無如此多消とあり。集解にも一本とて載たり。三輪粟隈君東人。孝徳紀に見ゆ。そこに云へし。私部のことは敏達紀に云り。

四年乙巳

四年春正月。或於阜嶺。或於河邊。或於宮寺之間。遙見有物。而聽猿吟。或一十許。或二十許。就而視之。物便不見。尙聞鳴嘯之響。不能獲覩其身。舊本云。是歲移三京於難波。而板蓋宮爲之兆。時人曰。此是伊勢大神之使也。夏四月戊戌朔。高麗學問僧等言。同學鞍作得志。以虎爲友。學取其術。或使枯山變爲青山。或使黃地變爲白水。種々奇術不可殫究。又虎授其針。曰。慎矣慎矣。勿令人知。以此治之。病無不愈。果如所言。治無不差。得志恒以其針。隱置柱中。於後虎折其柱。取針走去。高麗國知得志欲



歸之意。與毒殺之。

阜嶺は。たゞ山嶺なり。ヲカノタケと訓はわろし。○宮寺之間。本に宮を官と作り。今は秘閣本活字本考本。集解所引壹本等に據て改。○注是歲移京云々。この事孝德紀九年にあり。○伊勢大神之使也。景行紀に荒神之使也。記にも此化。白猪者。其神之使者云々。なごあり。神の其時に當て。かゝる獸類を使ひて。人に示し給ふなり。これを伊勢大神の使者と云へるも。人を以神の言しめ玉へるなり。○鞍作。已出。○以虎爲友。集解に。按虎之爲怪。太平廣紀虎部等。不可枚舉。傳奇術不足怪也。ごあり。かゝる獸類は。幽顯に出沒するものにて。奇術を知れるは本よりなれば。人も其黨に入らんには。其術を學取らん事。怪しむに足らず。されどこれを人に知らしむる事は。彼にても甚く忌事なれば。其を後には悔いたるなり。

六月丁酉朔甲辰。中大兄密謂倉山田麻呂臣曰。三韓進調之日。必將使卿讀唱其表。遂陳欲斬入鹿之謀。麻呂臣奉許焉。戊申。天皇御大極殿。古人大兄侍焉。中臣鎌子連。知蘇我入鹿臣爲人多疑。晝夜持劍而教俳優。方便令解。入鹿臣咲而解劍。入侍于座。倉山田麻呂臣進

而讀唱三韓表文。於是中大兄戒衛門府。一時俱鑠。十二通門。勿使往來。召聚衛門府於一所。將給祿。

甲辰。八日なり。○中大兄密謂云々。鎌足傳云。遂共定策。即欲舉兵。中大兄曰。欲以情告。恐計不成。不告將默。又慮驚帝。臣子之理。何合於義。群公等爲吾陳說。大臣對曰。臣子之行。惟忠與孝。忠孝之道。全國興宗。從使皇綱素絶。洪基頽壞。不孝不忠。莫過於此。中大兄曰。吾成敗在汝。汝宜努力。大臣於是薦佐伯連古麻呂。稚犬養網田曰。武勇強斷。膂力扛斲。須豫大事。但二人耳。中大兄從之。ごあり。○三韓進調。太子傳に。約束已訖。屬三韓進調。ごあり。されど家傳に。六月中大兄詐唱三韓上表。時人以爲信然。ごあるか如く。いかさまにも。此三韓進調は。さる事を作り出で。謀りしものと見えたり。下文に古人大兄か。韓人殺鞍作臣と宣へるを思ふに。此時假に韓使をも擬りて。裝束せしものなるへし。さて其韓使も。入鹿を誅せし助けを爲しものと思えたり。時人以爲信ごあるも。擬韓人か表文を捧けて。御前に出せしを云しなるへし。○戊申は十二日なり。○大極殿は。倭名抄に。太極殿。朝堂正殿名也。拾芥抄に。八省院。天子臨朝即位諸司告朔所。或號朝堂院ごあり。其名の本は秦漢に起りて。魏明帝時に始めて大極殿の號あり。魏志梁書六典等に見えたるを。此方にても。後に制作に擬して。其稱を即て取給へるなり。されどこゝに大極殿ごあるは。後の稱を以て記されたるにて。當時



はたゞ大安殿といひて。いまた大極殿といふ名はなかりしなり。さて傍訓にオホアニトノ。又オホ晏トノとある。これ上古より朝堂正殿の名なるへし。但しオホアニは。大安と書るを。安を字音に寫誤しものなり。又晏も安を誤りしものなることしるし。さて玉勝間云。天武紀又續紀に。大安殿はオホヤスミトノと訓へし。即大極殿の事なり。天智紀西安殿。内安殿。外安殿。舊宮安殿。文武紀東安殿などある。みなやすみとのなり。やすみは古歌に。やすみしう我大君とよみて。これ安らけて天下を治見し給ふ意なり。されは天皇の坐々殿をば。みなやすみ殿と申せるなり。大極殿第一の正殿なるか故に。大やすみ殿と云へるを。即て大安殿とも書れたり。と云り。さて後の大極殿のことは。小中村清矩か。委考。説あれ。ことにほさしも要なければ出たさす。○俳優の訓。わさをき人の略なり。○入待于座。家傳曰。戊申帝臨軒。古人大兄侍焉。使舍人急喚入鹿。入鹿起立著履。履三廻不著。入鹿心急之。將退彷徨。舍人頻喚。不得已而馳參云々。とあり。○衛門府。職員令。衛門府。督一人。掌諸門禁衛。出入禮儀。以時巡檢。及隼人門籍門勝事。倭名抄に近衛府兵衛府衛門府を。由介比乃豆加佐とあり。勅負司の義なり。三代格に。大同三年七月。太政官謹奏。按令條。禁衛宮掖。以時巡檢。斯衛士府之職也。今衛門所掌。復不異於此。徒設官員。事乖忙劇。伏請一從廢省。然勅負爲名。年紀積久。今廢彼混此。雖不改文字。號曰左右勅負府。などあり。これ令に衛門府ありしか。今此府を廢して。衛士府に合せて。左右勅負府と云るなり。さて弘仁二年十一月に。又々左右衛門府と云。其始めは五府。後に六府と。各其職は分れたれとも。兵仗を帶し。宮掖内外を衛る義

は。みな一なるを以。すへて由介比乃豆加佐と云なり。なほ此事の沿革は。既に景行紀に云り。○十二通門。これ宮城十二門なり。拾芥抄に。正南曰朱雀。南之左曰美福。右曰皇嘉。北曰偉鑿。北之東曰達智。西曰安嘉。東曰待賢。東之南曰郁芳。北曰陽明。西曰藻壁。西之南曰談天。北曰殷富。とあり。て。さまざまの故實を載たり。これらは延暦十二年に。始めて山城新宮即平安宮を作りし時のことなり。其始めは如何にありけん知られねと。其もと前漢長安十二門。後漢雒陽十二門などあるに據りて。宮門に十二門を造り始しものか。また十二には限らねと。後にしか稱せしものか。これらすへて詳ならず。訓にヨモノミカトと訓るは。古に叶ふへし。○召聚一所。非常の用意なり。考云。これは異變をさせぬ爲なり。入鹿加威に依て。人心あまた彼に従ふ故。きつかひし給ふなりと云る。さることなり。

時中大兄即自執長槍。隱於殿側。中臣鎌子連等。持弓矢而爲助衛。使海犬養連勝麻呂。授箱中兩劔於佐伯連子麻呂。與葛城稚犬養連綱田。曰。努力努力。急須應斬。子麻呂等以水送飯。恐而反吐。中臣鎌子連噴而使勵。倉山田麻呂臣。恐唱表文。將盡。而子麻呂等不來。流汗沃身。亂聲動手。鞍作臣怪而問曰。何故掉戰。山田麻呂對曰。恐近天



皇。不覺流汗。中大兄見子麻呂等畏入鹿威。便旋不進。曰吐嗟。即共子麻呂等。出其不意。以劍傷割入鹿頭肩。入鹿驚起。子麻呂運手揮劍。傷其一脚。入鹿轉就御座。叩頭曰。當居嗣位。天之子也。臣不知罪。乞垂審察。

中大兄。本に中大を倒せり。今諸本に據て改む。○海犬養連。姓氏錄右京神別。海犬養。海神綿積命之後也。ごありて姓なし。天武紀十三年十二月。海犬養連賜姓曰宿禰。○授。本に投に作る。今中臣本に據て改。集解にも。○急須。二字アカラサマニと訓へし。集解に須應を倒せしは却て非なり。家傳に。努力一箇打殺とあり。○送飯。送をスクと訓は。空穗に。松葉をすきて。源氏に。さるべきもの作りてすかせ奉る。今昔に。飯を箸を以て合めつ。湯を以て合し。澆れは。欲しと思しければ。病人にも不似系吉食つ。などあり。いと後の物なから。福富草紙と云ものなどにもあり。すくはものを。透し通すやうなるところに云訓なり。たゞ飲食する事には云はず。○恐而反吐。家傳に咽而反吐とあり。和名太萬比。犬咿。以奴乃大末比。唐韻。咿。犬吐也。今俗反吐呼音。○吐嗟。吐は通證云。字彙補。吐一音突。蓋與咄通用。ごあれは。本のまゝにても宜しけれど。釋紀一本に咄ごもあれは。それなほ正しかるへし。さて増部に。咄音語也。又玉篇。咄。吐也。又韻會。咄々驚聲也。とあり。本訓に。ヤアと訓るよろし。但しまごごは。ヤの一言にあるなり。靈異記下第十八條に。叩室戸。白。咄。大法師起應聞之矣。また咄とあり。其他にアは引聲の添りたる韻に

て。嗟嘆の阿をア、と云か如し。されとヤアと云も。古く云ごごにて。類聚名義抄にもヤアとあり。然るを本の一訓に。アヤとあるは誤なり。アヤは人を驚す掛聲にあらず。ヤの一言に驚す心あり。後の歌にも。やと云にこそ驚かれぬれ。又重ねては。やと物申さんなども云り。やよやまて。などのやよも同じ。○共子麻呂等。此時の事を孝謙紀に。贈大錦上佐伯連古麻呂。乙巳年功田三十町六段。被他駈卒。効力誅姦。功有所推。不能稱大。依令上功令傳三世。ごあり。○揮劍は。神代に背揮ごあるに同じ。劍を揮なり。○天之子ごごは。天神の御子と申すか如し。次に天孫ごあるも同じ。按に。天神を天とのみ云らねど。なほこは神字を。後に脱し。さて此意は。當に。正しく日嗣の位に坐々は。人倫にまさぬ天神の御子にまたるにもあるへし。此は試に云なり。ごごは。當に。正しく日嗣の位に坐々は。人倫にまさぬ天神の御子にまごませは。かゝる出來事の曲直は。神なから知看すへし。審察を仰き奉るごの言なり。さて臣不知罪ご云るも。偏に叡斷を乞ふ意なり。これを通證に謂。天孫之子孫と云るは。いかに見たるにか詳ならず。また集解に。按。言已無審。天位之意と云るもあたらす。さるごごを。かゝる俄頃の時當りて。奏すへきかは。まごごに訓れなき解なり。○垂審察。天武紀に。天神地祇及天皇證。也。萬葉二十。賣之多麻比。安伎良米多麻比云々。明かに察給へなり。

天皇大驚。詔中大兄曰。不知所作有何事耶。中大兄伏地奏曰。鞍作盡滅。天宗將傾日位。豈以天孫代鞍作耶。蘇我臣入鹿。更名鞍作。天皇即起入於殿中。佐伯連子麻呂。稚犬養連網田。斬入鹿臣。是日雨下。潦水溢庭。以



席障子<sup>シロシロ</sup>覆<sup>フ</sup>鞍作<sup>カサチ</sup>屍<sup>シ</sup>。古人<sup>コノトコ</sup>大兄<sup>オホニ</sup>見走<sup>ミテ</sup>入<sup>イ</sup>私宮<sup>シノミヤ</sup>。謂<sup>イハレ</sup>於人<sup>ニヒト</sup>曰<sup>ク</sup>。韓人<sup>コリアン</sup>殺<sup>コロス</sup>鞍作<sup>カサチ</sup>臣<sup>シ</sup>。

謂<sup>イハレ</sup>因<sup>ニ</sup>韓<sup>コリアン</sup>政<sup>セイ</sup>而<sup>シテ</sup>誅<sup>ス</sup>也。吾心痛矣。即入<sup>イ</sup>臥<sup>ヨシ</sup>内<sup>ノ</sup>。杜<sup>ツ</sup>門<sup>カド</sup>不<sup>レ</sup>出<sup>ズ</sup>。

盡滅天宗。家傳には天宗を王宗とあり。集解に。按謂天子宗室也。指山背王等也。とあるは。舊訓にキムタチとよめるに叶ひて。いと宜しき説なり。但し天宗と云文字の出處は詳ならず。これを通證に。謂<sup>イハレ</sup>天皇之宗家<sup>ニ</sup>也<sup>ト</sup>は。物遠き解なり。さて山背王は。天皇にも立玉へき御定ありし王なれば。皇族のあるか中にも。天宗とも申すへきか如し。又思ふに。皇統の御事を。舒明紀に皇統とあれば。ここも天宗は。天統とありしか。偏の脱たるか。また偏を省きて書るにもあるへし。かく見る時は。天宗は天統の義にて。皇統と云るも同じかるへし。天子の系統の義なり。日本後紀大同四年詔に。倭漢雜糅敢垢<sup>シ</sup>天宗<sup>ニ</sup>ともあり。後に文武天皇の御名を。天之眞宗と申すも。此義を取てつけ給へりしものと。おもはれ奉ればなり。されど。此訓名ヤム子と訓するは。既く字に據て訓を施したるなり。此はなほよく考へし。○以天孫代鞍作耶。太子傳曆曰。一說中大兄叫奏曰。以<sup>ニ</sup>入鹿<sup>ニ</sup>易<sup>シ</sup>天位<sup>ニ</sup>歟。○入於殿中。又云。天皇起入<sup>ニ</sup>大殿<sup>ニ</sup>。手問<sup>ニ</sup>殿門<sup>ニ</sup>。遂命<sup>ニ</sup>子麿等<sup>ニ</sup>殺<sup>ス</sup>入鹿<sup>ニ</sup>。以<sup>テ</sup>屍賜<sup>フ</sup>父蝦夷臣<sup>ニ</sup>。○席障子。漢語抄云。障子屏風之屬也とあり。席を以張たる障子なるへし。集解に。按。席及障子也。とあるは。いかに。さて障子をシトミと訓るは。倭名抄居處部。籙。周禮注云。籙字亦作<sup>レ</sup>蓐。和名之度美。覆<sup>フ</sup>暖障<sup>ニ</sup>光者也。とあり。和訓栞云。倭名抄に籙蓐。日本紀に障子をよめり。下止の義なり。又釣蓐あり。

檐に釣あけて。光をおほふものなりと云り。さらば蓐も障子も。光を障ふものにて。上下の差別はあれど。一つ物なるへし。下止<sup>シ</sup>は。上は釣てもまた釣ざるも。下にて止る處あるより名けたるか。詳ならず。中古に。はしとみと云ものあり。花鳥餘情に。下はかうしはた板などをうちて。上に蓐を釣て。外へあくる。やうにしたるを云。車にもはしとみとあり。上の蓐ばかりをあくれは。中蓐とは名たるなりとあり。按に。はしとみとは上蓐にもあるへし。是は下の蓐をおきて。上の方はかり開閉するを云か。考へし。按にシトミは下覆<sup>フ</sup>なり。屏風衝立の類。下の方のみを覆ひて。上は明通したれば。名とせしなり。席シトミは。むしろを以て張たる屏風の類なり。今世家造の外壁に。はた板を張をしたみと云も。それより轉りたる名なるへし。板しとみと云ものも。金葉集に。逢<sup>フ</sup>こはなかめふるやの板しとみ。さすかにかけて年の經ぬらむ。とあり。○私宮は。大兄の住給へる宮なるへし。古本に此私をキサイとよめるは。後宮と見られたるなるへけれと。非なり。○韓人殺云々は。かの偽り造れる韓人とも。共に立ちて鞍作を殺に預れるか。または大兄の周章てまして。まことの韓人か殺したるものと。見玉ひしまくに宣へるか。注に謂因<sup>ニ</sup>韓政<sup>ニ</sup>而誅<sup>ス</sup>とあるは。私記の攙入なるへし。集解にも。攙入。さる意にはあらず。また通證に。言託<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>韓調進<sup>ニ</sup>而誅<sup>ス</sup>殺<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>也。蓋諱<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>也。とあるもいかになり。

中大兄即入<sup>ニ</sup>法興寺<sup>ニ</sup>。爲<sup>レ</sup>城<sup>ヲ</sup>而備<sup>フ</sup>。凡諸皇子諸王諸卿大夫。臣連伴造國造。悉皆隨侍<sup>ス</sup>。使<sup>シ</sup>人賜<sup>フ</sup>鞍作<sup>ニ</sup>臣屍<sup>ニ</sup>於大臣蝦蟇<sup>ニ</sup>。於是漢直等。摠<sup>シ</sup>聚眷屬<sup>ヲ</sup>。擐<sup>シ</sup>甲<sup>ヲ</sup>。



持兵助大臣。設軍陣。中大兄使將軍巨勢德陀臣。以天地開闢。君臣始有。說於賊黨。令知所起。於是高向臣國押。謂漢直等曰。吾等由君大郎。應當被戮。大臣亦於今日明日。立俟其誅決矣。然則爲誰空戰。盡被刑乎。言畢。解劍投弓捨此而去。賊徒亦隨散走。己酉。蘇我臣蝦蟇等臨誅。悉燒天皇記國記珍寶。船史惠尺。即疾取所燒國記。而奉獻中大兄。

漢直。三年紀に出。撰甲。本に撰を懷に作れり。今中臣本集解等に因て改む。助大臣。中臣本に助上將字あり。家傳にもあり。天地開闢君臣始有とは。天地開闢の時に。葦牙の如くなるもの。虚中に生り。それに因て成坐る神等は。葦牙彦舅尊より。伊弉諾伊弉册尊まで。みな皇統の祖神に坐々て。君位の已に定り。さて其後に。次々成坐る神等は。みな臣位の神なり。かく開闢の時より。君臣の分既に定り有てみたれす。臣下の君位に列すること。皇國にては。決してあらざる道理を云るなり。此事はるかに後代八幡宮大神の神勅にも。孝謙天皇神護景雲三年に。弓削道鏡か天位を窺倫せし時に。我國家開闢以來。君臣定矣。以臣爲君。未之有也。天之日嗣。必立皇緒。無道之人。宜早掃除。と宣へ

り。有は通證に。猶左傳荀息有焉之有。舊讀誤。と云るか如し。○說於賊黨令知所起。水戸本に。起を赴に作れり。賊黨は漢直等眷屬なり。漢直は。もと先祖漢人の種なれば。皇國の古傳などを深くえしらす。革命の國人の心を常として。かく賊黨にも與せしなれば。今皇國に君臣の分の定りありて。己か本國なごとは。格別なることを。教へ諭して。其方向を知らしめ給ひしなり。○高向臣國押。二年に出。家傳に賊黨高向臣とあり。○君大郎は。入鹿の字なり。太子傳曆に。入鹿時人稱太郎とあり。太郎と云へるは嫡子の稱にて。其餘をは二郎三郎と云り。入鹿は蝦夷か嫡子なるか故に。時人がかく云りしにて。君太郎とは。太郎君と云か如し。此は賊か君と仰き居る詞に付て云へるなり。○決の訓。ウツモナシの誤。ウタカハシは。シを濁りて訓む。不疑の義なり。○己酉。十三日なり。○悉燒天皇記國記。馬子以來世々大臣たりければ。すへてかふる秘府の物等は。みな此家にて預り居りしなり。殊に天位をも窺倫し居れるものなりければ。盡く己の所有として。さなから君位に付かんと思ひ居りしなり。さて此記ごもの事は。既に推古紀二十八年の下に云り。○船史惠尺。文武紀四年。道照和尚物化。和尚河内國丹比郡人也。俗姓船連。父惠釋小錦下とあり。通證曰。今按此本邦秦政之厄。而惠尺輩幸不見坑。其當危急之際。而舉萬世之勳。非深志於祖業者。其孰如斯とあり。祖先以來の業とは云ながら。此人の深志甚しきにあらずは。珍寶を置て記録のみをえ取出じ。仰きても餘りある功勳なりかし。かふる人をこそ。萬世に神とは仰かめ。○所燒國記。今にして何々の書と云事知かたし。然るを纂疏に。獨得



灰燼之餘者。舊事紀數卷耳。と云れたるは。姓氏錄序に。國記皆燔とあると。今在る舊事本紀を。まことの聖德太子等の撰給し書と。おもはれたるなどより。云出られたる押測言なり。○奉獻中大兄。本に獻字なし。今中臣本に依て補。家傳云。己酉。豐浦大臣蝦夷。自盡于其第。氛沴漸除。豺狼竄伏。人々喜躍。皆稱萬歲。中大兄歎曰。絶綱更振。頽運復興者。實公之力也。大臣曰。是依聖德。非臣之功。衆咸服其不自伐焉。とあり。

是日。蘇我臣蝦夷。及鞍作屍。許葬於墓。復許哭泣。於是或人說第一謠歌曰。其歌所謂。波魯波魯。渠騰曾枳。舉踰屢。之麻能野文播羅。此即宮殿接起於島大臣家。而中大兄與中臣鎌子連。密圖大義。謀戮入鹿之兆也。說第二謠歌曰。其歌所謂。烏智可拖能。阿婆努能枳始。騰余謀佐。儒倭例播彌始。柯騰。比騰曾騰余謀須。此即上宮王等。性順都無有罪。而爲入鹿見害。雖不自報。天使人誅之兆也。說第三謠歌曰。其歌所謂。烏麼野始彌。倭例烏比岐以例底。制始比騰能。於謀提母始羅孺。

伊弊母始羅孺母也。此即入鹿臣。忽於宮中。爲佐伯連子麻呂稚犬養連網田所斬之兆也。庚戌。讓位於輕皇子。立中大兄爲皇太子。

許葬於墓。これを通證に。所謂今木雙墓也と云れたれど。信られず。抑蝦夷父子甚しき大罪ありて。戮せられし人なれば。其死屍をは散身して。罪をも諸人に示すべきなれども。其を宥め給ひて。屍を墓に葬り。また哭泣を許すなどあるに。いかてか彼今木に豫て作り置る。大陵小陵など云へき塚に葬ることを得む。必ず別處にいご假初に。墓をはつくりしことを知られたり。今飛鳥寺の近き邊に。五輪の石の小さか残りて。入鹿の墓と云傳ふ。これらはよしあらんも知かたし。かへすくも。彼大陵小陵にはあらし。○哭泣は。哭奉仕なり。音に泣て尸に仕る儀式なり。○野文播羅。中臣本また上文には文を父に作り。○騰余謀佐儒。前文には佐を作とあり。○烏麼野始彌。本に麼を磨とあり。中臣本に據て改。上文にも麼とあるを。中臣本に麼とあり。○伊弊母始羅孺母也。考本に也字なし。○庚戌。十四日なり。○讓位。皇國にて讓位のはじめなり。さて女帝も讓位も再祚も。此天皇をはじめとす。○立中大兄爲皇太子。法王帝說に。乙巳年六月十一日。近江天皇生年二十一。殺林太郎とあれば。此時御年二十一なり。されど舒明紀十三年に。是時東宮開別年十六とあるに依て計ふれば。此時二十歳なり。一年の差あり。なほ此天皇の御年のことは。本紀に云へし。○此に秘閣本中臣本に。異本云とて。







之兄也。輕皇子殿下之舅也。方今古人大兄在。而殿下陟<sub>ニ</sub>天皇位。便違<sub>ニ</sub>人弟恭遜之心。且立舅以答<sub>ニ</sub>民望。不<sub>ニ</sub>亦可乎。於是中大兄深嘉<sub>ニ</sub>厥議。密以奏聞。天豐財重日足。姬天皇授<sub>ニ</sub>璽綬禪位。策<sub>ニ</sub>曰。咨爾輕皇子云云。

尊佛法輕神道。按此六字紀の文例に反せり。注かけて後人の摺入なるへし。集解に私記評語と爲り。是<sub>ニ</sub>天皇輕<sub>ニ</sub>神道<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>ひし御事。本紀中に所見なし。大化元年詔に。先以祭<sub>ニ</sub>鎮神祇。然後應<sub>ニ</sub>議<sub>ニ</sub>政事。二年詔に。朕復思<sub>ニ</sub>下欲蒙<sub>ニ</sub>神護<sub>ニ</sub>力共<sub>ニ</sub>卿等<sub>ニ</sub>治<sub>ニ</sub>上。また念雖<sub>ニ</sub>若<sub>ニ</sub>是。始處<sub>ニ</sub>新宮。將<sub>ニ</sub>幣<sub>ニ</sub>諸神。屬<sub>ニ</sub>乎今歲<sub>ニ</sub>云々。深減<sub>ニ</sub>一途。大<sub>ニ</sub>赦天下。などある文によれば。天皇は殊に神祇を敬ひ給ふ君に坐せり。○注割生國魂社樹之類是也。この事紀中に見えず。後人の摺入なるへし。これも注の例に反せり。さて此御社は。式攝津國東生郡難波坐生國々魂神社二坐。皇名神大月。女相嘗新嘗。とあり。釋紀には生國咬國魂神。三代實錄には生國魂神とあり。臨時祭式に難波大社と出せり。今生玉社と呼ぶ。祭神は舊事紀に。生國是大八洲之靈。今生島御巫齊祀矣。とあるこれなり。式祝詞に據に。島之八十島を天皇に寄し奉り給ふ神なり。故に八十島祭に預り給ふ生島足島神とも申し。また生國足國神とも申せり。三代實錄に。貞觀元年正月。從五位下勳八等難波生國魂神授<sub>ニ</sub>從四位下<sub>ニ</sub>とあり。社家注述に。天活玉。命とあれと疑はし。攝津志云。舊在<sub>ニ</sub>玉造生玉庄府城地。天正中太閤

遷<sub>ニ</sub>祠<sub>ニ</sub>郡<sub>ニ</sub>戸南。加<sub>ニ</sub>其祭田<sub>ニ</sub>とあり。○庚戌。十四日なり。○詔曰云々は。宣命の文にてありけんを。此紀には或は省き或は漢文に譯し抔して。眞を傳へさるは惜らし。○古人大兄。下文に古人太子とあり。案に古人大兄皇子。此時皇太子となりて坐しなるへし。然らざればかく云へきにあらず。此事既に前紀にも云り。○殿下は。儀制令に。於<sub>ニ</sub>三后皇太子。上啓稱<sub>ニ</sub>殿下。集解。殿下皇太子所稱。とあり。○且立舅云々。和名抄。母之昆弟爲<sub>ニ</sub>舅。母方乃乎知とあり。輕皇子は御母方なればなり。按にこの鎌子連の議は。前に輕皇子と約せしことありしを。今古人大兄に託言て。輕皇子を慈憐したるなり。公傳に此事を記して曰。實大臣之本意也。識者云。君子不<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>言。見<sub>ニ</sub>于今日。帝之得<sub>ニ</sub>天下。全鎌子之力也とあり。○禪位の下。集解に。活字本に據て。於輕皇子の四字を補へり。○云々。是亦宣命の語なるか故に。かく省けるなるへし。

輕皇子再<sub>ニ</sub>三固辭。轉讓<sub>ニ</sub>於古人大兄。更名<sub>ニ</sub>古人。大市皇子。曰。大兄命是昔<sub>ニ</sub>天皇所生。而又年長。以<sub>ニ</sub>斯<sub>ニ</sub>一理。可居<sub>ニ</sub>天位。於是古人大兄避<sub>ニ</sub>座。逡巡<sub>ニ</sub>拱手辭。曰。奉<sub>ニ</sub>順<sub>ニ</sub>天皇<sub>ニ</sub>聖旨。何勞<sub>ニ</sub>推讓<sub>ニ</sub>於臣。臣願<sub>ニ</sub>出家。入<sub>ニ</sub>于吉野。勤<sub>ニ</sub>修佛道。奉<sub>ニ</sub>祐<sub>ニ</sub>天皇。辭<sub>ニ</sub>訖。解<sub>ニ</sub>所佩刀。投<sub>ニ</sub>擲<sub>ニ</sub>於地。亦命<sub>ニ</sub>帳內。皆令<sub>ニ</sub>解<sub>ニ</sub>刀。即日詣<sub>ニ</sub>於法興寺佛殿。與<sub>ニ</sub>塔間。別<sub>ニ</sub>除<sub>ニ</sub>髻髮。披<sub>ニ</sub>著袈裟。



注古人大市皇子。大市地名なり。倭名抄大和國城上郡大市これなるへし○昔天皇。昔とは前と云か如し。其心を得てよめり○拱手。手を拱るは。形容をつくるなどのつくりと同じく。手を正しく爲玉ふさまなり。コマスクの方は。禮容のさまとも見えす。こゝに聊かなはずや○勞を。イタハシクと訓しは。イタツカハシクの誤なるへし○投擲於地。古人大兄は。先帝の長子に坐ませは。御位に即給ふは理なるを。中大兄のそれを引越して。御自位を踐み給はむと。おもほす下心ますか故に。まつ御舅を位につけまゐらせむとするは。古人大兄を引たかへ給ふ計略なることを。既く知しめせは。甚く其を憾み憤りますか故に。何勞推讓於臣。など宣はせて。佩刀をさへに地に投げ擲給ふなり。これ後日此皇子の。吉野にて謀反し給ふ張本と申すへし○即日。本に日を自に作る。今北野本考本集解等に據りて改む○袈裟は。和名抄。袈裟天竺語也。俗云介佐。名義集に。袈裟具云迦羅沙曳。此云不正色。從レ色得レ名。章服儀云。袈裟之目因於衣色。如經中壞色衣也。などあり。

由是輕皇子不得固辭。升壇。即祚。于時大伴長徳字馬連帶金。靴立於壇右。犬上健部君帶金靴立於壇左。百官臣連國造伴造百八十部羅列匝拜。

帶金靴。大伴氏の大儀に靴を負ふ事は。神代紀に。大伴連遠祖天忍日命。背負天磐靴。立天孫之前云。

云。とあり○金靴。こゝにはじめて見えたり○犬上健部君。犬上は姓。健部は名なり。犬上君。景行紀に出。後世踐祚大嘗に。左右衛門。左右近衛。左右兵衛の職分れて。左右を警衛することの。始めて此時に起れるなり。但し其職は。雄略帝以來。大伴佐伯二氏の任なるを。此時佐伯氏に然るべき人なりし故などにて。犬上君に其職を命し給ひしものなるべし。この氏は日本武尊の御裔にして。景行御時。尊務部を大伴連の遠祖武日に賜ひし事のある。其時の由縁などおほして。此氏に此御時靴を負ひて。仕奉らしめ給ひしものと見えたり。

是日奉號於豐財天皇。曰皇祖母尊。以中大兄爲皇太子。以阿倍內麻呂臣爲左大臣。蘇我倉山田石川麻呂臣爲右大臣。以大錦冠授中臣鎌子連爲內臣。増封若干戸云云。

號於。本に倒せり。今集解に據て改○皇祖母尊。御名義既に云り。さて此時。未だ太上天皇の御號はなかりしなり○爲皇太子。按に中大兄。舒明十三年崩の時。既に東宮とあり。此時又改めて冊立し給ひしなり。舒明紀に云ることとも。考合すへし○阿倍内麻呂。亦倉梯麻呂とも云。補任に左大臣安倍倉橋。一名内麻呂。又稱大鳥大臣とあり○左大臣右大臣の稱。始めて此に見えたり。さて大臣の訓。此時なほオホマヘツキミと云しなり。一本の書訓にしかあり。倭名抄。左右大臣。於保萬宇智岐美とあり。職原鈔云。



奏漢以來。有相國左右丞相之號。已知庶政。異于古三公。我朝天孫天降時。天兒屋太玉命。奉天照大神勅。爲左右之扶翼。如今世左右相。神武東征之後。天下一統。二神之孫。天之種子命。天富命。又爲左右。皇極天皇四年。始置左右大臣。止大連。こある。即此時の事なり。職員令に。左大臣一人。掌下統。理衆務。舉持綱目。總判庶事。右大臣一人。掌同左大臣。こあるも。此時の制に據り給ひしなり。○大錦冠。集解云。按大化三年制。七色冠。大錦冠在第四品。曰以大伯仙錦爲之。以織裁冠之緣。是也。此時未建第品。以此冠賜爲內臣而已。こ云れたるか如し。天武紀にも其辭者大乙上。更以錦織飾之。續紀天平寶字七年八月。遣高麗國。船名曰能登云々。新曰。幸賴船。平安到國。必請朝廷。願以錦冠。至是緣於宿禰。授從五位下。其冠制銘表。經高麗。○內臣。扶桑略記抄本云。年二十一。又云。內臣准大臣位也。こあり。按に内は親愛の辭なり。武内宿禰の内。續紀宣命なる内兵。の内なごの如し。さて蒲生氏云。鎌子之爲內臣。史云。據宰臣之勢。處官司之上。然是時蓋未位。於左右大臣之上。其爲內大臣。職原抄以爲位其上。こ云るはさるることなり。萬葉考一に。此公を内臣と云しは。其比内外の位ありし類。にはあらず。内つ宮の事を。専ら總知をいふなり。元正紀養老五年十一月。詔曰。凡家有沈。大小不安。幸發。卿房前當作內臣。計會内外。准勅施行。輔翼帝業。永寧國家。こあるは。此鎌足公の内臣にならへ給ふと見ゆれば。是を以て當昔をも知へきなり。且鎌足公始め内臣と聞えし時は。大錦冠にて四品に當り。房前公も右の時位にて大臣にあらすといはれたる。この説は非なり。○増封若干戸。こには若干戸とのみあれど。補任に鎌足殺入鹿。賜恩賞。授內臣。詔曰。社稷獲安。寔賴公力。仍拜大錦冠。封二千戸。軍國機要。任公所分。こあるは。此時賜へるは二千戸也。さて倍比登は戸口の義なり。太神宮儀式帳。禰宜内人等。戸人夫。正統記に前後封を給ふこと一萬五千戸とあり。賦役令云。凡封戸者。皆以課戸充。調全給。其田租爲二分。一分入官。一分給主。民部

式曰。封戸率。租。毎戸以四十束爲限とあり。なほこの事續紀十七太政官奏。また拾芥抄中の九段に詳なり。○云々とある處に。右の詔宣命の文にてありしなるへし。次の文なる計從事立。も。其文内なるへし。

中臣鎌子連。懷至忠之誠。據宰臣之勢。處官司之上。故進退廢置。計從事立云云。以沙門曼法師。高向史。立理。爲國博士。辛亥。以金策。賜阿倍倉梯麻呂大臣。與蘇我山田石川麻呂大臣。或本云。賜練金。乙卯。天皇。皇祖母尊。皇太子。於大槻樹之下。召集群臣。盟焉。告天神地祇曰。天覆地載。帝道唯一。而末代澆薄。君臣失序。皇天假手於我。誅殄暴逆。今共瀝心血。而自今以後。君無二政。臣無貳朝。若貳此盟。天災地妖。鬼誅人伐。皎如日月也。改天豐財重日足姬天皇四年。爲大化元年。

沙門曼法師。釋氏要覽云。沙門。肇師曰出家之都名也とあり。下文には僧曼法師とあり。○國博士。集解云。按此職非職員令所置國博士。蓋漢博士之職。若唐國子博士職。而脱子字と云り。令に所謂國博士は。一國の博士なるを。此時の國博士は。天下の博士にて。さす處の國字いと博し。子を脱すと見



るは非なり○辛亥は十五日なり○金策は。金を以て作りたる書板なり。フタとも云。箱をフタとも訓に同じ。金策字。文選四京賦及魏志に見えたり。後世に所謂賞牌の如きものと見えたり○阿倍倉梯麻呂。十市郡に阿倍村倉梯村あり○練金。本訓にコマカネとあるは誤なり。釋に古那加彌とあるよろし。集解云。按練練誤。檢字書。練縮也。又煮練而熟之也。説文鍊。治金也。凡物精熟者。皆爲鍊。從金爲是。とあるに従ふへし。さて古那加彌は熱金なり。また欽明紀に。熱喫をもコナシハマムとあり○乙卯は十九日なり○大槻樹之下は。集解云。按皇極天皇二年紀曰。移幸飛鳥板蓋新宮。是即岡木宮也。天皇即位不謂宮。明於此宮。或云。大槻帝宮内之廣庭。と云へり。信友云。法隆寺緣起曰。小治田天皇大化三歲次戊申云々。小治田宮は。推古皇極二帝御世の稱なり。しかして孝德天皇禪を受給ひて。大化元年六月猶小治田宮に坐し。同年十二月都を難波長柄豊崎宮に遷し給へり。故其初世の宮號を以て。又小治田天皇と稱すなりと云へり。按に皇極紀元年十二月。天皇遷移小墾田宮。二年四月。移幸飛鳥板蓋新宮とあれど。緣起に據るに。兩宮に往來して天下を治玉ひしなり。さらば此に大槻樹の下とあるは。小墾田宮ならんも知りかたし○盟焉。本に焉を曰に作れり。今秘閣本中臣本に従ひて改む○告天神地祇曰云々以下。本には小字なれども。考本集解本に據りて大書せり○二政貳朝とは。蘇我氏の如き朝廷を欺蔑し奉り。自ら天日嗣の御業を僭せるをさして云○貳此盟。貳は貳の誤りと云説もあれど。按に貸の譌なるへし。字彙に貸惕德切。與貳同とあり。續後紀八に。時移事貸カタとあるも一證なり。字典にも貸音。月令。日月星長之行。宿離不貸。注不貸。也とあり。○皎如日月。こ

れまで。大書にすへし。平田翁云。此盟告の文を熟く讀味ひて。後にも蘇我氏の如き驕傲れる臣の。出来なんことを。憚り所思看せる事を知り。また封縣の有狀を罷めて。郡縣の制度を用ひ給へる由をも悟るへしと云へり。人の諾ウケなはさらんかと危ふみ思召して。天神地祇に告盟給へるなり。これを漢文に書きたるは。玄理曼法師の徒の所作ならむ○大化元年。通證云。釋曰蘇我入鹿伏誅。暴虐頓止。天下安靜。教化大行。故建元曰大化。日本紀略弘仁詔云。朱雀以前未有年號之目。難波御宇始顯大化之稱。本朝改元考曰。按本朝文武天皇。創建大寶之號。稱此雖有孝德天皇之大化白雉。天武天皇之朱鳥。而紀一時之瑞。未爲定式。故源親房正統記。以大寶爲年號之始とあり。按に濫觴鈔二中歷和漢合符如是院年代記等。並に繼體帝時。始建年號曰善記とあり。然れども正史に所見なし。但し繼體帝以來。年號往々逸文に存してあれは。なしとは誣ひかたし。按ふに當時民間には。記録と云ふ者なく。唯朝家に記載の事ある時は。其年號を記して天下に廣布せず。大化に至りて。漢土の風に倣ひて。始めて天下に布告し。建元のよしを知らしめ給へるなり。此諸書に大化を年號の始めと爲し。所以なり。さて此大化を。舊訓にハシメテナルと讀めるは。恐らくは後人の。文字に付きて唱ふる所か。此後白雉をシラキマスと訓めるも亦同じ。唯し天武紀に朱鳥を。注に阿訶美菩利とあるは。信友云。此訓年號に似す。但當時天皇の特旨を以て。華言に唱へしもの歟と云へり。按に當時朱鳥の訓も。大化白雉の訓に基けしものならむも知るへからず。しからはハシメテナル。シラキマスも。亦しか稱せしもの



ならんか。なほ考ふへし。

大化元年秋七月丁卯朔戊辰。立息長足日廣額天皇女。間人皇女。爲皇  
后。立一妃。元妃阿倍倉梯麻呂大臣女。曰小足媛。生有間皇子。次妃蘇  
我山田石川麻呂大臣女。曰乳娘。丙子。高麗百濟新羅。並遣使進調。百  
濟調使兼領任那使。進任那調。唯百濟大使佐平緣福。遇病留津館。而  
不入於京。

戊辰は二日なり。○小足媛。帝王編年紀に男足に作れり。○丙子は十日なり。○高麗百濟新羅。東國通鑑を  
按に。此年唐太宗貞觀十九年。新羅善德女王十四年。高句麗寶藏王四年。百濟義慈王五年なり。○百濟調  
使。本に使を進に作るは誤なり。今中臣本考本小寺本に據て改む。○進任那調。本に進字なし。今中臣  
本考本水戸本に據りて補ふ。○津館。難波津館なり。

以巨勢德太臣。詔於高麗使。曰。明神御宇日本天皇。詔旨。天皇所  
遣之使。與高麗神子。奉遣之使。既往短而將來長。是故可以温和之心。

相繼往來而已。又詔於百濟使。曰。明神御宇日本天皇詔旨。始我遠皇  
祖之世。以百濟國爲內官家。譬如三絞之綱。中間以任那國。屬賜百  
濟。後遣三輪栗隈君東人。觀察任那國堺。是故百濟王。隨勅悉示其堺。  
而調有闕。由是却還其調。任那所出物者。天皇之所明覽。夫自今以後。  
可具題國與所出調。汝佐平等不易而來。早須明報。今重遣三輪君  
東人。馬飼造。又勅。可送遣鬼部達率意斯妻子等。

以字。本になし。今考本に據りて補ふ。○明神。續紀に現御神とあり。共にアキツミカミと訓むへし。  
本訓にアラミカミ。萬葉に明津神吾皇とあり。天皇は明らかに神に坐すよしなり。○御宇日本。日本は音讀の  
とあるはわろし。高麗に明津神吾皇とあり。天皇は明らかに神に坐すよしなり。○御宇日本。日本は音讀の  
國號なり。この事は既に云り。こゝはニホンシロシメスと訓むへし。かくかへりてよむ例は。二年二  
月紀の下に云り。○天皇詔旨。公式令書式に。明神御宇日本天皇詔旨。義解謂。大事宣於蕃國使之辭  
也。とあり。公式令書法は。此時に始りしなり。詔旨は續紀に大命良麻とあり。良麻は辭なり。此事は  
既に云へり。○高麗神子。皇國はもとより神國なるは。さるものなから。蕃國と雖。みなわか神明の旨  
の。彼國に天降り坐して。神を生み人を立給ひし。わか神國の古傳に基き詔ひしものなり。獨り高麗の



先祖のみ。神子と云へるにはあらず。然るに或説に。按高句麗之先東明。本北夷靈龜王之子。侍兒見天上有氣如大鷄子。來降我。有姁遂生男。是東明父王以爲神。故云。蓋對明御神之辭。云はれたるなり。○相繼往來而已は。集解云。按使至之日短。不<sub>レ</sub>至之日長。故曰可<sub>レ</sub>以相繼而至<sub>二</sub>朝廷<sub>一</sub>也と云へり○  
 三絞之綱は。ミツミノツナと訓むへし。本にミ絞をミセと訓めるは詳ならず。按にミアとあり。ミアはミツミといふに同じ。萬葉四に。吾以在三相ニヨレ流絲用而附手益物。出雲風土記に。三身之綱打掛而などあり。正字通云。糾ニ合繩又絞也とあり。今ミツグリと云へり。さて譬の意は。集解に言官府及百濟任那合如<sub>三</sub>糾之綱<sub>一</sub>とあるが如く。三絞に  
 差る綱の。相離る可からざる義なり○屬賜百濟。この事紀中に所見なし。何れの御世の事か知るへからず。なほ推古紀三十一年に。是歲新羅伐<sub>二</sub>任那<sub>一</sub>附<sub>三</sub>新羅<sub>一</sub>と云る事ある條に。中臣連國の議に。任那是元我内官家。今新羅人伐而有<sub>レ</sub>之。請戒<sub>二</sub>戎旅<sub>一</sub>征<sub>二</sub>伐新羅<sub>一</sub>。以取<sub>二</sub>任那<sub>一</sub>附<sub>三</sub>百濟<sub>一</sub>。寧非<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>于新羅<sub>一</sub>乎。田中臣曰。不然。百濟是多反覆之國。道路之間尙詐<sub>レ</sub>之。凡彼所<sub>レ</sub>請皆非之。故不可<sub>レ</sub>附<sub>三</sub>百濟<sub>一</sub>と云ふこともあり。考合すへし○三輪粟隈君東人。集解に按<sub>三</sub>三輪氏<sub>一</sub>在<sub>二</sub>粟隈<sub>一</sub>者と云り。和名抄山城國久世郡粟隈○國與所出調を。題<sub>レ</sub>しめ給ふは。其符合を知らんか爲なり。與を衍と云ふ説はよからず○不易面。續紀變顔。萬葉に面變などをよめり。後拾遺集の歌にも此詞見えたり○馬飼造。繼體紀に馬飼首御狩。又河内母樹馬飼首ともあり。欽明紀に河内馬飼首押勝あり。同姓なるへし。續紀天平神護元年五月。播磨守從四位上日下部宿禰子麻呂等言。部下賀古郡人外從七位下馬養造人上款云。人上先祖吉備都彥之苗裔。上道臣息長。借鎌。於<sub>二</sub>難波高津朝廷<sub>一</sub>。家<sub>二</sub>播磨國賀古郡印南野<sub>一</sub>。其六世之孫牟射志。以<sub>二</sub>能養<sub>一</sub>馬。仕<sub>二</sub>上宮太子<sub>一</sub>。被<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>馬

司。因<sub>レ</sub>斯庚午年造<sub>レ</sub>籍之日。誤編<sub>二</sub>馬養造<sub>一</sub>。伏願取<sub>二</sub>居地之名<sub>一</sub>。賜<sub>二</sub>印南野臣之姓<sub>一</sub>。國司覆審<sub>スル</sub>所<sub>レ</sub>申有<sub>レ</sub>實。許<sub>レ</sub>之。とあり○鬼部達率意斯。鬼部は高麗部曲の名なるへし。前紀に前部後部上部下部などあり。其類なり。集解云。按皇極天皇二年紀曰。達率自斯。自斯質達率武子之子。蓋意斯亦自斯之屬。質<sub>二</sub>于是<sub>一</sub>者。と云へり。

戊寅。天皇詔<sub>二</sub>阿倍倉梯萬侶大臣<sub>一</sub>。蘇我石川萬侶大臣曰。當遵<sub>二</sub>上古聖王<sub>一</sub>之跡。可<sub>レ</sub>治<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>。復當有<sub>レ</sub>信。可<sub>レ</sub>治<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>。己卯。天皇詔<sub>二</sub>阿倍倉梯麻呂大臣<sub>一</sub>。蘇我石川萬侶大臣曰。可<sub>レ</sub>歷問<sub>二</sub>太夫與<sub>三</sub>百伴造等<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>悅<sub>二</sub>使民之<sub>一</sub>路。庚辰。蘇我石川麻呂大臣奏曰。先以祭<sub>二</sub>鎮神祇<sub>一</sub>。然後應<sub>レ</sub>議<sub>二</sub>政事<sub>一</sub>。是日。遣<sub>二</sub>倭漢直比羅夫於尾張國<sub>一</sub>。忌部首子麻呂於美濃國。課<sub>二</sub>供<sub>三</sub>神之幣<sub>一</sub>。

戊寅。十二日なり○上古聖王は。わか上古御世々々の天皇等を申すこと。云ふまでもあらず。然るに守部か。吾皇祖神を云ふに非ず。漢國に所謂堯舜禹等王を指すなり。故二年詔に。朕聞明哲之御<sub>レ</sub>民者云々等の文多くある。皆之なりとあるは。甚しき非なり○可<sub>レ</sub>治<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>の可<sub>レ</sub>字。本に而に作る。今考本に據りて改む○己卯は十三日なり○以<sub>レ</sub>悅<sub>二</sub>使民<sub>一</sub>。通證に易<sub>レ</sub>兌卦。已見<sub>二</sub>敏達紀<sub>一</sub>とあり。さて平田翁云。今新



制を施さむと思はして。まつ百官に歴問し給ふに。民を悦はしむる路を問ひ給ふこと。實に哲王の民を愛しみ給ふ御意なり。天皇いかてか神道を輕し給ふ王に坐すべきと云へり○庚辰。十四日なり○先以祭鎮神祇云々。太政官式云。凡内外諸司所申庶務。辨官惣勅申太政官。其史讀申。皆依史次。若申數事。各先神事。かふる意はへの文。後の物なから禁秘抄。樵談治要等にも見えたり。いと尊し。政をマツリコトと訓めるも。即祭事なり。上古は祭政一致にして。祭神は即政事の源なり。皇國の人民。皆神明の統なるか故に。神祇を重するは民心なり。其民心を悦ばしむるは。神祇を祭るにあり。故其本源を擧て。昨日の詔に答奉れるなり○倭漢直比羅夫。この人三年下に。工人大山位倭漢直荒田井比羅夫。白雉元年下に。將作大匠荒田井直比羅夫とあり○供神之幣。集解に蓋大嘗祭神幣也と云へるか如く。尾張美濃は。決て悠紀主基の二國を云なり。重胤云。此より前の御紀に。二國相並びて記せる事は無きを。此より下。天武持統御紀共に。二國を並擧たるは。御紀を撰はせ給ひし當時より。近き御世なりしか故に。傳はれりしなり。其より前代は。事有し國名耳傳はりしなりと云り。

八月丙申朔庚子。拜東國等國司。仍詔國司等曰。隨天神之所奉寄。方今始將修萬國。凡國家所有公民大小所領人衆。汝等之任。皆作戶籍。及按田畝。其藪池水陸之利。與百姓俱。

庚子。五日なり○東國等國司。信友云。等字司下に在るへしと云へり。今按に恐らくは行なるへし。さて國司を置くこと次年にあり。此は先東國々司を拜し給ふなり○隨天神之云々。奉寄とは。天神より受傳へて。其を國司に寄し給ふ意か。又按にウケハツケの誤か。さらば附寄の意なり。神代に天神の。葦原中國を。皇孫に寄し奉り給ひし舉は。萬民を惠み治め給へとの御心なり。然るに其本の御契を中頃の世より失ひ給ひて。權臣等に政事を依託し給ひしかは。世は大に亂れたり。今は其本のいはれを覺悟りたまひて。これより改めて。天神の御心の隨に。萬國を修め給はんこと也○國家所有公民。本の訓は誤なり。ミカトノシロシメス公民と訓むへし。朝廷の所有し給ふ所の公民と云ふことにて。即公領の民なり。然るに本居翁の説に。公民は卑賤の稱にあらず。天皇よりして申すときは。貴賤さなく悉く皆民なり。此に所謂公民は。官位を帶へる人衆を領する人にて。下文に所謂名々王民も。また朝廷に奉仕れる人を指言へるにて。合せ考ふへしと云はれたるは。本の訓に。アメノシタニアリトアル云々と訓めるに。據られたるなり。さる意にはあらず○大小所領人衆は。臣連伴造等の所領の人衆にて。所謂私領の民なり。公民に對せる名號なり○皆作戶籍。按に欽明紀元年に。秦漢投化人。安置國郡。編貫戶籍とあり。其諸國戶籍を作れる事。此に始めて出て。下の二年紀及天智紀九年に見えたり。當昔籍は國司の許に在て。朝廷には上られさりけんを。此に至て有司をして按へ定めて。籍を造らしめ給ひしなるへし○按田畝。この事二年紀及田合に見えたり。ハタケは和名抄に畠波太毛とあり。畑毛の義なり○藪池は。



蔬菜樹菓の生ふる地なり。令に園池司あり○與百姓俱。通證云。宜與百姓共議之。ごあり。按ふには百姓と共に其利を分ちて。國司等獨り其利を占むる事を待されど。詔へるなるへし。當時民戸田畝園池水陸等。多く私有に屬せしを。今其等を公に收めて。公有と爲し給ふが故に。改めて戸數田數等を作定めしめ給ふなり。推古紀憲法に。卒土兆民。以レ王爲レ主。所レ任官司。皆是王臣。何敢與レ公。賦三歛百姓ごありしか。此に至りて始めて其實行はれしなり。さて是よりして。始めて國造の權を折き。國司の威を増さしむ。凡國造は。功臣の後と。皇別とに任給ひしも。神代の國主の遺風なりしを。爰に至りて郡縣の制に本ける。是政治の姿を一變せるなり。

又國司等在國不得判罪。不得取他貨賂。令致民於貧苦。上京之時。不得多從百姓於己。唯得使從國造郡領。但以公事往來之時。得騎部內之馬。得食部內之飯。介以上奉法。必須哀賞。違法當降爵位。判官以下。取他貨賂。二倍徵之。遂以輕重科罪。其長官從者九人。次官從者七人。主典從者五人。若違限外將者。主與所從之人。並當科罪。若有求名之人。元非國造伴造縣主稻置。而輒詐訴言自我

祖時。領此官家。治是郡縣。汝等國司。不得隨詐便牒於朝。審得實狀。而後可申。

唯得使從國造郡領。職員令。大領一人。掌下。養所部。檢察郡領。事ごあり。さて得使從とは。國造郡領を從へ來れと云ふには非ず。これらは政事の便に依りて。從へ來らされはならぬ事もありて。百姓とは異なれば。自然率て來らざることを得ざる場合には。從はしむることを得せしめむとの義なり。○部內之馬。部內之飯は。所謂役馬役米なり。○介以上は。職員令に大國介一人。掌同守ごあり。○判官以下。按ふに官に四等を建てしこと。始めて此に見えたり。倭名抄に。長官。國曰レ守。次官。國曰レ介。判官。國曰レ掾。佐官。國曰レ目。ごあり。マツリコトヒトは政人の意にて。其官省中の事を治むる職名なり。○次官從者七人。此次に判官從者六人等の字を脱せしならん。○求名之人は。門地を偽り榮名を求むる人を云ふ。○縣主。本に主字なし。必あるへき所なり。成務紀に縣主稻置とあれば。縣稻置と云ふへきか如くなれど。なほしからし。故今假に補ふ。さて縣をコホリと訓めるは是からず。アカタと訓むへし。○輒詐訴言。或は遠祖の功を以ちて賜はる所の地と稱し。或は殊恩を以て賜はる所の民と稱して。各其故由を訴ふる中に。詐偽を構へしもの。當時多ありしなり。



又於閑曠之所起造兵庫。收聚國郡刀甲弓矢。邊國近與蝦蟇接壤處者。可盡數集其兵。而猶假授本主。其於倭國六縣被遣使者。宜造戶籍。并按田畝。謂檢覈聖田頃畝。及民戶口年紀。汝等國司。可明聽退。即賜帛布。各有差。

閑曠の訓。徒然草にも。いたつらなる所とあり。○盡數集其兵。本の訓はわろし。コトクニ其兵ヲアツメテ。なご訓すへし。○假授。本に授字なし。今中臣本薩摩本水戸本等に依て補。○倭國六縣。式祈年祭祀詞に。御縣爾坐。皇神等前爾白久。高市。葛木。十市。志貴。山邊。曾布登御名者白氏。此六縣爾云々。廣瀬大忌祭詞。倭國能六御縣云々とあり。さて此六縣は。天皇の御料たる事。推古紀に葛城縣を。馬子大臣の乞申したる事あるなどにも。知られたれど。なほ此文にて明らかなり。さて天皇の御料なるか故に。今特に使者を差したまふなり。○注謂檢覈聖田頃畝云々。通證云。聖田所開墾之田。頃畝田數也。舊讀恐非。戸戶計也。口生齒也。年紀令義解猶云三年歲也とあり。此註文集解に。此十三字爲下私記據後漢書光武記文所注。後遂撥入と云へり。

是日。設鍾置於朝。而詔曰。若憂訴之人。有伴造者。其伴造先勘當而奏。

有尊長者。其尊長先勘當而奏。若其伴造尊長。不審所訴。收牒納置。以其罪罪之。其收牒者。味旦執牒奏於內裏。朕題年月。便示群卿。或懈怠不理。或阿黨有曲。訴者可以撞鍾。由是懸鍾置於朝。天下之民咸知朕意。

鍾置云々。鍾鐘と通ずる事既に云へり。さて鐘を懸くること。淮南子に見えて。禹の時に始まり。を朝堂に置く事。唐書則天后紀垂拱二年に見ゆ。○而詔。本に而字なし。今類史に據て補ふ。○勘當而奏。集解云。按言若伴有憂訴之事。造先勘之。可奏則奏。とあり。按に伴造尊長。まづ勘當て奏する事。後代に氏長の事と爲れり。武家執權の時に。其家の惣領勘當て白し事。往々其頃の書に見えたるは。此時の詔旨の後まで存せるなり。○不審所訴收牒納置。かくの如くよむへし。舊訓は誤れり。收牒納置とは。牒を置に納るへき心掟を。教へ給へるなり。まかふこと勿れ。○題年月は。公式令詔書式に。年月御書日とある。其起本なり。○阿黨。狩谷望之云。靈異記償加太知波比。按孝德紀阿黨。類聚名義抄。字鏡集。並儻字同訓。此償字疑儻字之譌。と云り。言義加多は偏なり。知波比は幸の義にて。其人に偏幸あらしむるを云ふなり。○有曲。句なり。舊讀誤れり。さて訴者に可撞鍾となり。



又男女之法者。良男良女共所生子。配其父。若良男娶婢所生子。配其母。若良女嫁奴所生子。配其父。若兩家奴婢所生子。配其母。若寺家仕丁之子者。如良人法。若別入奴婢者。如如婢法。今克見人爲制之始。

男女之法を立給ふ旨意は。豫め其奸濫を拒き絶たしむるにあり。其意を以て解すへきなり。持統紀五年にも見えたり。戸令をも併考ふへし。○良男良女。吏學指南云。名編。戸籍。素本。齊民。謂之良。店戸倡優。官私奴婢。謂之賤。とあり。○配其父は。これ理の當然なり。次に云。配其母は。其父を辱め。其母家を窘むるなり。○若良女嫁奴云々。配其父は。其母を辱しめ。其父を窘むるなり。○奴婢所生子配其母は。良人法と相反するなり。○右の四つを總云へは。良男良女の所生の子は。其父に配するは。尋常の婚の上に異なる事なけれども。今次々良賤の上に附きて云はんとて。まつかく云ふなり。次に良男の婢を娶て生める子は。其母に配て其父を辱しめ。其母家を窘むるなり。又良女の奴に嫁て生める子は。其父に配て其母を辱しめ。其父を窘むるなり。又奴婢の共に生める子は。總て其奸濫を懲らす意を示せるにて。いひ以て行けは。良男良女の所生の子も。奴婢の所生の子も。義理は同じけれど。其配る所を異にして。良賤を別てるまてなりと知るへし。さて右はいつれも奸の上にある事にて。尋常の婚

の上にある事にはあらず。さてこゝに瀧澤解か云へることあり。云はく。奴婢の子。今俗の常談に。夫婦離別する時。武部云。これは尋常の婚の上にて云。子あるものは。男兒は父にしたかひ。女子は母に従ふといふは心得かたし。男女をわかす。子ありて妻を去るものは。其子を父に屬らるか古法なるに。何に據りてかくはいふにやと。不審く思ふものから。法曹至要抄を見るに。似たる事あり。至要抄中巻第五十二條云。一奴婢合所生子。可從母事。捕亡令云。兩家奴婢俱逃亡生子。並從母。義解云。謂官私奴婢。與官戶家人合生男女亦同。按之於奴婢者。律比畜産。仍所生之子皆從母也。かくの如く見えたり。これは兩家の奴婢。逃亡野合して子を生めるとき。その子を母に屬らるゝなり。故いかにとなれば。奴婢は畜産に比す。譬へはわか家の猫。鄰家の猫とまじはりて子を生む時は。杜猫はこれに預らす。畜産は母有て父なきかことし。よりにて奴婢密通の子にかぎりて。其母に従はする古法なるを。思ひあやまちて。世俗女子は母に従ふといふなるへし。今も田舎には。奴婢の合して生る子を。庭子と號して譜代の家僕とし。生涯の進退を主人のまに／＼す。これまた古法なり。同書第五十一條云。一家人所生子孫。相承可爲家人事。戸令云。家人所生子孫。相承爲家人。皆任本主馳使。唯不得盡頭驅使。及賣買。按之至于累代賤隸之類。子孫承以可傳。但臨時追從之徒。苗裔繼而無任矣。これ昔よりいふ家子庭子の事なり。臨時追從の徒は。一季半季の奴婢をいふ。これらは子孫まで繼て仕ふることなし。となり。以上藤石雜記。これはこゝに預らぬ事もあれど。事の因に此に載つ。さて右にも見えたるか如く。



後世所生男子は父に配し。女子を母に配するは。此に所謂法と異なれど。貞永式目に既に其本文あり。云々奴婢所生之男女事。如法者雖有子細。任同御時之例。男者付父。女者可付母也とあり。これもついでに云おくなり。○若寺家云々。寺家は寺家の戸なり。寺戸の人諸寺仕丁と爲る者なり。通證云。寺家魏書所謂寺戸也。元正紀諸國寺家多不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>法。三代實錄太宰府解稱。觀音寺申牒。寺家人清貞宗任等三人。從五位下笠朝臣麻呂五代之孫也。麻呂天平年中爲<sub>二</sub>造寺使。通<sub>二</sub>寺家女赤須。生<sub>二</sub>清貞等。即隨<sub>レ</sub>母爲<sub>二</sub>家人。聖武紀。寺家神家地者。不<sub>レ</sub>須<sub>二</sub>改易。便賜<sub>二</sub>本地。國史。桓武天皇制定額諸寺檀越寺家。田地。任<sub>レ</sub>情買買事多<sub>二</sub>奸濫。宜<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>禁斷。とあり。さて寺家仕丁と稱するは。官の仕丁に別なるよしを云るなり。○若別入奴婢云々。若別とは。寺家仕丁にして奴婢と爲る者なり。それは良人法と異なりとなり。さて通證云。善相公意見曰。多買<sub>二</sub>良人。以爲<sub>二</sub>寺奴。桓武紀曰。太政官奏言。謹案<sub>二</sub>令條。良賤通<sub>レ</sub>婚。明立<sub>二</sub>禁制。臣等所<sub>レ</sub>望。自今以後。婢之通<sub>レ</sub>良。良之嫁<sub>レ</sub>奴。所生之子。並聽<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>良。其寺社之賤。如有<sub>二</sub>此類。亦准<sub>二</sub>上例。放爲<sub>二</sub>良人。奏可<sub>レ</sub>之とあり。○見人爲制之始。通證に。言使<sub>二</sub>人々知<sub>二</sub>爲<sub>レ</sub>制之始。也と云り。按に此文下に恐くは脱あらんか。

癸卯。遣使於大寺。喚聚僧尼。而詔曰。於磯城島宮御宇天皇十三年中。百濟明王。奉傳佛法於我大倭。是時群臣俱不欲傳。而蘇我稻目宿禰。

獨信其法。天皇乃詔稻目宿禰。使奉其法。於譯語田宮御宇天皇之世。蘇我馬子宿禰。追遵考父之風。猶重能仁之教。而餘臣不信。此典幾亡。天皇詔馬子宿禰。而使奉其法。於小墾田宮御宇天皇之世。馬子宿禰奉爲天皇。造丈六繡像。丈六銅像。顯揚佛教。恭敬僧尼。朕更復思崇正教。光啓大猷。故以沙門狛大法師。福亮。惠雲。常安。靈雲。惠至。寺主僧旻。道登。惠隣。惠妙。而爲十師。別以惠妙法師。爲百濟寺寺主。此十師等。宜能教導衆僧。修行釋教。要使如法。

癸卯は八日なり。○大寺は。百濟大寺なり。上に出。○能仁之教。本に仁下世字あり。今中臣本に據て削る。集解にも衍として削れり。さて能仁は本起經に。翻釋迦爲能仁と云へり。○天皇之世。本に天皇二字を脱せり。今中臣本に據て補。さてこの天皇は推古を申す。○繡像銅像。推古紀十三年に出。○狛大法師福亮。狛は高麗なり。元亨釋書力遊部云。福亮吳國人。受三論于嘉祥。齊明四年内臣鎌子。於陶原家精舍。請亮講維摩詰經とあり。契沖かこれを二人と見て。大法師の下に失名乎とあるは誤なり。さて大法師は僧綱の位なり。三代實錄八に。貞觀六年二月。制定僧綱位階。詔曰。國典所載僧位之制。



本有三階。滿位。法師位是也。僧綱凡僧同授。此階云々。などあり。○惠雲。舒明紀十一年に出。○常安。同紀十二年に清安に作る。○靈雲。同紀四年に出。○惠至。按に白雉三年に惠資と云人あり。同人か。○寺主僧晏。本に寺主二字小字に作れり。今釋紀に據て大書せり。僧晏に係る文なり。さて寺主の訓。中臣本にテラシとあり。集解云。北魏書釋老志曰。所檢僧尼寺主維那。又曰。永平二年。沙門統惠深。上言立制。諸州鎮郡維那上坐寺主。各令戒律。自修。僧晏出即位年紀。とあり。○道登。白雉元年に出。扶桑略記云。孝德二年丙午。始造宇治橋銘曰。世有釋子。名曰道登。出自山尻惠滿之家。大化二年丙午之年。搆立此橋。濟度人畜。件道登者。本是高麗學生。元興寺沙門也。とあり。○惠憐。傳しれず。○惠妙。本に脱せり。今中臣本釋紀に據て補ふ。天武紀九年卒とあり。さて此下に。集解に惠隱二字を補て云く。原脱惠隱。福亮以下爲九人。惠隱出舒明天皇十二年紀。白雉三年講無量壽經。其大德在十師中。明矣。故補。とあり。○十師。續紀寶龜二年。十禪師を置とあり。元亨釋書云。大化寶龜之十師者。北齊昭元十統之所。自乎とあり。なほ十師の事。塵添壇囊抄にも見えたり。

凡自天皇。至于伴造所造之寺。不能營者。朕皆助作。今拜寺司等與寺主。巡行諸寺。驗僧尼奴婢田畝之實。而盡顯奏。即以來目臣。名三輪色夫君。額田部連甥。爲法頭。

天皇は。先代の天皇を申す。○不能營は。修覆すること能はぬ寺を云。○今拜。本に今を合に作る。中臣本交本に據て改む。○寺司等。集解に等を衍として削れり。○寺主。推古紀に出。寺主は僧所稱。寺司は俗所稱の異あり。○田畝之實は。寺家の占むる所の田畝の地なり。○來目臣。姓氏錄右京皇別。久米朝臣。武内宿禰五世孫。稻目宿禰之後也。日本紀合。大和久米臣。柿本臣同祖。天足彥國押人命五世孫。大難波命之後也。とあり。天武紀十三年十一月。來目臣賜姓曰朝臣。○額田部連。推古紀十六年に出。○法頭。同紀三十一年に出。

九月丙寅朔。遣使者於諸國治兵。或本曰。從六月。至九月。遣使者於四方國。集種種兵器。與蘇我田口臣川堀。物部朴井連稚子。吉備笠臣垂。倭漢文直麻呂。朴市秦造田來津。謀反。或本云。古人太子。或本云。古人大兄。此皇子入。丁丑。吉備笠臣垂。自首於中大兄。曰。吉野古人皇子。與蘇我田口臣川堀等。謀反。臣預其徒。或本云。吉備笠臣垂。言於阿倍大臣。與蘇我大中大兄。即使菟田朴室古。高麗宮知將兵若干。討古人大市皇子等。或本云。十一月甲午。二十日中大兄。使阿倍渠人大兄。斬古人大兄與子。其妃妾自經死。或本云。十一月。吉野大兄王謀反。事覺。伏誅也。



治兵。兵は兵器なり。軍防令に。凡國司每年孟冬簡閱戎具とあり○戊辰は三日なり○蘇我田口臣川堀。姓氏錄左京皇別。田口朝臣。石川朝臣同祖。武内宿禰大臣之後也。編蝠臣。豐御食炊屋姫天皇御世。家於大和國高市郡田口村。仍號田口臣。日本紀漏とあり。氏人は。白河帝時。大宰貢綿使田口爲友。鳥羽帝時。因幡大掾田口朝臣重國。朝野群載に見えたり。源平盛衰記に。讚岐人阿波民部大輔成直。田内左衛門と稱。東鑑に田内を傳内に作る。音同し。其水姓田口を以稱としたるにて。此氏族なりと云り。其子孫三河に徙りて。牧野氏と爲れりと。牧野系圖にありと云り。○物部朴井連推子。本に連字脱せり。今中臣本及集解に據て補。齊明紀四年に。物部朴井連舖に作る。此に據るに推子はシヒコと讀へし。舊訓は誤なるへし。天孫本紀に。物部荒猪連公。榎井臣等祖。惠佐古。大連之子。弟物部弓梓連公。弟物部加佐夫連公。弟物部多都彥連公。共榎井臣等祖。此人等みな孝德天皇朝の人とあり。とあり。同族なるへし。また姓氏錄に。和泉神別。榎井部。饒速日命四世孫。大矢口根大臣命之後也と云るもあり。舊事紀に大矢口宿禰命と同一也。氏人は。天武紀に朴井連雄君あり。壬申功臣なり。氏上を賜はれり。本族これより興れり。文武紀二年大嘗に。直廣肆榎井朝臣倭麻呂。本宗物部氏に代りて。大楯を暨とあり。貞觀儀式に據に。是後本氏石上氏と。世々其事を掌れり。元正紀に。從八位下榎井連持磨朝臣を賜ふ。仁明紀に。和泉日根郡人。正六位上春江宿禰島公兄弟。改賜榎井朝臣。外記日記に堀河時榎井定員あり○吉備笠臣垂。本に臣字脱たり。今中臣本及集解に據て補。笠臣應神紀十二年出。續紀天平寶字元年十二月。太政官奏曰。旌功錫命。聖典攸重。褒善行封。明王所勞。大錦下笠臣志太留。告吉野大兄反。功田二十町。所告微言尋非。露顯。雖云大事。理合輕重。依令中功

合傳二世とあり○倭漢文直。皇極紀に出○朴市秦造田來津。天智紀に出○注古人太子。本に太を大とあり。今秘閣本に依る。北野本活字本京極本。子を市に作る。下同し○丁丑。十二日なり○自首。小補韻會曰。有各自陳曰首。とあり○菟田朴室古。姓氏錄左京神別。榎室連。火明命十七世孫。吳足尼之後也。山猪子連等。仕奉上官豐聰耳皇太子御杖代。爾時太子巡行山代國。于時古麻呂家。在山城國久世郡水主村。其門有大榎樹。太子曰。是樹如室。大雨不漏。仍賜榎室連とあり。此古麻呂。この古と同人かとおもへど。時代異なり○高麗宮知。姓氏錄諸蕃に。高麗朝臣。狛首。狛造。狛人等あり。高麗朝臣。高句麗王好台七世孫。延興王之後也。狛首。高麗人安開上王之後也。狛造。高麗國主夫連王之後也。狛人。高麗國須牟耶王之後也。此は何れの族にか。狛は高麗と同じ○甲午。三十日なり。三十日の三字。傍註の加入りしなるへし○阿倍渠曾倍。姓氏錄左京皇別。許曾倍朝臣。阿倍朝臣同祖。大彥命之後也とあり。氏人は。天武紀に社戸臣大口。文武紀に造樂師寺司巨曾倍朝臣陽麻呂あり。聖武帝天平年中に。出雲島根郡大領社部臣。小領社部石臣あり。共に本國風土記に見えたり。さて渠曾倍は地名なり。攝津志。島上郡村里古曾部。舊社戸に作れり○兵三十人。秘閣本北野本中臣本。三十を冊字に作れり。通證に十。一本作千とあり。

甲申。遣使者於諸國。錄民元數。仍詔曰。自古以降。每天皇時。置標代民。垂名於後。其臣連等伴造國造。各置己民。恣情驅使。又割國縣山



海林野池田。以爲己財。爭戰不已。或者兼并數萬頃田。或者全無容針少地。及進調賦時。其臣連伴造等。先自收斂。然後分進。脩治宮殿。築造園陵。各率己民。隨事而作。易曰。損上益下。節以制度。不傷財。不害民。方今百姓猶乏。而有勢者。分割水陸。以爲私地。賣與百姓。年索其價。從今以後。不得賣地。勿妄作主。兼并劣弱。百姓大悅。

甲申は十九日なり。○錄民元數は。天下戶口の大數を總錄せしめ給ふなり。○仍詔曰。類史に法制部に收入れたり。○置標代民は。通證曰。言置下標題代號之民也。と云り。さらば此四字をば。ミヨノナヲアラハシテと訓へきか。また栗田寛は。標代民をミナシロと訓へきかと云り。さて垂名於後とは。これも通證に。穴穂部白髮部之類。古事記所謂皇后太子諸王之御名代。亦此意。とあり。御名代等の事は既に云り。○臣連等の等字。伴造國造の下に在へし。○分進。臣連以下の人。先自ら公家に貢るべき物を收斂て。而後に其餘を朝廷に分進むる也。○園陵。字書に帝王陵寢曰園。とあり。○率己民云々。次文に公家にして。宮殿園陵等を修造する時に當りて。役民乏きに依て。これを臣連等に課すれば。臣連等私民を率ゐて役に赴くなど。みな恣情に驅使するさまなり。○不害民。本に不字を脱せり。今中臣本集解に據て

補。さて此易語を引たる所以は。臣連を損じ。百姓の闕乏を益さしめむこの義なり。○百姓猶乏は。百姓の困窮するを云か。または民の元數を錄して。百姓の闕乏を知れるを云か。○水陸は。水田陸田なり。これを海陸となして見る説よからず。○索其價は。栗田寛云。公家百姓闕乏するに拘はらず。勢あるものは私地を設けて。其民を有つを云。それみな蘇我氏の借にならひて。他の臣連等。みな其私を謀るなりと云り。○百姓大悅。百姓のこれまで。公私二途に役せられたるか。今みな公民となりて。一途に役せらるることよなれるを悦へるなり。さて大化初政の順序を按するに。まつはじめに。上古聖王の跡に遵ひて。天下を始め給はむとて。悦を以民を使ふの路を問ひ給ひ。次には東國の國司を置て。漸を以諸國の國司を置かむとおもほし。戶籍を作るべき事を命じ。次には兵庫を各地に起へき事を仰せ。次には倭國六縣の事。次には憂訴の人の爲めに。鐘匱を朝に懸くるの事。次には男女の法を定むる等を命じ。九月に至りて。兵器を諸國に收め。民の元數を錄さしめ。臣連等兼并の公民土地等を禁するなど。みな其次序あるさまを見るへし。

冬十二月乙未朔癸卯。天皇遷都難波。長柄豊碕。老人等相謂之曰。自春至夏。鼠向難波。遷都之兆也。戊午。越國言海畔枯查。向東移去。沙上有跡。如耕田狀。是歲也太歲乙巳。



癸卯は九日なり○長柄。攝津風土記に長樂豊前とあり。西成郡今有南長柄北長柄一屬邑二村。と攝津志にあり○豊碕。帝王編年記云。豊碕宮。注。攝津國西成郡。攝津志云。豊碕宮在二本莊村。今有小祠。浪速上古圖說云。按に當時未だ大宮を營らす。三年に至りて。小郡を壞ちて宮を營る。これ豊碕宮地なりと云り。或人云。同村山口村惣社地。此豊碕宮の舊跡ならん。地理自らしか見えたり。是より後歷朝幸三于難波宮とあるは。此宮なりと云り○相謂。秘閣本中臣本交本に。謂を語に作る○戊午。二十四日なり○枯查。倭名抄。唐韵云。楂字亦作查。榎。字岐々。水中浮木也。うきう。源氏松風卷の歌。新古今集歌に見えたり。又神代紀に。以無間堅間一爲浮木。此等は皆舟船を云へれば。此なる枯查とは同じからず○太歳乙巳。年代記を考るに。此年唐太宗貞觀十九年に當れり。

二年春正月甲子朔。賀正禮畢。即宣改新之詔。曰。罷昔在天皇等所立子代之民。處々屯倉。及別臣連伴造國造村首所有部曲之民。處々田莊。仍賜食封大夫以上。各有差降。以布帛賜官人百姓。有差。又曰。大夫所使治民也。能盡其治。則民賴之。故重其祿。所以爲民也。

賀正禮。紀には始めてこゝに出てたれど。舊事紀神武天皇元年條に。皇子大夫。率群官臣連伴造國造等。

大化二年  
丙午

元正朝賀禮拜。凡厥即位賀正建都踐祚等事。並發此時一矣。と既に見えたり。さて賀正禮は朝拜なり。公事根源朝賀條云。辰の時に天皇大極殿に行幸なりて。行はせ玉ふなり。群臣皆禮服を着して。さながら御即位の儀式に同じ。内辨などあり。開門などありて。めしの鼓をうたしむれば。群臣列して門に入。天子高坐につかせ給へは。兵庫寮鉦をうつ。執騎ハトリいて帳を八字にかさく。近仗警蹕をせうじ。圖書主殿香をたく。典儀再拜をとなふ。群臣此時再拜す。奏賀奏瑞とて。二人のもの庭にすゝみて。祝ひ申すことあり云々。大日本史に。公事根源曰。元日朝賀始三于神武天皇元年正月。至此又見。可三以爲三朝拜之原始。按白雉元年。天皇觀白雉。儀衛如元會。然則元會之儀。至此既備。然本書此後。或書或不書。天武帝四年正月丁未。書百寮拜朝。蓋有故延至二日。有故停禮。とあり○改新之詔。通證云。謂三與三民更始一也。平田翁云。按に改新詔命合せて四條。此律令典の始めなり。さきに聖德太子の所作憲法は。律令の類に非ず。後世に所謂教訓書なり。今世に傳ふる所の令文。此詔命と全く同きものあるを以。然云なりと云れたるが如し○子代之民。いにしへ天皇々后皇子等。御子なきを以。民部を置て。御名を後に傳へ給ふ。これ子代の民なり。又御名代とも云。往々前紀に云り。今此を罷るは。一には天下の地を混一にし。一は帝后の御名を。輕しく川野に掛て呼を可畏みてなり○別は。既に云り。職名なり。景行紀に七十餘子皆封國郡。各如其國。故當今時。謂諸國之別者。即其別王之苗裔。とある是なり。皇別の義にあらず。舊讀はあやまれり○村首。下文に首長とあるこれ也○田庄。後世



に所謂庄園なり。唐韻庄莊俗字。字典莊田舍也。○仍賜食封。此すなはち漢土郡縣の制を用給ひしなり。通證云。通典曰。唐封公侯。無國土。其加實封者。食其所封之戶。分食諸郡。以租庸調給。今按以前猶漢家建國之制也。以後則依李唐之制也。集解云。六典戶部尚書曰。食封皆傳子子孫。祿令曰。凡食封者。一品八百戶。二品六百戶。三品四百戶。四品三百戶。內親王減半。太政大臣三千戶。左右大臣二千戶。大納言八百戶。若以理解解官。及致仕者減半。正一位三百戶。從一位二百六十戶。正二位二百戶。從二位百七十戶。正三位一百三十戶。從三位一百戶。其五位以下不在食封之例。按孝德天皇以前。猶封建之制。至此依李唐之制也。○大夫。公式令に。於太政官。三位以上稱大夫云々。司及中國以下。五位稱大夫とあり。この大夫以上は。五位以上也。されど此時いまた五位と云ふ名目はなし。たゞ其相當を以て云なり。○官人百姓。粟田寛云。官人百寮と云か如し。百姓は民を云に非すと云へり。○重其祿とは。上に所謂賜食封大夫以上とある是なり。

其二曰。初脩京師。置畿内國司郡司。關塞斥候防人。驛馬傳馬。及造鈴契。定山河。

初脩京師とは。京師の此に始るには非ず。其位置を改修するなり。さて初とは。嘗に京師を修むるのみにあらず。次々なる置畿内國司以下定山河まで。管到する文字なり。さて下文に其目を詳に

せり。○畿内の事。次に云。○國司。按に東國の國司を置く事は。已に前年に見えたり。此に至りて諸國の國司を置なり。さて其細目の如きは。其下に見えたり。○關塞。倭名抄。關世岐。塞會古。周禮關注界上之門也。正韻塞邊界也。關刻續紀に見ゆ。關の事此より前に見えざるは。自ら洩たるなるへし。此後天武紀に至りて。鈴鹿關。龍田山。大坂山の關などのこと見ゆ。軍防令に。凡置關應守固者。並置配兵士。分番上下。義解に關者檢判之所。刻者壘柵之處とあり。以呂波字類抄。刻亦世幾と訓り。○斥候。本に斥を片に誤る。今訂せり。職員令に征討斥候。義解謂。斥逐也。言候逐於非常也とあり。通證に。訓也加多者。繼體紀置烽候邸閣之意。訓字加美者。天武紀候字。推古紀問諜者。皆同とあり。名義窺見なり。ヤカタの訓はわろし。○防人。天智紀防の訓同し。萬葉集佐伎母理とあり。埼守なり。邊要の地に防人を置て。鎮戍に備ふるなり。鳥守とも云。軍防令義解に。凡兵士向京者。名衛士。火別取。白丁五人。充火頭。守邊者名防人。凡防人欲至。所在官司。預爲部分。謂官司者。防人司也。預爲部分者。防人未嘗。防人至後一日。即共舊人分付。交替使訖。謂主當之處。有舊使。守當之處。每季更代。使苦樂均平。と見え。靈異記に。聖武天皇御世。吉志大鷹。統兵前守所。點應經三二年。なともあり。○驛馬傳馬。驛馬は萬葉に波由麻とあり。早馬也。傳馬の舊訓他に見えず。傳は道路を經傳義なり。古歌に百傳又浦傳などの類。浦磯を經傳ふ意に同じ。廐牧令に。凡諸道置驛馬。大路二十疋。中路十疋。小路五疋。傳馬每郡各五。皆用官馬。又凡官人乘傳馬。出使者。所至之處皆用官物。其驛使者每三驛給。公式



令に。凡給驛傳馬。皆依鈴傳符刻數。事速者。一日十驛以上。事緩者。六驛以下云々。令集解穴云。給驛傳馬者。未知何人乘傳馬。答。庶牧令云。公使須乘驛馬及傳馬。又曰。官人乘傳馬。出使者。即知公使所乘也。但事急者乘驛。事緩者乘傳馬。宜應云耳。問。傳馬行程。答。師云。准馬七十里餘。などあり。按に驛馬は驛に充置を云。傳馬は驛馬の足らざる時に充るを云ふ。○造鈴契。鈴は傳令の具。契は合也。とあり。さて鈴は驛鈴をも云ひ。またたゞの鈴をも云なり。公式令に。凡車駕巡幸京師。留守官給鈴契とあり。上代旅行には。驛鈴ならずとも。鈴をたまひしこと古書に見えたり。契は本契にて。俗に云割符なり。驛鈴の名。天武紀に始めて見たり。通證に。續日本後紀曰。賚天子神璽寶劔符節鈴等。奉皇太子直曹。禁秘御抄曰。大刀契。匡房記顯實云。鋒劔三尺。或二尺。惣十云々。鈴印。同記俊實通俊云。件鈴太有與物也。或六角。或八角。中右記以太刀契爲一物。桃華藥葉。太刀與契爲二物。曰。太刀四柄者累代之璽也。國家殊被重之。契者親王大臣及諸衛契符也。天德同以修補之。魚符七十四枚。分入三壺。被加納大刀。韓櫃中。年中行事秘抄引天德紀曰。奉遷縫殿寮。實所三所。契七十四枚。皆魚形也。自背申別。各有銘。併令不損。長各二寸餘許。八枚金。四十枚銀。五十枚銀塗物。とあり。なほ契の事は。歷朝詔詞解に委しく云たるを見るべし。○定山河。通證に。成務紀。隔山河。而分國縣。今後以置關塞斥候等。而定之也とあり。

凡京每坊置長一人。四坊置令一人。掌按檢戶口。督察奸非。其

坊令取坊内明廉強直堪時務者宛里坊長。並取里坊百姓清正強幹者宛若當里坊無人聽於比里坊簡用。

凡京以下。修京師の目なり。○每坊。通證に。倭名抄。坊未知。唐武德制。鄉保隣里。在城邑曰坊。田野曰村とあり。○長一人。本に一字を脱せり。今中臣本類史に據て補。○令。私記字奈加志とあり。上より課するにて。下文催駈を訓も同じ義なり。○宛は充に同じ。さて漢書注に充當也とあり。○聽於比里坊簡用。凡京以下此に至るまで。戶令の文と同じ。戶令云。凡京每坊置長一人。四坊置令一人。掌按檢戶口。督察姦非。催駈賦徭。凡坊令。取下正八位以下。明廉強直堪時務者充。里長防長。並取白丁清正強幹者充。若當里坊無人。聽於比里坊簡用。若八位以下情願者聽とあり。

凡畿内。東自名墾横川以來。南自紀伊兄山以來。西自赤石櫛淵以來。北自近江狹狹波合坂山以來。爲畿内國。

畿内。本に畿を幾に作るは誤なり。今訂せり。さてこれより畿内を置くの目也。中島廣足云。畿内を定むること。こゝに始めて見えたり。後世五畿内國を定むる本なり。されど此時未だ國を定めず。唯京都に近き四方の地を點して。之を畿内と云るなり。後に四畿内と稱せるも。恐らくはなほ四方の地



を限りて稱するなり。さてそれを四國の號に轉して。山城大和河内攝津と定め。河内を割て和泉の國を置きしより。五畿内と稱せしならん。さて後世五畿内と稱するは。大和京より名けたるものなり。山城京よりしていはど。近江丹波も畿内に在へきを。遂に改めざるは。たゞ其名を襲しまゝにて。其實を失ひしものと謂へしと云れたり。○名聖横河以來。名聖天武紀に隱とあり。和名抄。伊賀國名張。大和志云。添上郡名張川。自山邊郡一流。經月瀬桃香野。入山城。又云。山邊郡名張川。自伊賀一流入。經鶴山。遶國界。至瀨瀬。全入本郡横川。亦出天武紀とあり。横河は後伊賀風土記に。伊賀郡中郡也云云。北限横川と見えたり。今長田川と聞ゆるを其なるへしと。信友長柄山風に云り。なほ天武紀に云。○紀伊兄山。萬葉に。勢能山爾。直向妹之山。事聽屋毛打橋渡。又木路爾有云名二負勢能山。又木川之邊之妹與背山などあり。世に謂妹山南に在り。兄山北に在り。紀川其間に在て。那賀郡に屬せりといへり。按に妹山兄山の所在。古來紛錯其實を詳にせず。ここに本居内遺云。青山村川南に。俗長者屋敷山と稱ふ山あり。蓋これ妹山なり。此山舊恐らくは。青山と稱へしと。據て。蓋迫山と謂ひしならん。此山峰に二相並へる形あり。故に風騷の士。妹妹の義に取て。青山と唱へ。又妹山青山と唱へて。詞章に詠せしならん。中古以來其傳をうしなひて。別に妹山と稱せし者を求めしか故に。俗なほ兄山の事。紀伊國續風土記に見えたり。戰紛々として。遂に妹山の所在を失ひしものならんと云へり。よく考ふへし。

○赤石櫛淵。倭名抄播磨國明石郡これなり。櫛淵詳ならず。○近江狹々波合坂山。近江國滋賀郡なり。山城志云。宇治郡音羽山。在音羽村東逢坂山。接其北。是舊國界也。孝德紀謂北限云々。即是今隸于江

州とあり。○爲畿内國とは。右の區域内を畿内國と定めたるにて。後世に所謂畿内國と云とは。義聊異なり。

凡郡以四十里爲大郡。三十里以下四里以上。爲中郡。三里爲小郡。其郡司並取國造性識清廉堪時務者爲大領少領強幹聰敏工書筆者爲主政主帳。

凡郡以下。郡司を置くの目なり。○四十里。通證に。當二千戶。里狹所也。是里坊之里。非步里と在り。下文。凡五十戶爲里。每里置長一人とある是なり。○爲大郡。これ郡を置く始めなり。さて郡をコホリと訓るは。上にもをりく云るか如く。韓語を取れるなり。さて縣と郡との別は。縣は大にも小にも通し云へる號にて。人戸に定めなきを。郡はこゝに出たるか如く。戸數に據て號けたるにて。縣は其本の義別なり。韻會に説文云。周制。天子地方千里。分爲百縣。縣有四郡。是縣大而郡小也。秦并天下。置三十六郡。以統其縣。漢遂因之。自隋唐以來。廢置不一。宋元設府于州。明制屬州於府。而郡之名遂廢とあるは。郡縣の沿革なり。今代明治の制は。縣大而郡小也とある制度に近し。因に此にじらす。さて舊制を按に。道を以國を統。國に郡を設け。郡に莊鄉村里を置く。これ其概なり。○三十里は。千五百戸に當る。○四里は。二百戸に當る。○三里は。百五十戸に當る。○爲小郡。大寶以後は。大上中



下小の五等に分てり。戸令云。凡郡以二十里以下十六里以上。爲大郡。十二里以上爲上郡。八里以上爲中郡。四里爲下郡。二里以上爲小郡。民部式云。凡郡不得過三千戶。若餘五十戶以上者。分隸比郡。地勢不宜分者。隨狀立別郡。とあり。○郡司。類史延曆十七年三月。詔曰。昔難波朝廷。始置諸郡。仍擇有勞。補於郡領。子孫相襲。永任其官。云々。宜其譜第之選。永從停廢。取藝業著聞。堪理郡者。爲之。とある。これなり。政事要略天長二年の符に。郡領者今之縣令也。親民行化。實在此人。とあり。○大領少領。倭名抄。長官曰大領。加美。次官曰少領。須介。延曆儀式帳に。難波朝廷。天下立評給時。爾以二十鄉分互。度會乃山田原。立屯倉。互。新家連阿久多督領。磯連牟良助督。仕奉支。以二十鄉分互。竹村立屯倉。互。麻績連廣背督領。磯部直夜手助。仕奉支。などあり。なほ職員令に。大領小領又次なる主政主帳の員數をも載せたり。○書筆。令に書計に作る。今筆筆といふ。○主政主帳。和名抄。判官。郡曰主政。萬豆利古止比止。佐官。郡曰主帳。佐官とあり。後には佐官と云へども。こゝにフミロトと云ふは。古き稱なり。さて郡司以下文。此に至るまで。選叙令と同じ。しかして其次文に。其大領外從八位上。少領外從八位下叙之。少領才用同者。先取國造。とありて。其はじめには國造郡領兼帶せしか。後に延曆の詔には。國造郡領。其職各殊。自今以後。不得令國造帶郡任。と云ふ。こゝにもあり。

凡給驛馬傳馬。皆依鈴傳符尅數。

凡給。これ置驛傳の目なり。○皆依云々。皆依本に倒せるを。今令に依て訂せり。天武紀に令を驛鈴。文武紀に飛驛鈴入口傳符十枚。神祇式に。驛使入太神宮界者。到于飯高下樋小河。止鈴聲。などあり。萬葉歌にもあり。さて此文公式令と同じ。其次文に。親王及一位。驛鈴十尅。傳符三十尅。三位以上。驛鈴八尅。傳符二十尅。四位驛鈴六尅。傳符十二尅。五位驛鈴五尅。傳符十尅。八位以上。驛鈴三尅。傳符四尅。初位以下。驛鈴二尅。傳符三尅。とあり。傳符は今俗に先觸と云ふものゝ如し。令開書抄。請進鈴印傳符の下に云。鈴は驛路のすゝなり。君の使に遠く行く時。鈴を賜ひ又官符を給ふ。其鈴にきさみの數あり。其きさみの數に依て。驛路の馬に乗りて。鈴を振て遠路を經る也。傳の符と云は。傳馬を云なり。是符にもきさみの數ありて。其數に依りて傳馬にのる。驛馬は善馬。傳馬は次の馬なり。是等の官符鈴印などは。少納言奉行するなり。賜ふ時も又返奉る時も。依て請進とはいへり。又進付飛驛函鈴の下に。飛驛と云ふは。國に急事の有時に。早馬をたつる事あるを云ふ也。さて飛驛とは云へり。其時も文宮に鈴を入れて給ふ也。木契と云て。木にきさみをして。其きさみの數驛路の馬に乗る也。其書函に木契鈴などを入る也とあり。栗田寛云。按に入驛鈴木契於文宮とあるは誤なり。勅符を文宮に納れて封印し。驛鈴傳符を管に副て給ふなり。飛驛函。長一尺一寸六分。廣三寸。深二寸三分。木工式に見えたり。木契は軍事に用る符符なりと云り。開書抄の說には誤あるへし。さて鈴尅は。驛路鈴に數尅あり。乘驛官使往來に。其尅數に従て驛馬を出すなり。假如は驛鈴十尅なれば。驛馬十疋。八尅なれば八疋。六尅なれば六疋。五尅なれば五疋。以下みな同じ。是は急使なり。一日十疋以上或は八疋。驛鈴は六疋以下四疋以上なり。傳符も亦符に尅數あり。其數に従ひて傳馬を出すなり。傳符三十尅は。傳馬三十疋。二十尅は二十疋。十二尅は十二疋。以下同じ。これ總使なり。經過の里數には定まりなし。右公式令及集解。令開書。延喜太政官式等に據るなり。



凡諸國及關給鈴契並長官執無次官執其二曰初造戶籍計帳班田收授之法

凡諸國。これ給鈴契の目なり。三代實錄云。賈勅符木契。警固諸關。公式令曰。凡諸國給鈴契者。大宰府二十口。三關及陸奥國各四口。大上國三口。中下國二口。其三關國各給三關契二枚。とあり。○並長官執。義解謂。有鈴與契。是以稱並。とあり。○初造戶籍。戶籍は允恭天皇の御世に始りつれど。ことに初とあるは。其造りさまを改めしを云なるへし。戶令云。凡戶籍六年一造。起十一月上旬。依式勘造。里別爲卷。總寫三通。其縫皆注其國其郡其里其年籍。五月三十日內訖。二通申送太政官。一通留國。其雜戶陵戶籍。即更寫。各送本司。とあり。○計帳。又云。凡造計帳。毎年六月晦日以前。京國官司。責所部手實。具注家年紀。八月二十日以前。申送太政官。義解謂。手實者戶頭所造計帳とあり。賦役令にも見えたり。唐書食貨志に。有計帳。具來歲保役。以報度支。とあり。計帳をカスノフムと訓るは。數籍の義をしつくるをば帳と名く。其中計帳はあり。其計帳にわさがきを重々しておちあがりす。なり。然るを應倍七に所務につけて。物に。課法の大切なれば。横碑をまたかけられたると云へるは。本義にはあらざるへし。○班田收授之法。田令に。凡給二分田者。男二段。女減三分之一。五年以下不給。又云。凡田六年一班。若以身死。應退田者。每至三年。即從收授。義解謂。此據下未給二分一人也。其先已給訖者。不可更收授也。若田有崩埋侵食。亦依改班例。又云。應班田者。每三年。正月三十日內。申太政官。起十月一日。京國官司。預校勘造簿。

至十一月一日。總集應受之人。對共給授。二月三十日內使訖。とあり。○收授は。死亡の人の田を收め。又班つへき人に授くるを云ふ。

凡五十戶爲里。每里置長一人。掌按檢戶口。課殖農桑。禁察非違。催驅賦役。若山谷阻險。地遠人稀之處。隨便量置。

凡五十戶云々。通證云。今按是漢制也。晁錯五家爲伍。伍有長。十長一里。里有假士。唐令曰。諸戶以百戶爲里。五里爲鄉。此紀不言鄉。故鄉里相通稱之。其訓亦同。戶令所謂失鄉狹鄉。倭名鈔及出雲風土記所稱鄉名是也。義解曰。若滿六十戶者。割十戶立一里。置長一人。其不滿二十家者。隸入大村。不須別置也。倭名鈔風土記等所謂餘戶即此。とあり。餘戶は。倭名鈔郷名に。餘戶また餘部とあり。九十七郷たり。○催驅賦役。通證云。萬葉集。楚取五十戶良我許惠波。此言催驅賦役也。凡五十戶以下至此。與戶令全同。賦役令義解謂。賦者歛也。調庸及義倉。諸國貢獻等爲賦也。役者使也。歲役雜徭等爲役也。とあり。○若山谷阻險。本に下文に入れるを。此に載せたるは。集解曰。若以下十五字。原在二下文十二束之下。據戶令改。とあるに依れるなり。戶令に凡戶以五十戶爲里云々。催驅賦役。若山谷阻險云々とありて。此文と同じ。○隨便量置。義解に謂。若滿二十戶者。依上法立別。里若不滿者。令下伍保相寄附於大村とあり。



凡田長三十步。廣十二步爲段。十段爲町。段租稻二束二把町租稻二十二束。

田長。雜令。凡度地五尺爲步。三百步爲里。拾芥抄に。以方六尺爲一步。三十六步爲一段。三百六十步爲一段積云々。按に此に所謂歩は。高麗尺の方五尺を以云なり。租税法沿革編云。田令集解政事要略等の書に據に。上古田制高麗尺。高麗尺は今の大尺にして。即唐大尺の一方六尺。曲尺の方七尺零。を一步とし。五歩を一代となし。五代二十五歩の地は。大寶和銅三十六歩の地と同じ。五十代二百五十歩の地は。一段三百六十歩の地と同じ。五百代二千五百歩の地は。一町三千六百歩の地と同じ。大化に至りて。改て從前の高麗尺六尺を。一步の制と爲し。同尺方五尺を一步となす。令大尺方五尺。和銅大尺方六尺。風にあ。田長三十歩。廣十二歩。即三百六十歩を以一段となす。十段三千六百歩を以て一町となす。一段は從前五十代地に同じく。一町は從前五百代の地に同じ。唯一歩の積を異にするのみ。その沿革の如きは。右の沿革編。並に小中村清矩の食貨志略等に委し。さて歩の訓は踏なり。また中臣本にはアシと訓り。足なり。これも古言なるへし。○段は。即三百六十歩なり。大寶令の一段と同じ。○町は。方六十歩にて。即三千六百歩なり。令の一町と同じ。通證に。未知間道也。區訓爲町。町亦同。字彙町田區。畔埒とあり。また古訓に町をトコロとも訓り。古歌に千町田とよみ。拾芥抄に一町積三千六百歩なり。

とあり。○租稻二束二把。說文云。租田賦也。又云。束縛也。拾芥抄云。六銖爲一分。四分爲一兩。十二兩爲一屯。十六兩爲一斤。三斤爲一大斤。大一斤爲一稻一束。一束一斗米春五升。十撮爲勺。十勺爲合。十合爲升。十升爲斗。十斗爲石。十釐爲豪。十豪爲分。十分爲把。十把爲束とあり。度量衡沿革編に云。の稻を一把とし。十把を以一束とす。一把の十分を一分とし。一分の十分を一分とす。體米を量るに斗を用ふる。其斗に沿革ありて。大升減大升の類。容量一ならずといへども。皆十撮を勺とし。十勺を合とし。十合を升とし。十升を斗とし。十斗を斛とし。一斛以上十百千萬を以數ふる。さて束の訓。又ツカ子ともあり。又把の訓。タハ子とも訓り。天武紀に麻一條云々。常語に一把とあり。○二十二束。凡田以下此まで。田令と全同し。義解謂。段地種稻五十束。束稻春得三米五升。即於町者。須得五百束。通證に。伊藤氏曰。方一町所出春米二十五斛。而公稅收二十二束。則是一斛一斗也。殆近於二十而取一とあり。○本に。若山谷阻險云々の十五字あり。今戶令に據て上に移せり。

其四曰。罷舊賦役。而行田之調。

舊賦役。令義解賦役。謂賦者歛也。調庸及義倉。諸國貢獻等物等爲賦也。役者使也。歲役雜徭等爲役也。とあり。さて舊賦役の制詳に知へからず。雖。崇神天皇以後の紀に往々散見せり。其大意を按するに。舊はみな民より。土宜の物を定めて買れるを。受給ひしにて。上より其員數等を。諸國均一に定置給へる制など。きはやかに有しにはあるへからず。故今其慣習を罷め。隋唐の法に倣ひて。制を定め。



同一に貢らしめ給ひしなるへし○田之調とは。田あるものは。尋常租稻の外に。別に土宜に随ひて。布帛を輸さしめ給ひしなり。

凡絹繩絲繇。並隨郷土所出。田一町絹一丈。四町成疋。長四丈廣二尺。半繩二丈。二町成疋。長廣同絹。布四丈。長廣同絹繩。一町成端。絲綿。別收戸別之調。一戸費布一丈二尺。

絹繩云々。賦役令に。凡調絹繩絲繇布。並隨郷土所出。義解謂。細爲絹。麤爲繩。とあり。縣下布字あり。以下二句令と同じ○四町成疋。是は綾錦の疋をも兼たり。通證云。爾雅倍兩謂之疋。杜預曰。二丈爲端。二端爲兩。所謂匹也とあり。集解。按孝德天皇二年。定匹端制。與杜預二端爲匹之說異矣。今制則亦與杜說同。不知何時而然耶と云り。絹繩の沿革は。拾芥鈔。和銅七年官符云。絹繩六丈爲疋とあり。さて疋の訓は。雄略紀に馬之八匹をヤツキと云る如く。ヒキと訓へし。古訓にムラと訓る。さては端の訓と同じくて。別なきか如し。壬生忠見集。いろくのみちの錦きり立てのこれるはては幾匹と見む。○長四丈廣二尺半。半の訓は五寸なり。賦役令に。正丁一人。絹繩八尺五寸。六丁成疋。長五丈一尺。廣二尺二寸とあり。○繩二丈二町成疋。養老三年五月辛亥。制。定諸國貢調。短繩麤狹。絹。美濃狹繩之法。各長六丈濶九寸。天平元年三月癸丑。太政官奏曰。令諸國停。四丈廣繩。皆成六尺狹繩。など見えたり。○布四

丈長廣。本に廣字脱せり。令類史及集解に據て補○端の訓。未詳。上の疋をも。古訓にムラとあり。通證云。小爾雅丈謂之端。通典准武德制曰。其絹繩爲匹。布爲端。此紀蓋據此。令式等亦同。今俗布帛通曰端。曰疋。此古制也。今法曲尺三丈四尺爲端。二端爲疋。曲尺唐尺也。令曰。布二丈六尺。二丁成端。端長五丈二尺。廣二尺四寸。其望陀布四丁成端。長五丈二尺。廣二尺八寸。拾芥鈔和銅七年官符。絹繩六丈爲疋。調布四丈二尺爲端。庸布二丈八尺爲端。商布二丈五尺爲端とあり○注絲綿絢屯諸處不見の八字。集解に私記摺入として削れり。通證云。絢訓目。屯。天武紀阿世。今云本にミセセ。あるは誤なり。倭名抄。俗一屯讀飛度毛知とあり。賦役令に。絲八兩。綿一斤。布二丈六尺。並二丁成絢屯端。義解謂。絲十六兩曰絢。綿二斤曰屯。通證。今按屯。或作純。戰國策注。純音屯。屯束也。集解云。按此不載絲綿絢屯之制。蓋脱文也と云り。倭名抄。唐令云。綿六兩爲屯。是唐賦役令文。與大寶令文不同。箋注曰。屯訓。毛知。蓋屯。聚者。如。麤之爲。餅也とあり。○別收戸別之調。通證に。文武紀大寶三年。准令京及畿内。人身輪調。宜罷人身之布。輪戸別之調。乃異外邦之民。以優内國之口。賦役令無此條。晉書食貨志。制戸調之式。丁男之戸。歲輸絹三匹。綿三斤。女及次丁男爲戸者半輸とあり。按に人身輪調は。次文に凡兵者人身輪。刀甲弓矢幡鼓。また續紀天平寶字三年九月。敕宜免今年所負人身舉稅などあり。人毎にの意なり○費布一丈二尺。本費を皆に作るは誤。今通證集解等に據て改。倭名抄布帛部費布。唐韻曰。幣。音與。布名也。唐式云。費布。揚氏漢語抄云。佐與美乃沼能。今案費布宜作帶布乎。箋注云。按說文。綸字注曰。費布也。無帶字。則知古用費字。帶是俗字。唐式布。六典及皇國古書。皆用費布字。古字偶存者。源君以爲宜。作帶者。非是。按東鑑建久四年五月。有作與美水干。新井氏曰。狹讀也。讀猶八十。升之升。依讀謂。經數少也。谷川氏曰。今俗讀。絲有幾讀之名。政事要略。作。美之布。今俗亦同。即佐與美之稱也。又按念就篇。服環類帶與。續述。注綸帶。綿布之尤精者。言雖曰。布類。其實精好。與。續相連次也。依之以佐與美。充之。恐不允。



云り。按に狹讀は危布アラスの反にて。細布の稱なり。齋宮式に細布をよめり。布の宜しきを云。國史天皇凶服部に。桓武天皇二十五年。上着レ服。服用ニ遠江貨布トとあり。また綵布貨布並稱することあり。貨布袴。古事談にも見えたり。今世麻の最危き布を佐伊美と云は。轉訛なるへし。されは通證に引る。新井氏の謂ニ經絲少也と云はれたるは非なり。

凡調副物鹽贄亦隨郷土所出。

調副物云々。調庸の外に副へて貢れる物なり。賦役令云。其調副物。義解謂。此唯爲正丁。不レ及ニ次丁中男也。正丁一人。紫三兩。紅三兩。茜二斤。黃連二斤。東木綿十二兩。安藝木綿四兩。麻二斤。熱麻十兩十六銖。桑十二兩。黃蘗七斤。黑葛六斤。木賊六兩。胡麻油七勺。麻子油七勺。荏油一合。曼椒油一合。猪脂三合。腦ナツキ一合五勺。漆三勺。金漆三勺。鹽一升。雞脂二升。堅魚煎汁一合五勺。山薑一升。青土一合五勺。橡八升。紙六張。長二尺廣一尺。篋柳ハコヤナキ一把。七丁席一張。苦一張。鹿角一頭。鳥羽一隻。砥一顆。二丁簀一張。三丁薦一張。十四丁樽一枚。受三斗。二十一丁樽一枚。受四斗。三十五丁樽一枚。受五斗。とあり。此なる鹽贄は。右の副物の外なる。郷土所出物雜物の中に出せり。贄は魚類なり。賦役令に詳なり。

凡官馬者。中馬每二百戶輪一疋。若細馬。每二百戶輪一疋。其買馬直者。一戸布一丈二尺。

官馬者。本に馬を長に誤。今改む。○細馬。廐牧令云。凡廐細馬一疋。中馬二疋。騶馬三疋。義解謂。細馬者上馬とあり。天武紀に乗馬之外更設細馬。○一戸布一丈二尺。賦役令廐牧令に此條なし。

凡兵者。人身輪刀甲弓矢幡鼓。

按に軍防令に此條なし。同令云。凡國司每年孟冬簡閱戎具。義解謂。戎具者。國內百姓隨身弓箭刀等之類也。又云。鼓者皮鼓也。所以靜喧也。幡者旌旗惣名也。兵士所載曰軍幡とあり。

凡仕丁者。改舊每三十戶一人。而每五十戶一人。以充。諸司以五十戶充仕丁一人之糧。一戸庸布一丈二尺。庸米五斗。

廁。秘閣本及令に厩に作る。下同。考本厩に作る。厩は厠と同じ。史正義に。厠音斯。謂炊烹供雜役とあり。○每五十戶一人。賦役令云。凡仕丁者。每五十戶二人。以一人充。斷丁。義解謂。斷丁使也。言給使於汲炊。即與火頭同也。とあり。按に令に二人とあるを。此に一人に作るは。合はざるに似たれと然らず。此に一人とあるは仕丁を謂ふなり。注に以一人宛厠の一人は。從丁を云なり。仕丁の員内に在らず。令に所謂二人は。仕丁一人從丁一人を合せて謂なり。本より此紀とは旨趣自ら別なり。混すへからず。然るを集解に一人を二人の誤りとしたるは非なり。又記傳に。一人の上。恐らくは十人の二字を脱しつものならん



と云はれたるは。甚しき非なり。續紀天平十七年十一月。令諸國停止仕丁之厮（此の御世頃にか詳ならねど。史には漏たるなるへし。）とある。これ又從丁を廢せるなり。仕丁の員を減せしには非ざるを以て知るべし。さて又翌十八年五月。令諸國依舊進仕丁之厮（采女採薪守命不レ及此數。）とありて。本の如くなれり。さて又民部式に。凡點仕丁者。每五十戶二人。點厮丁（いつの御世頃にか詳ならねど。史には漏たるなるへし。）とあるは。按に右の天平より後に。また制度を改めて。再ひ從丁の厮を停止して。仕丁の員を一人増加し。二人と爲したるなるへし。さて延喜の頃まで。其までにて有しを。此式には載たるものとおもはれたり。されは同じ二人とあれど。賦役令に每五十戶二人。以一人充厮丁とあるは。異なるものとすへし。かくのこく見されは。何とも解しかたきをよく思ふへし。さて從丁のことは。次なる采女條下にも見えたり。○以充諸司。これらの事は民部式に委しく見えたり。○庸布一丈二尺。又云。凡正丁歲役十日。若須收庸者。布二丈六尺。一日二尺六寸。中男及京畿内不レ在レ收庸。是は十日の役に一日不足あれば。布二尺六寸の價を。何品にまれ其郷土の産物にて納よとなり。○庸米五斗。上の庸布に同じ。賦役令に。主計計庸多少。充衛士仕丁采女等食とあり。主計式に。凡諸國輸庸一町米三斗とあり。續紀神龜五年四月。太政官奏曰。美作國言。部内大庭真島二郡。一年之内所レ輸。庸米八百六十餘斛。山川峻遠。運輸大難。人馬並疲。損費極多。望請輸米之重。換綿鐵之輕。云々。奏可之。など云事も見えたり。さて斗の訓ハコは宮なり。

凡采女者。貢郡少領以上姉妹。及子女形容端正者。以一百戶。充采女一人之糧。庸布庸米。皆准仕丁。

采女者貢云々。後宮職員令云。其貢采女者。郡少領以上姉妹。及女形容端正者。皆申中務省。奏聞とあり。此と同じ。なほ采女の事は。續紀後紀類史につきくみえたり。○注從丁一人。采女司式に。凡采女。各充樵丁一人。守廬丁一人とあり。民部式なる采女採薪守舎とあるも是なり。○注從女二人は。賦役令に所謂女丁（これなり。）一人之糧。本に之字脱せり。今類史に據て補。

是月。天皇御子代離宮。遣使者。詔郡國脩營兵庫。蝦蟇親附。或本云。壞難波狹屋部。邑子代屯倉而起行宮。

子代離宮は。下文の注に見ゆ。○兵庫。郡國に兵庫のありしこと。續紀續後紀文德實錄。二代實錄等に見えたり。○蝦蟇親附。栗田寬云。按上文に。於開曠之所。起造兵庫。收聚國郡刀甲弓矢。邊國近與蝦蟇。接境處者。可盡數集其兵。而猶假授本主。また遣使者治兵。此に至てまた遣使者。詔郡國。脩營兵庫とありて。さて蝦蟇親附と云る。武器は民を威して治むる所以のものなるを見まして。最治兵の道を重みし給ひしかは。果して其効見えて。招かざるに蝦蟇の親附せるなりと云り。まことにさる



ことなり○注難波狹屋部邑は。倭名抄攝津國西成郡讚陽。姓氏錄攝津神別に佐夜部首あり。續後紀にも此氏人見ゆ。  
攝津志。西成郡郷名讚陽。或陽當作塲。方廢。而三番村存。とあるは。うたがはしき説なり○子代屯倉は。御子代の部曲の。自ら地名となりしなるへし○壞は。從來の屯倉の家宅を取除くなり。

# 日本書紀通釋卷之五十八

飯田武郷謹撰

孝德天皇  
大化二年  
二月

二月甲午朔戊申。天皇幸宮東門。使蘇我右大臣詔曰。明神御宇日  
本倭根子天皇。詔於集侍卿等。臣連國造伴造。及諸百姓。朕聞明哲之  
御民者。懸鍾於門。而觀百姓之憂。作屋於衢。而聽路行之謗。雖芻蕘  
之說。親問爲師。由是朕前下詔曰。古之治天下。朝有進善之旌。誹謗  
之木。所以通治道。而來諫者也。皆所以廣詢于下也。管子曰。黃帝  
立明堂之議者。上觀於賢也。堯有衢室之問者。下聽於民也。舜有告  
善之旌。而主不蔽也。禹立建鼓於朝。而備訊望也。湯有總術之廷。以  
觀民非也。武王有靈臺之囿。而賢者進也。此故聖帝明王。所以有而勿  
失。得而勿亡也。所以懸鍾設匱。拜収表人。使憂諫人納表于匱。詔



収表人。毎旦奏請。朕得奏請。仍又示群卿。便使勘當。庶無留滯。如群卿等。或懈怠不勤。或阿黨比周。朕復不肯聽諫。憂訴之人。常可撞鍾。詔已如此。既而有民。明直心懷。國土之風。切諫陳疏。納於設置。故今顯示。集在黎民。其表稱緣奉國政。到於京民。官官留使於雜役云々。朕猶以之傷惻。民豈復思至此。然遷都未久。還似于賓。由是不得不使。而強役之。每念於斯。未嘗安寢。朕觀此表。嘉歎難休。故隨所諫之言。罷處々之雜役。昔詔曰。諫者題名。而不隨詔命者。自非求利。而將助國。不言題不諫。朕廢忘。又詔。集在國民。所訴多在。今將解理。諦聽所宣。其欲決疑。入京朝集者。且莫退散。聚侍於朝。高麗百濟任那新羅。並遣使貢獻調賦。

戊申。十五日なり。○宮東門。即子代離宮なり。此月二十二日還幸あり。○御宇日本倭根子天皇。日本は音讀の國號。倭根子は天皇の美號。既に云り。公式令詔書式に。明神御宇日本詔旨。義解謂。以大事

宣於蕃國使之辭也。とあるは。倭根子の美號を省けるなり。これ蕃國に示し給はむかために。倭根子の美號を省きて。宣ふ書式と定め給ふなり。然るに類史には。此の文に倭なきを以。或説に當削去と云へるは非なり。また集解に。日本二字傍訓攙入として削れるは。殊に私なり。さて又日本倭根子と續けて訓むも非なり。御宇日本と上へかへりて訓むへし。大化元年七月。其は靈異記に。諸樂宮御宇大八洲國之帝姬。阿倍天皇。また奈良宮御宇大八島。白壁天皇。また長岡御宇大八島。山部天皇などあるを見るへし。この例なほ他にもあり。○集侍。延喜式祝詞に多く此字を用たり。言義既に云り。或訓に宇古末波利ともよめりと通證に云へり。それも同じことなり。○懸鍾於門。兼永本中臣本類史等に。門を闕に作れり。上文に見えたり。○作屋於衢。下文に衢堂の間とあるこれなり。○雖芻蕘。本に雖を離に誤れり。今秘閣本中臣本考本に據て改訂せり。○古之治天下以下。來諫者也に至るまで。前漢文帝紀の文なり。○進善之旌。通證云。應劭曰。旌。旂也。堯設之五達之道。令民進善也。如淳曰。欲有進者。立於旌下。言之。○誹謗之木。又云。應劭曰。橋梁邊板。所以書政治之愆失也。古今註曰。堯設誹謗之木。今之華表也。以橫木交柱頭。狀如華形。如桔槔。大路交衢悉施焉。淮南子曰。堯置敢諫之鼓。舜立誹謗之木。とあり。○明堂。管子に明臺に作れり。鄭玄曰。明堂者明政教之堂。とあり。○不蔽。本に蔽を弊に作る。今集解に依て改む。管子既。○建鼓。管子に諫鼓に作る。魏志に建鼓とあり。淮南子精神訓曰。夫以天下爲者。學之建鼓矣。注鼓樂之大者。とあり。○訊望。管子訊咳に作る。魏志には訴訟に作れり



○總術之廷。通證云。術音遂。萬二千五百家曰遂。管子度地篇。里十爲術。管子作總術。とあり。廷。中臣本庭に作る。管子同じ○民非。管子に人誹に作り○靈臺之圃。毛詩大雅。文王經始靈臺。疏。所以觀三察。祿氣之妖祥也。とあり。圃。管子復に作る。注白也。とあり○勿亡也。亡。管子忘に作る。以上管子の文をこれり○拜收表人。拜は拜任なり。收表は民の表を收るなり○仍又。秘閣本中臣本及類史等。又字なし○不勲。類史に勲を勤に作る○不肯聽諫。本の訓は非なり。集解の訓に従ふべし○懷國土之風。通證に土當レ作レ士とあり。集解には改めたり。文選。司馬遷報任少卿書曰。以狗國家之急。其素所蓄積也。僕以爲有國士之風。善曰。一國之中推而爲士。とあるなどに據るに。さもあるへし○切諫陳疏は。切に諫る陳し疏と訓へし○到於京民は。國役の爲に京に赴ける民なり○官官。中臣本兼永本及類史に。一の官字なし○民豈復は。民亦豈の意に見へし○似于賓。賓は賓旅の義なり。他國より來れる人を云なり。都を他國に遷せるか故なり○自非求利は。通證云。言自嫌於利心。故不題名也。と云へり○將助國。上文に懷國土之風とあるこれなり○不言題不。本の讀は非なり。題不は題の有無を云なり○諫朕廢忘。本に忘を忌に誤る。今訂せり。これも本の訓は非なり。朕カ廢忘ヲ諫メヨと讀て。將來の事を宣へると見るへし○朝集者。考課令に。凡大貳以下及國司。毎年分番朝集。義解謂目以上。とあるこれなり○聚侍。薩摩本侍を待と作り。

乙卯。天皇還自子代。離宮。三月癸亥朔甲子。詔東國々司等曰。集侍群卿大夫。及臣連國造伴造。并諸百姓等。咸可聽之。夫君於天地之間。而宰萬民者。不可獨制。要須臣翼。由是代々之我皇祖等。共卿祖考俱治。朕復思欲蒙神護。力共卿等治。故前以良家大夫。使治東方八道。既而國司之任。六人奉法。二人違令。毀譽各聞。朕便美厥奉法。疾斯違令。凡將治者。若君如臣。先當正己。而後正他。如不自正。何能正人。是以不自正者。不擇君臣。乃可受殃。豈不慎矣。汝率而正。孰敢不正。今隨前勅。而處斷之。

乙卯。二十二日なり○甲子。二日なり○集侍以下。處斷之までは。古代宣命文體なるを。漢文に譯したるなり。其次なる辛巳の條なるも同じ○卿祖考。卿の下恐くは等字脱するか○前以。中臣本以を差に作る○東方八道は。東方八國と云ふか如し。道は道路の道にあらず。記景行段に。東方十二道と云へる道と同じ。このことは景行紀に委く云おけり。集解に。按景行天皇五十五年紀曰。東山道十五國。蓋此時既并爲八國。即與今同。と云れたるはたかへり。この事も既に云へり○六人奉法二人違令。六人は下文に所謂。鹽屋連



鮒魚。神社福草。朝倉君。梶子連。三河大伴直。蘆尾直等六人なり。二人は詳ならず。

辛巳。詔東國朝集使等曰。集侍群卿大夫。及國造伴造。并諸百姓等。咸可聽之。以去年八月。朕親誨曰。莫因官勢。取公私物。可喫部內之食。可騎部內之馬。若違所誨。次官以上。降其爵位。主典以下。決其笞。杖入己物者。倍而徵之。詔既若斯。今問朝集使及諸國造等。國司至任。奉所誨不。於是朝集使等。具陳其狀。穗積臣昨所犯者。於百姓中。每戶求索。仍悔還物。而不盡與。其介富制臣。巨勢臣紫檀。二人之過者。不正其上。云云。凡以下官人。咸有過也。其巨勢德禰臣所犯者。於百姓中。每戶求索。仍悔還物。而不盡與。復取田部之馬。其介朴井連。押坂連。二人者。不正其上。所失。而翻共求己利。復取國造之馬。臺直須彌。初雖諫上。而遂俱濁。凡以下官人。咸有過也。其紀麻利者。拖臣所犯者。使人於朝倉君。井上君。二人之所。而為牽來其馬。視之。復

使朝倉君作刀。復得朝倉君之弓布。復以國造所送兵代之物。不明還主。妄傳國造。復於所任之國。被他偷刀。復於倭國。被他偷刀。是其紀臣。其介三輪君大口。河邊臣百依等過也。其以下官人。河邊臣磯泊。丹比深目。百舌鳥。長兄。葛城。福草。難波。癩龜。犬養五十君。伊岐。史麻呂。丹比犬眼。凡是八人等。咸有過也。

辛巳。十九日なり。○朝集使等。通證云。唐制。諸州奉貢物。入京者。謂之朝集使。見貞觀政要注。云云。へり。○笞杖。本に宮に誤れり。今改む。通證云。笞訓。保會伎須和惠。杖訓。布登伎須和惠。延喜大嘗式。推枝。古語所謂志比乃和惠。倭名抄調度部刑罰具。笞。唐令云。笞音知。之毛度。大頭二分。小頭一分半。杖。唐令云。諸杖音仗。都惠。皆削去節目。長三尺五寸許。箋注云。之毛止見拾遺集。孝德紀笞訓。保會幾須波衣。新撰字鏡。械訓。志毛止。又字豆木。之毛度。髮也。髮訓。之毛度。見木具。岡部氏曰。之毛度。茂本也。以。髮為笞。故名。髮訓。須波衣。亦楚也。須直生枝之急呼也。笞。須波衣の假字。と爲。たるは誤なり。次に云。唐斷獄律疏議云。依令。笞杖大頭二分。小頭一分五釐。此所引即是笞下恐脫。杖字。按本朝獄令云。笞杖大頭三分。小頭二分。是遵。用唐令。少革其制者。此所引唐令。蓋獄官令文。獄官令在唐令第二十四。見唐六典。按說文。笞。擊也。



轉下所以擊之物。謂之笞。此方語に。擊ものを鞭と云るも。此によく合へり。又云。孝德紀。杖訓。不止幾須波衣。天武紀訓。不止川惠。唐斷獄律疏議云。依令。杖皆削去節目。長三尺五寸。訊囚杖。大頭徑三分二釐。小頭二分二釐。常行杖。大頭徑二分七釐。小頭一分七釐。此所引即是。唐六典注。新舊唐書刑法志。皆與律疏議所引令文同。則許字當作訊屬。下句。源君所引誤。且失句讀。按本朝獄令云。凡杖削去節目。長三尺五寸。訊囚及常行杖。大頭徑四分。小頭三分。此所引唐令。亦獄官令文。又按唐令每條曰。諸本朝令皆改曰。凡。故此引唐令云。諸杖。本朝令云。凡杖。律疏節之。刻板本。諸杖二字連讀者非是。說文。杖持也。段玉裁曰。凡可持及人持皆曰杖。喪杖。兵杖。齒杖。皆是也。とあり。笞杖の解は明らかなれど。此紀の笞杖の訓を。須波衣と改めたるは。上に云へるか如く非なり。大嘗式に志比乃和惠とあるにて慥なり。さて須和惠の言義は。重胤が末弱ならんと云説など叶ふへし。楯の末の撓ひ弱き意なるへし。○穗積臣昨は。東國の守なり。昨は名なり。○每戸求索。下に因官勢。取公私物とあるこれなり。○其介。介は一人なるへければ。こゝは二國の介を云ふなるか。○富制臣。姓氏錄左京皇別。布勢朝臣。阿部朝臣同祖とあり。字は富制とも。持統紀に。布勢朝臣御主人。氏上と爲れること見えたり。御主人後阿部朝臣とも稱せり。續紀には阿部布勢臣とも謂り。○巨勢臣紫檀。天武紀十四年に。巨勢朝臣辛檀努とあり。續紀には志丹とあり。○不正其上。上は長官を云なり。○德禰臣は。集解に按德陀古之親族なりと云り。○田部之馬。田部は安閑紀に見えたり。馬は田部の人の飼へる馬なり。○押坂連は。皇極紀三年押坂直の下に注せり。○臺直。

姓氏錄攝津國諸蕃。臺直。臺忌寸同祖。漢釋吉王之後也。臺忌寸。河内忌寸同祖。一本漢孝獻帝男。白龍王之後也とあり。氏人は。持統紀に臺忌寸八島あり。また岡本清江二氏あり。共に臺忌寸より出。元正紀に。從五位上臺忌寸少麻呂言。因地理命。氏。古今通法。故河内忌寸。因邑爲氏。其類不一。請少麻呂與諸子弟。改賜岡本。許之。仁明紀に。右京人右衛門少志臺忌寸善氏。改賜清江宿禰とあり。醍醐帝時。右大臣藤原忠平知家事臺基具と云人。東寺文書にみゆ。○紀麻利者拖臣。本に者者を誤。さて紀は氏。麻利者拖は名なり。地名を取れるなるへし。○朝倉君。本系詳ならず。聖武紀天平九年二月。朝倉君時授。外五位下とあり。萬葉二十に。上野防人朝倉益人みゆ。また桓武紀延曆六年十二月。朝倉公家長。以進軍糧於陸奥國。授外從五位下とあり。○井上君。世系未詳。續紀天平十五年五月。外從五位下井上忌寸麻呂。神護景雲二年十月。外從五位下井上忌寸蜂麻呂。延曆四年七月。外從五位下井上牛養。また三代實錄。元慶三年十二月。井上伊美吉直繼。同真雄あり。これら同族なるへけれど。共に詳ならず。○弓布は。弓と布となり。○兵代之物は。兵器の類なり。記に百取机代之物。延喜式に倉代物などあるに同じ。○安傳國造は。人あり國造に物を還す。然るに取傳ふる人。明らかに其主にかへさす。これ國守は物を取らすと云へとも。本主既に其物を失へるなり。○被他偷刀。下文に據に官刀なるへし。○丹比深目。丹比は氏。深目は名なり。次に犬眼と云名の人もあり。姓氏錄右京神別。丹比宿禰。火明命三世孫。天忍男命後也。男武額赤命。七世孫御殿宿禰。男色鳴。大鷦鷯天皇御世。皇子端齒別尊。誕生淡路宮之時。淡路瑞井水。奉灌御湯。于時虎杖花。飛入御湯。







湯部之馬。其介膳部臣百依所犯者。草代之物。收置於家。復取國造之馬。而換他馬來。河邊臣磐管。湯麻呂兄弟二人。亦有過也。大市連名所犯者。違於前詔。前詔曰。國司等莫於任所。自斷民之所訴。輒違斯詔。自判菟礪人之所訴。及中臣德奴事。中臣德亦是同罪也。涯田臣名。之過者。在於倭國。被偷官刀。是不謹也。小綠臣。丹波臣。並闕。是拙而無犯。忌部木葉。中臣連正月。二人亦有過也。羽田臣。田口臣。闕。二人並無過也。平群臣。闕。所犯者。三國人所訴有而未問。以此觀之。紀麻利耆拖臣。巨勢德禰臣。穗積昨臣。汝等二人所怠拙也。念斯違詔。豈不勞情。夫為君臣以牧民者。自率而正。孰敢不直。若君或臣不正心者。當受其罪。追悔何及。是以凡諸國司。隨過輕重。考而罰之。又諸國造違詔。送財於己國司。遂俱求利。恒懷穢惡。不可不治。念雖若是。始處新宮。將幣諸神。屬乎今歲。又於農月。不合使民。緣造新宮。固不

獲已深感。二途大赦天下。自今以後。國司郡司勉之勗之。勿為放逸。宜遣使者。諸國流人。及獄中囚。一皆放捨。

和德史。本に和字なし。集解に補へるに據る。續紀神龜二年六月。和德史龍麻呂等。改賜姓大縣史。姓氏錄右京諸蕃。大縣史。百濟人和德之後也。と云り。今其說に據て補へり。除目大成鈔に。高倉帝時。上野掾大縣宿禰安永あり。其後なるへし。さて此に欠名とあるへし。○所患は。病なるへし。○言於國造使送官物。本に言字脱せり。今中臣本信友校本に據て補ふ。さて此の文は。和德史か病を患ひて。人事を知らずなど有る時に。阿曇連か國造に命じて。連は守なれば。和德史か物を官に送らしめたるなり。これと國造に言れ和德史か所有の物を取れるなり。○取湯部之馬は。湯部の人の所飼馬を取れるなり。これも國造に言ひて。出さしめたるなるへし。○草代之物は。厩牧令に。凡馬戸分番上下。其調草。正丁二百圍。次丁一百圍。中男五十五圍とある。これ草代之物にて。即調に出せる草なるへし。○大市連。用明紀二年に出。○菟礪人。倭名抄駿河國有度郡あり。○涯田臣。姓氏錄右京皇別。岸田朝臣。武内宿禰五世孫。稻目宿禰後也。男小祚臣孫。耳高。家居岸田村。因負岸田臣號。日本紀合。天武紀十三年十一月。岸田臣賜姓曰朝臣。文德實錄に。攝津人從八位下岸田朝臣全繼とあり。さて岸田村。記傳云。今山邊郡に此名の村あり。○小綠臣。未詳。○丹波臣。詳ならず。續紀延曆二年三月。丹後國丹波郡人。正六位上丹波直真養。為國造。



四年正月。丹波國天田郡大領。外從六位下丹波直廣麻呂云々。授外從五位下。續後紀承和四年九月條。丹波直廣主あり。三代實錄貞觀八年閏三月條。同六年四月條にも丹波直あり。又東寺文書。除目大成鈔。朝野群載等に同氏人あり。國造本紀に。丹波國造。志賀高穴穗朝御世。尾張連同祖。建稻種命四世孫。大倉岐命。定賜國造。とある。即此氏なり。此なる丹波臣と異詳ならず。○注並關名の三字。本に次なる無犯の下にあるは誤なり。今京極本及集解に據て此に入る。○羽田臣。推古紀三年に波多臣に作る。○田口臣。同紀元年に蘇我田口臣あり。○注關名二字。本に次の過也の下に在は誤なり。今京極本及集解に據て此に入る。○三國人。式越前國坂井郡三國神社あり。されどこの三國は東國にあるへし。○今上野の堺。三國時あり。考ふへし。○穗積昨臣。上文には穗積臣昨とあり。○三人所忌拙也。右の三人は國守にて。上に見えたるか如く。其他にも上に阿曇連。大市連。涯田臣。なほ其餘にも守ならむとおぼしきかあるを。此三人のみを取られたるは。いかなるよじにかあらん。詳ならず。また上文に二人違令とあるは。此の三人の事か。さらば二は三の誤ならんか。此事上にも云り。○爲君臣は。次なる若君或臣とあるそれにて。君は長上の官を云ひ。臣は其下にありて。民を治むる者を云なるへし。○感二途。本に感を減に作る。今考本及集解。また本の訓に據て改む。さて二途とは。將幣諸神と。造新宮との二なり。○また神祭云るにも。○大赦天下。大赦始見えたり。赦には令に大赦常赦の名目あり。大赦は常赦に對ひたる目なれど。此時のはさることにはあらて。たゞひろく罪を赦し給ふにもあるへし。

別鹽屋連鯛魚鯛魚。此云三。舉能之慮。神社福草。朝倉君。梶子連。三河大伴直。蘆尾直。

四人並。此六人奉順天皇。朕深讚美厥心。

鹽屋連鯛魚。本に連字を脱せり。今考本齊明紀に據て補。姓氏錄河内皇別。鹽屋連。武内宿禰男。葛城會都彥命之後也。日本紀合。とあり。既出。鹽屋地名か。倭名抄下野國鹽屋郡あり。鯛魚。通證に。倭名抄。鯨又作鯛。和名古乃之呂。今其小者謂豆奈之。古歌東路乃室之八鳥爾起煙。誰子乃代爾豆奈之燒良牟。此歌何に出たるか知らず。豆奈之萬葉十七歌によめり。○神社。氏なり。姓氏錄に載せず。系詳ならず。續紀和銅三年正月。神社忌寸河内。授從五位下。萬葉六に神社忌寸老麻呂あり。神名式。近江國淺井郡上許會神社。通證云。社訓許會。出于此。天武紀。社戶訓古會倍。萬葉集。乞字亦訓古會。蓋神社則人之所爲祈願。故訓社爲古會。とあり。○梶子連。姓氏錄大和神別。仲九子。日臣命九世孫金村大連之後也。續紀天平勝寶元年閏五月。私度沙彌。小田郡人。九子連宮麻呂。授法名應寶。入師位。又天平勝寶五年六月。陸奥國牡鹿郡人。外正六位下九子牛麻呂。正七位上九子豐島等二十四人。賜牡鹿連姓。後紀延曆十六年正月。賜陸奥國安積郡人。外少初位上九子部古佐美。富田郡人。九子部佐美。小田郡人。九子部稻麻呂等。大伴安積連。遠田郡人。外大初位上九子部八千代。大伴山田連。續後紀。大和人。正七位上仲九子連乙成。從八位上仲九子連真當等。改賜仲宿禰。倭名抄。陸奥國安積郡九子。宮城郡九子あり。○氏族按



姓氏錄神別大國主之後。有<sub>ニ</sub>和仁古<sub>一</sub>與<sub>ニ</sub>丸子<sub>一</sub>同訓。今此丸子部。實不<sub>レ</sub>詳<sub>ニ</sub>所系<sub>一</sub>。唯其族人多屬<sub>ニ</sub>大伴氏<sub>一</sub>。豈以<sub>ニ</sub>其同宗<sub>一</sub>歟。故姑序<sub>ニ</sub>于此<sub>一</sub>。又陸奥話記。有<sub>ニ</sub>丸子宿禰弘政<sub>一</sub>拾芥鈔有<sub>ニ</sub>丸子公<sub>一</sub>。豈皆是族歟。併附待<sub>ニ</sub>後考<sub>一</sub>。但し和仁古與<sub>ニ</sub>丸子<sub>一</sub>同訓とあるは非なり。丸子はマリコと訓て。和仁古とは別なり。さて此同族社鹿<sub>一</sub>。○三河大伴直。稱德紀。神護景雲三年十一月。陸奥牡鹿郡俘囚大<sub>トモ</sub>部押人言。傳聞。押人等本是紀伊國名草郡片岡里人也。昔者先祖大伴部直。征<sub>レ</sub>夷之時。至<sub>ニ</sub>於小田郡島田<sub>一</sub>村。而居焉。とあり。大伴部も同じ事なれば。此族の三河に居りし氏なるへし。○蘆尾直。本に尾直二字脱せり。今中臣本及釋紀に據て補へり。和名抄。蘆和名阿之。薄和名須々木。仁德紀に荻を須々伎と訓り。へりなきは此類の總名に云へること既に云へり。さて此氏系詳ならず。

宜罷<sub>ニ</sub>官司處處屯田<sub>一</sub>。及吉備島皇祖母處處<sub>ニ</sub>賦稻<sub>一</sub>。以其屯田。班<sub>ニ</sub>賜群臣<sub>一</sub>及伴造等。又於<sub>ニ</sub>脫籍寺<sub>一</sub>入<sub>ニ</sub>田與山<sub>一</sub>。

島皇祖母。天皇御母吉備姬王と申す。皇極紀二年九月に薨給へるよし見えたり。島は大和國高市郡地名。姫王其地に坐々し也。○賦稻。賦は貸の古體なり。當<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>貸と云歟もあれ。さて貸假也。借盈也と玉篇に見えたり。天武紀に貸税とありて訓同し。現報靈異記に。息利伊良之字末波利と訓り。袖中鈔に。田作る者の。春時米を人にとらせ伊良志て。夏になり田を植さするを。田つくと云り。とあり。新撰字鏡に。貸道才反去。借<sub>ニ</sub>與於人<sub>一</sub>。伊良須。或<sub>レ</sub>大得反入。借取<sub>ニ</sub>於人<sub>一</sub>。伊良布。とあり。稻を出舉して其利息を取なり。出舉稻のこと始めて此に見えたれと。此に拘りしには非す。○脱籍は。定額に洩れたる寺にて

平寺なり。それに田又山を賜ひしなり。

壬午。皇太子使<sub>マカシ</sub>使<sub>マカシ</sub>奏請<sub>マカシ</sub>曰<sub>マカシ</sub>昔在天皇等世。混<sub>ニ</sub>齊天下<sub>一</sub>而治。及<sub>ニ</sub>逮于今<sub>一</sub>。分離<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>業<sub>一</sub>。屬<sub>ニ</sub>天皇我皇可<sub>レ</sub>牧<sub>ニ</sub>萬民<sub>一</sub>之運。天人<sub>一</sub>合應。厥政惟新。是故慶之尊之。頂戴<sub>ニ</sub>伏奏<sub>一</sub>。現爲<sub>ニ</sub>明神御<sub>一</sub>八島國<sub>ニ</sub>天皇<sub>一</sub>。問<sub>ニ</sub>於臣<sub>一</sub>曰。其群臣連。及伴造國造所有。昔在天皇日所置子代。入部。皇子等私有御名入部皇祖大兄御名入部。謂<sub>ニ</sub>産人<sub>一</sub>。大兄也。及其屯倉。猶如<sub>ニ</sub>古代<sub>一</sub>而置以不。臣即恭承<sub>ニ</sub>所詔<sub>一</sub>。奉答而曰。天無<sub>ニ</sub>雙日<sub>一</sub>。國無<sub>ニ</sub>二王<sub>一</sub>。是故兼<sub>ニ</sub>并天下<sub>一</sub>。可使<sub>ニ</sub>萬民<sub>一</sub>唯天皇耳。別以<sub>ニ</sub>入部及所封民<sub>一</sub>。簡充<sub>ニ</sub>仕丁<sub>一</sub>。從<sub>ニ</sub>前處分<sub>一</sub>。自餘以外。恐私<sub>ニ</sub>駈役<sub>一</sub>。故獻<sub>ニ</sub>入部五百二十四口<sub>一</sub>。屯倉一百八十一所。

壬午は二十日なり。○奏請の請を。本に清に作るは誤なり。○注謂國業也の四字。集解に私記の據入として削れり。さもあるへし。○天皇我皇。通證云。重言如此者。尊而親之也。と云り。○現爲明神御八島國天皇は。令義解に。明神御<sub>ニ</sub>大八洲<sub>一</sub>天皇詔旨。謂<sub>ニ</sub>用<sub>ニ</sub>於朝廷大事<sub>一</sub>之辭。即立皇后皇太子及元日受<sub>ニ</sub>朝賀<sub>一</sub>之







ふへしと云れたり。また本居翁曰。この文章を按じ。當時群臣私有の屯倉。甚多かりしを。今宮公に收めて。唯天皇の御料の屯倉  
廢せるものも如  
しと云れたり。

甲申。詔曰。朕聞。西土之君。戒其民曰。古之葬者。因高爲墓。不封不  
樹。棺槨足以朽骨。衣衾足以朽完而已。故吾營此丘墟不食之地。欲  
使易代之後。不知其所。無藏金銀銅鐵。一以瓦器。合古塗車芻靈  
之義。棺漆際會。奠三過飯。含無以珠玉。無施珠襦玉押。諸愚  
俗所爲也。又曰。葬者藏也。欲人之不得見也。廼者我民貧絕。專由營  
墓。爰陳其制。尊卑使別。

甲申。二十一日なり。○因高。本に因を困に作るは誤なり。今秘閣本中臣本に據て改○棺槨足以朽骨云  
々以下。欲人之不得見也と云まで。魏志文帝紀の文を以て仕立られたり。然るに重胤この文を論ひ  
て云。皇國はしも神代より始て。葬禮の事なども。他國よりは復に勝りて懇切なりしかは。棺槨のこ  
と。其設なん甚しかりければ。こゝに引せ給へる魏文紀に。棺槨足以朽骨。衣衾足以朽完而已と云  
如き。薄情なる事はなくして。棺槨の制。衣衾の設なども。甚忠誠に物せられたりけむ御事は。山陵の

崇大なる。丘墓の高重なる狀。却りて物事の甚能くも開けて。事整へりけるは。今世の及ふ所に非ず。  
又禮檀弓には。擇不食之地而葬と云事あれ共。此方には雄略天皇九年。小弓宿禰の薨られし所に。  
其從へる采女大海か言に。妾不知葬所。願占良地。と申せるに就て。於是大連奉勅。使土師連小鳥  
作冢墓於田身輪邑。而葬之也。と有か如き。彼は不食之地を擇ふを。此には願占良地と見えたるに  
て。其葬儀の厚くして誠ある事。實に天下萬國に並無き大御國なり。と云れたる。まことにさる言な  
りかし。○一以瓦器。以下本に以字行れり。今除けり。○塗車芻靈。禮記注。塗車以泥爲專也。東草爲  
人形。以爲死者之從衛。謂之芻靈。略似人形而已。とあり。○奠三過。通證云。魏志一本無奠字。者非。  
文公家禮。祝盥手洗盞斟酒。奠于戶東。淮南子曰。天地三月而爲一時。故祭祀。三飯以爲禮。とあり。  
然るに集解に。此奠字を除きて。三過二字を上につけ。會下原有奠字。一併魏志無。按此  
文非奠祭之事。古訓誤。と云れたるは。かへりて非なり。魏志になきは説したるなり。○飯含。後漢書禮儀志に。飯含珠玉  
如禮。注。禮稽命徵曰。天子飯以珠。哈以玉云々。などの文あり。○殊襦玉押。本に押を押に作るは誤な  
り。魏志には匣に作る。漢書注に。師古曰。珠襦以珠爲襦。如鎧狀。連縫之。以黃金爲縷。要以下玉  
爲押。至足亦縫。以黃金爲縷。とあり。扱盞簪錄云。百年前丹州明智氏采邑。土人掘地得一石槨。  
中有人。彷彿似道士之狀。遍體綴珠爲衣。如鎧甲。時呼爲壓口衿。今院宮監長崎豫州刺史。其先得  
一顆。至今尙傳存于家。用以爲荷包。榛子。深碧色大如筆管。長七八分。中有孔。可貫繩。因想。此物  
古所謂珠襦玉匣之類。此必前世貴人從葬之具。と云り。



夫王<sup>ミコノミヤ</sup>以上之墓者。其内長九尺。濶五尺。其外域<sup>ノミヅクハ</sup>方九尋。高五尋。役<sup>エヨヒ</sup>一千人。七日使<sup>シ</sup>訖。其葬時帷帳等<sup>ノカサヒラカイシロ</sup>用白布。有<sup>レ</sup>輜車<sup>ノカキマヘツキ</sup>。上臣之墓者。其内長濶及高。皆准<sup>ニ</sup>於上。其外域方七尋。高二尋。役五百人。五日使<sup>シ</sup>訖。其葬時帷帳等<sup>ノカサヒラカイシロ</sup>用白布。擔<sup>ヲ</sup>而行之<sup>ユク</sup>。蓋此以<sup>テ</sup>肩擔<sup>ヲ</sup>輿而送之乎<sup>カ</sup>。下臣之墓者。其内長濶及高。皆准<sup>ニ</sup>於上。其外域方五尋。高二尋半。役二百五十人。三日使<sup>シ</sup>訖。其葬時帷帳等<sup>ノカサヒラカイシロ</sup>用白布。亦准<sup>ニ</sup>於上。大仁小仁之墓者。其内長九尺。高濶各四尺。不封使<sup>スレ</sup>平。役一百人。一日使<sup>シ</sup>訖。大禮以下小智以上之墓者。皆准<sup>ニ</sup>大仁。役五十人。一日使<sup>シ</sup>訖。

王以上。中昔の制によらは。五世王以上を云。國史天長九年詔書に。夫王氏者。王號乃止<sup>ニ</sup>於五世。資蔭不<sup>レ</sup>過<sup>ニ</sup>六世。典制斯在。沿來浸久。とあり。されど此時の制はいかかありけむ詳ならず。○内長は。内深を云。濶五尺。下文に據るに。此下に高幾尺の句を脱せるなるへし。もしさもあらは。高さは六尺とあるへし。○高五尋。集解云。按尋爲<sup>ニ</sup>八尺。五八四丈。とあり。○七日使訖。集解に。唐六典戶部曰。凡内外職事葬者。一品給<sup>ニ</sup>營墓夫一百人。以<sup>ニ</sup>二十人。爲<sup>レ</sup>差。五品二十人。注人別十日。按役一千人。限以<sup>ニ</sup>七日。營<sup>レ</sup>墓而成。即與<sup>ニ</sup>六典一品營墓

夫數<sup>ニ</sup>同。非<sup>レ</sup>役<sup>ニ</sup>七千人<sup>一</sup>也。○帷帳。倭名抄調度部。帷。釋名云。帷加太比良。圍也。以自障圍也。帳。釋名云。帳張也。施<sup>ニ</sup>張於床上<sup>一</sup>也。義注云。孝德紀同訓。新撰字鏡補字亦同訓。按加太。不<sup>レ</sup>復重<sup>ニ</sup>之義。比良謂<sup>ニ</sup>薄如<sup>一</sup>葉也。與<sup>ニ</sup>枚訓<sup>ニ</sup>比帷字<sup>一</sup>。爲<sup>レ</sup>禱。帷。同。帷所<sup>レ</sup>謂<sup>ニ</sup>帳帷<sup>一</sup>。凡帳帷即是。後謂<sup>ニ</sup>禱布衣<sup>一</sup>。爲<sup>ニ</sup>加太比良<sup>一</sup>。本書内衣訓。由加太比良。是也。俗或以<sup>ニ</sup>布衣<sup>一</sup>。非<sup>レ</sup>是。とあり。通證云。帳訓<sup>ニ</sup>加伊之呂<sup>一</sup>。延喜式所謂壁代也。倭名抄釋名云。帳張也。今按帳屬有<sup>ニ</sup>几帳<sup>一</sup>之名。所出未詳。施<sup>ニ</sup>張於床上<sup>一</sup>也。小帳曰<sup>レ</sup>斗。俗云斗帳。一とあり。按に加伊之呂は。垣代の義なり。栗田寛云。帷帳は喪を家に留置く時。用るものならむと思はるれど。しからず。若<sup>シ</sup>喪を留むる時の事ならば。葬時云々と云へき由なく。又一日も喪を留めざる庶人の。帷帳を用る由なければなり。さらば此帷帳は。いかなるものかと思ふに。葬を送る時。棺などを障へ蔽ふ。幕の如きものにて。倭名抄葬送具にも。步障。表禮圖云。白布帷以障<sup>ニ</sup>婦人<sup>一</sup>。この障<sup>ニ</sup>婦人<sup>一</sup>と云は。西土の制にて。皇國のはた<sup>ニ</sup>棺を蔽ふ爲<sup>ニ</sup>に用ゐつるなるへし。今按俗用<sup>ニ</sup>步障<sup>一</sup>。是とある。即同物なるへし。其狀は衣垣<sup>ノ</sup>なごの如くにそありけんかし。衣垣とは。布にまれ。引延て物を隔つる料の具と聞えたり。此に云んば長かれと。皇大神の御形を。新宮に遷奉する事。延層儀式に載て。諸内人物忌等。及妻子等。人垣立立。衣垣曳立。とあるにて。思ひ辨へし。と云り。さる事なり。○輜車の岐は。棺を云也。令云。親王一品方相輜車各一具。義解謂。輜車喪車也。字書輜又作<sup>レ</sup>輜。とあり。○上臣は。高<sup>キ</sup>前津公<sup>ナリ</sup>。集解。按上臣謂<sup>ニ</sup>大臣<sup>一</sup>也。○墓者。本に者を脱せり。今中臣本考本に據て補ふ。○方七尋。本に七の下等字あるは衍なり。中臣本に據て削る。○高三尋は二丈四尺なり。○擔而行之。今の肩輿の始なり。通證云。今按肩輿對<sup>ニ</sup>腰輿<sup>一</sup>之名。倭名抄。腰輿和名太古之。蓋太謂<sup>レ</sup>手也。決疑要錄。腰輿以<sup>レ</sup>手挽<sup>レ</sup>之。別<sup>ニ</sup>于肩輿<sup>一</sup>。今京師俗葬。或用<sup>ニ</sup>肩輿<sup>一</sup>。其制如<sup>ニ</sup>神輿<sup>一</sup>。對馬俗通<sup>ニ</sup>用之<sup>一</sup>。考<sup>ニ</sup>内匠寮式<sup>一</sup>。腰輿腰車皆有<sup>ニ</sup>



鳥居。則蓋古之遺制也。と云り。我郷里信濃國諏訪にても。葬に用與をもちあるなり。○注蓋此以肩云々十字。集解に私記撥入として削れり○下臣之墓。集解に。下臣按謂大徳小徳也。蓋大臣之下。故謂下臣也。時制有左右大臣及内臣。位在群臣之上。大徳以下。位次于其下。可以知也。と云れたるか如し。通證に上臣を大徳と謂ひ。下臣を小徳と謂るはよからず○高二尋半は。二丈なり○内長九尺。本に内を外に作るは誤なり。今中臣本集解に據て改。九下一の九字行れり。今削る○不封使平。集解に。按聚土曰封。可知無外域者非封也。唐詩所謂四尺孤墳是也。とあり○大禮は。十二階のうち第五階なり。小智は第十二階なり。

凡王以下。小智以上之墓者。宜用小石。其帷帳等。宜用白布。庶人亡時。収埋於地。其帷帳等。可用鹿布。一日莫停。凡王以下。及至庶民。不得營殯。

宜用小石。喪葬令云。凡墓皆立碑。記具官姓名之墓。集解云。按小石蓋謂堅石。即碑也。往々所出古碑。記官位姓名。藤原永手輩碑。不過長四五尺廣一尺許。故稱小石。とあり○其帷帳等宜用白布。集解云。原有其帷帳八字。王以下用白布。既見上文。大仁已下用白布。可推知。爲衍文。明。故削。と云り○一日莫停云々不得營殯など。あまりに事減たる御制と云へし。

凡自畿内及諸國等。宜定一所而使収埋。不得汗穢散埋處處。

散埋處々。本に理に作るは誤。今秘閣本集解に據て改む。喪葬令云。凡皇都及道路側近。並不許葬埋。三代實錄貞觀二年。制定百姓葬送之地。其一在山城國葛野郡五條荒木西里。其二在六條久受原里。其三在紀伊郡十條下石原西外里。其四在二十一條下佐比里。其五在十二條上佐比里。とある。これは山城京の地の事なれど。其本の起りは。大化の制によるなるへし。

凡人死亡之時。若經自殉。或絞人殉。及強殉亡人之馬。或爲亡人藏寶於墓。或爲亡人斷髮刺股而誅。如此舊俗。一皆悉斷。無藏。或本云。金銀錦綾五綵。又曰。凡自諸臣。及至于民。不得用金銀。縱有違詔犯所禁者。必罪其族。

自殉。是は垂仁天皇御世に禁給ひしを。なほ遺れるもありしにや。通證に。世俗追悼亡人。而刺腹。謂之追腹。と云り。戰國の頃より。徳川氏の初世に。此事とくめられたりき○或絞人殉。職員令彈正臺に。肅清風俗。義解謂。假令信濃國俗。夫死者即以婦爲殉。若此者止之以禮。とあり○強殉亡人之馬。播磨風土記。飾磨郡貽和里。船丘北邊有馬墓池。昔大長谷天皇御世。尾治連等上祖長日子。有善婢與馬。並合之意。於是長日子將死之時。謂其子曰。吾死以後。皆葬准吾。即爲之作墓。第一爲長



子之墓。第二爲婢墓。第三爲馬墓。併有二三。とあるなど。此類なり。○藏寶於墓は。鏡劔玉の類なり。此御制はありしかど。行はれさりしと見えて。古き墓に往々寶を掘出るか多かり。○爲亡人斷髮。通證云。今俗。婦爲亡夫。截髮見志之類。西土亦有此事。見輟耕錄。とあり。○刺股而誅。本諺作誅。今改。さて此事は書に見えねど。殉死に代て。かゝる事をも爲しものと見えたり。魏志倉慈傳云。西域諸胡聞慈死。悉共會聚發哀。或有以刃書面。以明血誠。とあり。此類なり。○必罪其族。かく嚴に禁せられたれども。其事行はれさりしにや。此後も往々此舊俗の。史に見えたることあり。

復有見言不見。不見言見。聞言不聞。不聞言聞。都無正語正見。巧詐者多。復有奴婢。欺主貧困。自託勢家。求活。勢家仍強留買。不送本主者多。復有妻妾。爲夫被放之日。經年之後。適他恒理。而此。前夫三四年後。貪求後夫財物。爲己利者甚衆。復有恃勢之男。浪要他女。而未納際。女自適人。其浪要者。嗔求兩家財物。爲己利者甚衆。復有亡夫之婦。若經十年及二十年。適人爲婦。并未嫁之女。始適人時。於是妬斯夫婦。使被除多。

按に此以下の條件ともは。國司諸氏の上言の旨に就て。逐條に詔し給へるものと見えたり。○復有奴婢。本に復字なし。例に據にあるべき字なり。今水戸本集解に據て補ふ。奴婢は吏學指南に。古者以罪沒爲奴婢。故有官私奴婢之限。とあり。○貧困自託勢家。これは勢家を欺きしなり。本主を欺きしにはあらず。欺主貧困。云々と讀へし。○留置云々。後にも戸令に。賣買を禁せしことあり。人身賣買史と云ものに云る説を。此に載すへし。我國古來人民の階級に二あり。一を良民とし。一を賤民とす。大寶の律令に依て考ふるに。我國の賤民には。五色の別ありて。之を陵戸。官戸。家人。公奴婢。私奴婢とせり。陵戸とは。歴代の山陵を守る人民にして。其初は犯罪者などを徒刑に處して。墓陵の掃除などに充て。使役したるものなり。又官戸とは。政府の賤業を營ましむる人民にして。叛逆人などの子孫を。沒收したるものなり。又家人とは。元來本主の子弟の支族にいて。永く一戸をも立つることをえせず。遂に主長の爲めに驅使せらるるものなり。扱奴婢も陵戸官戸などの如く。犯罪によりて沒官せられ。或は戰爭によりて捕虜となり。又は降服し。或は負債和略。歸化人等より成りしものにして。其官に屬するを公奴婢とし。王臣以下總て人民の所有寺社ににもありかゝるものを。私奴婢とす。此奴婢といふ名稱は。今日普通人々の口にする處の奴隸なり。此等の賤民は。古にありては。財物禽獸のことごとく。或は人に賜ひ。或は贖物の料となし。日本書紀。高麗抄。聖德太子傳。或は本主の自由に賣買することを許したるものなるか。抑々我國において。人身賣買の行はれし事の。初めて史上に見えしは。孝德天皇の大化二年三月



甲申の詔にありけり。有<sub>レ</sub>奴婢。欺<sub>レ</sub>主貧困。自託<sub>レ</sub>勢家。求<sub>レ</sub>活。勢家仍強留買。不<sub>レ</sub>送<sub>レ</sub>本主。者多。是奴婢の  
 主家貧困なるに乗じて。偽りて自ら勢家に寄りたるを。其儘買留めて。舊主に返さざるをいふなり。  
 又天武紀五年五月。下野國司奏せしことあり。所部百姓遇<sub>レ</sub>凶年。飢乏欲<sub>レ</sub>賣<sub>レ</sub>子。而朝不<sub>レ</sub>聽矣。是良民の  
 貧困身に迫り。飢乏旦夕に至り。遂に己れの最愛の子を賣らんと欲せしなり。是等に依りて見れば。  
 已に此頃に於て。人身賣買の行はれしことは瞭然たり。然れども尙負債を償ふにたらざるより。身を  
 没して奴婢となり。或は又私に子弟を賣るもの。續々跡を嗣きて斷除すへからず。故に持統天皇の五  
 年三月癸巳に至り。詔を發して。父母の爲に賣られしもの外は。一切良民となし給へり。同書に。  
 若有<sub>レ</sub>百姓。爲<sub>レ</sub>兄見<sub>レ</sub>賣者從<sub>レ</sub>良。若子爲<sub>レ</sub>父母見<sub>レ</sub>賣者從<sub>レ</sub>賤。若准<sub>レ</sub>貸倍<sub>レ</sub>沒<sub>レ</sub>賤者從<sub>レ</sub>良。其子雖<sub>レ</sub>配<sub>レ</sub>奴  
 婢。所生亦從<sub>レ</sub>良。是又良民の子孫族類等を賣りし證據にて。此等は太實以前に於て。盛に人身賣買の行  
 はれし一般を窺ふに足るものなり。大實律令いつるに至りて。良民の子孫族類を賣買するを嚴禁し。  
 賤民といへども。陵戸。官戸。公奴婢は。賣買することを許さず。獨私奴婢のみは。財物畜産と同しく。  
 専ら賣買することを公許せり。と云はれたるはいと委し。仍て今其文をさなから此に載す。爲<sub>レ</sub>夫被<sub>レ</sub>放  
 之日。集解に之曰<sub>レ</sub>二字衍として削去れり。按に之日は。者字の二字に誤りしものなるへし。要他女。  
 コトムスビは言語要結の義と。通證に云へり。神代紀に。建絶要之誓。訓<sub>レ</sub>古登々和多留。とあるに思合  
 すへし。このこと神代紀に云おけり。○兩家財物は。婚家姻家なり。○亡夫之婦。本に之字無し。今中臣

本及通證所引一本に據て補。○妬斯夫婦使被除。按に上古の俗。夫死すれば再嫁を禁せしものとおもは  
 る。信濃國俗に。前夫に殉死せしめしこと。令義解に見ゆ。後世西土の俗に倣ひて。十年二十年  
 を經て。解除せしめて。始めて再嫁を容しとなり。しかるに當時に至りて。解除の弊漸く生りしかは。  
 今斷除せしめしなり。さて又未嫁かざる女の。始て人に適く時。被除せしめし義は。未詳ならねど。  
 もしくは處女にて在し時の童心を。改めしむる意より。物を出さしめしならむか。然るに當時其本意  
 を失ひて。強て物を出さしむるは。妬心より出しものにて。被除の本意に非ざるか故に。除斷せしめ  
 しなるへし。

復有<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>妻被<sub>レ</sub>嫌離<sub>レ</sub>者。特由<sub>レ</sub>慙愧所惱。強爲<sub>レ</sub>事瑕之婢。復有<sub>レ</sub>  
 屢嫌<sub>レ</sub>己婦。好向<sub>レ</sub>官司。請決。假使得<sub>レ</sub>明三證。而俱顯陳。然後可  
 諮。詎生<sub>レ</sub>浪訴。復有<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>役邊畔。民事了還鄉之日。忽然得疾。臥<sub>レ</sub>死  
 路頭。於是路頭之家。乃謂之曰。何故使人死於余路。因留<sub>レ</sub>死者友伴。  
 強使<sub>レ</sub>被除。由是兄雖臥<sub>レ</sub>死於路。其弟不收者多。復有<sub>レ</sub>百姓溺<sub>レ</sub>死於河。  
 逢者乃謂之曰。何故於<sub>レ</sub>我使<sub>レ</sub>遇<sub>レ</sub>溺人。因留<sub>レ</sub>溺者友伴。強使<sub>レ</sub>被除。由是



兄雖溺死於河。其弟不救者衆。復有被役之民。路頭炊飯。於是路頭之家。乃謂之曰。何故任情炊飯。余路強使被除。復有百姓就他借飯。炊飯其飯觸物而覆。於是飯主乃使被除。如是等類。愚俗所染。今悉除斷。勿使復爲。

由慙愧所惱。被逐たる夫に慙愧しめられ。所惱たるを云。所屬は。南山教誡律義云。論云。夫言。悲者。意在。柔。和。被。他。所。屬。不。生。嗔。恨。云々。の大意は次に云へし。○事瑕之婢。按に事は上に云る要なり。瑕は遐と音義共に通ずれば。其義を取て遐遠る意なるへし。言の義は。既に夫婦の要を遠離りても。なほ本夫の心を慕ひて。強ちに本夫の許に留りて。婢となりて去らざるなり。しか爲る故は。吾身を鬻きて。賤婢となりて。其罪を贖ふなるへし。神代紀に。泉津事解之男神あり。名義また同じ。重胤云。事瑕之婢は。妻の夫の言に逆かへるを以。婢と爲る。にて。通證に。親統也。言。鬻。身。爲。婢。以。贖。其。罪。也。とあるか如し。これは瑕の意。聊異なり。いかゞあらん。○嫌已婦奸他。本に婦字を脱せり。今中臣本考本集解に依て補へり。奸は諸字書に。カタマシとよみ。字鏡に倭加太牟と注せれど。こゝにはいかゞなり。タハケタリなどよむへし。○明三證は。吏學指南に。顯證謂下知見爭論之人上也。とある義なるへし。又或は三箇明證を謂にもあるへし。獄令に。凡告言人罪。非謀。教。以上。者。皆。令。三。審。○顯。陳。は。アラハシマヲサシメテと訓へきか。○詔は。啓す意に紀中に書り。垂仁紀。兄王詔。欲得三月矢。弟王詔。欲得皇位。などの類多し。○邊畔民。畔下中臣本之字あり。○臥死路頭。民部式云。凡諸國往還。百姓若

有死死者。斂埋便處。具顯貫屬姓名。勝示其上。○因留死者。本に因を因に作る。今中臣本集解に據て改む。下同し。○百姓溺死於河云々。重胤云。此は世記及儀式帳に謂ゆる。國郡罪の中なる。川入と云ふものなり。○因留溺者。右に同じ。○路頭炊飯。古へは遠國に赴く人は。行李を携へて。到る處の路頭に飯を炊きて食せしなり。重胤云。此は其火を穢すを以の故なり。○借飯炊飯。倭名抄。蔣飭切韻云。飯古之岐。炊飯器也。箋注云。孝德紀同訓。新撰字鏡。飯。糧。皆同。訓許之伎。見。萬葉集。寶壽問答歌。谷川氏曰。古之岐。與炊音通。按太神宮儀式帳。大膳式。內匠寮。大炊寮。造酒司式。法隆寺寶財帳等。用。糧。字。蓋。其。器。用。木。造。故。變。五。從。木。造。與。訓。禾。所。糴。糧。混。李。時。珍。曰。北。人。用。瓦。飯。南。人。用。木。飯。然。則。西。土。亦。有。用。木。造。者。伊。勢。神。宮。今。猶。互。飯。人。用。木。飯。然。則。西。土。亦。有。用。木。造。者。伊。勢。神。宮。今。猶。互。飯。とあり。○覆は。轉覆して毀損へるなり。

復有百姓臨向京日。恐所乘馬疲瘦不行。以布二尋。麻二束。送參河尾張兩國之人。雇令養飼。乃入于京。於還鄉日。送鋏一口。而參河尾張人等。不能養飼。翻令疲死。若是細馬。即生貪愛。工作謾語。言被偷失。若是牝馬孕於己家。便使被除。遂奪其馬。飛聞若是。故今立制。凡養馬於路傍國者。將被雇人。審告村首。方授酬物。其還鄉日。不須更報。如致疲損。不合得物。縱違斯詔。將科重罪。

布二尋。一丈六尺なるへし。麻二束。十把爲束とあり。字典。尋。度。名。周。禮。注。八。尺。曰。尋。倍。尋。曰。常。これによれるものなるへし。古代に八尋殿八



尋屋などの尋とは。異なることもよりなり。○兩國之人雇令養飼は。參河尾張等の國俗なり。○鍬一口。倭名鈔農具。鋤。唐韻云。鐵鍬。鋤。別名也。釋名云。鋤須岐。去穢助苗也。鍬。和名同上。挿地起土也。又曰。鍬。兼名苑云。鍬。字又作鏟。久波。一名鐮。說文云。鏟。揚氏漢語抄云。和名同上。大鍬也。養注云。孝德紀。持統紀。鍬。須。兼。式。亦。以。鍬。爲。須。養。崇。神。紀。地。名。鏟。亦。同。訓。爲。尤。深。君。訓。鏟。鐮。爲。久。波。者。誤。又。云。鏟。當。訓。久。波。なほ箋注に詳なり。○參河尾張人。本に尾張二字脱たり。今薩摩本に據て補ふ。さて此は此二箇國にての互の風俗なり。他國の人の。參河尾張の人に送るにはあらず。○孕於己家は。養飼の人の家なり。○便使被除。重胤云。馬の事に依て被除する事。此なるは逆事なから。上古に然る風の有し者なるへし。但し此は馬を預る者の惡事なり。○注首長也。集解に。此三字私記攙入として削れり。○訓物。訓は與酬同し。○更報。本に更を吏に作るは誤なり。秘閣本に據て改む。○不合得物。薩摩本秘閣本。合を令に作る。○縱達斯詔將科重罪。これまての數件は。當時の弊俗なるか。今にしては詳に其情實を知らたし。其中多くは。被除を人に負せ。其物を取て己か利と爲しにあり。そもく被除は。穢惡を除かんか爲に。其被物を出さしむるなり。今は然らず。其物を取て利となすは。甚其本意を失へり。されどこれもまた其漸ありて。雄略帝の時に。責讓齒田根命。以馬八匹大刀入口。被除罪過とあり。また繼使。露置資財於市とあり。これら既に上古被除の本意を失へり。况て當時また其世を去ること遠し。遂に全く其本意を失ひしなりけり。

罷市司。要路津濟渡子之調賦。給與田地。

市司は。按に職員令に。東西市司正あり。掌財貨交易。器物。眞偽。度量。輕重。賣買估價。禁察非違。事とあり。此なる市司は。それにはあらず。市司に隸屬する。徵者を云なり。○要路津濟渡子。要路は要害の地を守る者。關守等の類是なり。津濟は倭名抄に豆和太利とあり。桓武紀延曆二十年勅。諸國津濟處。設舟橋爲式とあり。渡子は既出。調賦は。其者等の職業を。即て調賦として。其者等にのみ輪さしめたるを。今は人民一般に。其事を司とらしめて。其費用の田地を給ひしなり。集解云。按先是市及要路。皆有調賦。今除其調賦。給以田地。充其費用。と云れたるも其意か。○給與田地。此時より其調賦を除きて。田地を給ひて。其田租より出るものを以。費用に充つるなり。

凡始畿内及四方國。當農作月。早務營田。不合使喫美物與酒。宜差清廉使者。告於畿内。其四方諸國國造等。宜擇善使。依詔催勸。

美物は。嘉魚なり。應劭に。美物といふは。よき食物か。いそりの名か。兩儀に通ずるなり。美物と云ふことを。魚味と思ひならはせしことあり。其故なきにあらず。日本紀には。美物をいそとよめりとあり。さらば此の美物を。イフと古く訓めりし。國史制禁部。弘仁二年勅。農人嗜魚酒。禁制惟久。而國司寬縱。無情糺斷。今須遣使。重加督察とあり。○其四方の其字。恐くは與字の誤ならんと云り。



秋八月庚申朔癸酉。詔曰。原夫天地陰陽。不使四時相亂。惟此天地生乎萬物。萬物之內。人是最靈。最靈之間。聖爲人主。是以聖主天皇。則天御寓。思人獲所。暫不廢胸。而始王之名。臣連伴造國造。分其品部。別彼名。復以其民品部。交雜使居國縣。遂使父子易姓。兄弟異宗。夫婦更互殊名。一家五分六割。由是爭競之訟。盈國充羽。終不見治。相亂彌盛。粵以始於今之御寓。天皇及臣連等。所有品部。宜悉皆罷。爲國家民。其假借王名。爲伴造。其襲據祖名。爲臣連。斯等深不悟情。忽聞若是處宣。當思祖名所借名。滅。由是預宣。使聽知朕所懷。王者之兒。相續御寓。信知時帝與祖皇名。不可見忘於世。而以王名。輕掛川野。呼名百姓。誠可畏焉。凡王者之號。將隨日月。遠流。祖子之名。可共天地長往。如是思故宣之。始於祖子。奉仕卿大夫。臣連伴造氏人等。或本云。名咸可聽聞。

癸酉。十四日なり。○是以。本に是を見に作る。今中臣本考本集解に據て改。秘閣本には日に作る。○思人獲所。通證云。言思。欲人々得其所。樂其業也。舊讀非とあり。○始王之名々は。王之名々より始めてと訓へし。本に始王之と訓て。景行紀なる。今時謂諸國之別者。即別王之苗裔也。とある。此別王を指て。即此始王の事と云ひ。又始王之名々。臣連云々と訓て。臣連以下は。則ち其始王の裔にして。或は臣連伴造云々に爲るなりと云る説はあらず。こゝは王の名々も。臣連云々も。みな品部となれる其一なり。なほ次に云。○分其品部。品部は某部々々と云類なり。王之名々は。所謂御名代を云るにて。其御名とも。即て臣下の氏となり。或は彼某部某部の類の號ともなるを云なり。品部と云は。其部曲に品々あれば云なり。分其品部とは。各自其部曲を分て。其職業を異にするなり。○別彼名々とは。天皇皇子の御名々々の御名代を始め。また臣連伴造國造の名々も。みな部々家々の氏となりて。氏々の別るゝなり。○其民品部とは。其別れて民となれる品部の。末々の國縣に交雜りて。ひろがり居るなり。○父子易姓兄弟異宗。この姓を本にカハネと訓るは惡し。ウチと訓へし。氏の事なり。下に氏々人等とあるを。名々王民とあり。さて夫婦更互殊名とある。此名又氏の事なり。さてかく父子兄弟夫婦の一家族も。國縣に分れ住て。氏々名々の易れるとは。集解に。譬父則爲譽津部之民。而負譽津部。而子則爲武部之民。負武部。兄弟夫婦互如此異矣。とあるが如し。さて其名々は。其家の職業なるか。かく別れたる上にては。其職業も自ら別るゝ道理にて。これ争競のもとなりとなり。○盈國充朝。栗田氏云。其



職業を異にするを以。父子兄弟互に分割れて。氏姓の貴賤を争ひ。品部に分れたる所の田地を。詔へなごするもの。國に盈ち朝に充る也。此即上文に所謂。臣連等。伴造國造。各置己民。恣情驅使。又割國縣山海林野池田。以己財。争戦不巳。或者兼并數萬頃田。或者全無容針少地。とある是也。此弊を矯正せんが爲に。下に罷處々屯倉。及別臣連伴造國造村首。所部曲之民。又罷處々田莊等の詔ある也。○及臣連等。通證云。此下一分注等。謂國造伴造六字とあり。中臣本にもあり。○假借王名爲伴造は。集解云。按穴穂部造。白髮部造之類。とあるが如し。○襲據祖名爲臣連は。又云。按吉備津彦命之後。爲吉備臣。阿直岐之後。爲阿直岐史之類也。とあるが如し。○斯等深不悟情とは。右等は古代風なれども。神名王名等を。軽く川野又百姓に掛て呼ぶは。誠に可畏きことなれば。今よりは其習慣を改めむとするを。民間には。其等の事を深くたごらで。彼此と云ものあらむとの詔なり。○祖名所借名滅。本に下の名字脱たるを。今中臣本に據て補つ。既に通證に。今按當作所借祖名滅。恐錯謬。と云れたるは。さることなり。さて文義は。祖名も所借の名も。二つながら滅むとの意なり。二項と爲て見るべし。されば通證に。所借祖名滅の誤ならむと云れたるも。未脱字あることを知らぬ説なれば。卓見なから非なり。○見忘。本に忘を忌に作るは誤なり。秘閣本に據て改めつ。○輕掛川野。集解云。按安寧天皇。名磯城津彦。而大和國有磯城郡。雄略天皇名大泊瀨。而磯城郡有泊瀨川之類。と云り。○呼名百姓。又云。泊瀨部穴穂部之類。と云り。○祖子を。本にミコと訓るはあたれり。此祖子は對祖皇て書たるものに

て。皇子皇孫なり。通證に。蓋謂先祖。祖子の名とは。王者之號に對して云るなり。同し文字ながら。聖武紀に。上於是祖子相見。一怪一喜。父子之義不し失。孝養。とあるは。親子の義なり。こゝとは指す所異なり。○始於祖子。此も上に同じ。皇子皇孫を始めてなり。○名々王民。按に名々は氏々と言かことし。上に云り。記云。天下氏々名々人等。○咸可聽聞。集解云。按以名名。于川野。而傳於後世。是古俗也。未レ有譯名之制。故始有此舉。曉諭群臣。今世往々猶有以名號。寺若稱地。蓋古俗遺風。自然存在者歟。と云り。

今以汝等使仕狀者。改去舊職。新設百官。及著位階。以官位叙。今發遣國司。并彼國造。可以奉聞。去年付於朝集之政者。隨前處分。以收數田。均給於民。勿生彼我。凡給田者。其百姓家近接於田。必先於近。如此奉宣。

改去舊職新設百官。平田翁云。下文三年四月詔に。惟神我子應治故寄。是以與天地之初。君臨之國也。自始治國皇祖之時。天下大同。都無彼此者也。と詔へる。これ天皇の。寔の大御意と見奉る。然るに此に。改去舊職。新設百官。及著位階。以官位叙。とある詔とは。霄壤相反けり。つらく按るに。先に以悦使民云云の詔。また爲人柔仁。不擇貴賤。頻降恩勅の文を見奉るに。此天皇の御性。柔



仁温恭にして。古例を守り給ふこと。中大兄皇子と相似たまはず。鎌足公傳に。輕皇子器量。不<sub>レ</sub>足<sub>三</sub>與謀<sub>二</sub>大事<sub>一</sub>。とあるも。此天皇の。中大兄皇子の漢風を好み。革命の事を悦び給ふ御性と。反して坐ますを。鎌足公のしか見奉りしなりけり。さるにても。此天皇の御證。孝徳と稱し奉るは。御性によく當れりと申奉るへし。と云れたる。まことに然る説なり○以官位叙。官位令義解謂。大臣以下。書吏以上曰<sub>レ</sub>官。一品以下初位以上曰<sub>レ</sub>位。凡位有<sub>二</sub>貴賤<sub>一</sub>。官有<sub>二</sub>高下<sub>一</sub>。階貴則職高。位賤則任下。官位相當。各有<sub>二</sub>等級<sub>一</sub>。故曰<sub>二</sub>官位<sub>一</sub>也○付於朝集之政とは。朝集使に附たる政なり○處分は。コトワリと訓めれど。定の義なり。サタメと讀むべし○收數田は。收メタル數ノ田と訓へし○均給於民。此即班田の政なり。去年朝集使に命し給ひしなり○先於近。田令。凡給<sub>二</sub>口分田<sub>一</sub>。務從<sub>二</sub>便近<sub>一</sub>。不得<sub>二</sub>隔越<sub>一</sub>。義解謂。從<sub>二</sub>其家居<sub>一</sub>。便近<sub>二</sub>而給也<sub>一</sub>。

凡調賦者。可收<sub>二</sub>男身調<sub>一</sub>。凡仕丁者。每<sub>二</sub>五十戶<sub>一</sub>一人。宜觀<sub>二</sub>國國<sub>一</sub>。塙<sub>レ</sub>塙<sub>レ</sub>。或<sub>レ</sub>圖<sub>レ</sub>持來奉<sub>レ</sub>示。國縣之名。來時將定。國國可<sub>レ</sub>築堤地。可<sub>レ</sub>穿溝所。可<sub>レ</sub>墾<sub>二</sub>田間<sub>一</sub>。均給使<sub>レ</sub>造。當<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>解<sub>一</sub>此所<sub>レ</sub>宣。

可收男身調。按に上文正月詔に。罷<sub>二</sub>舊賦役<sub>一</sub>。而行<sub>二</sub>田之調<sub>一</sub>云云。別收<sub>二</sub>戶別之調<sub>一</sub>云云。とあり。しかるに是に至て。また男身調を收むと云は。記傳に。田之調。戶別之調を改めて。男の身調に替へ給ひしなり。

按に戶別之調は。一戶貫布一丈二尺とありて。男女及人口の別なかりしを。今は然らず。丁男一身に限りて課するなり。賦役令に據に。正丁一人。絹繩八尺五寸。六丁成<sub>レ</sub>疋。長五丈一尺。廣二尺二寸。美濃繩六尺五寸。八丁成<sub>レ</sub>疋。長五丈二尺。廣同<sub>二</sub>絹繩<sub>一</sub>。とあるにて。其概を知へし。續紀慶雲三年二月。准<sub>レ</sub>令。京及畿内人身輪<sub>レ</sub>調。於<sub>二</sub>諸國<sub>一</sub>。宜<sub>レ</sub>罷<sub>二</sub>人身之布<sub>一</sub>。輪<sub>二</sub>戶別之調<sub>一</sub>。乃異<sub>二</sub>外邦之民<sub>一</sub>。以優<sub>二</sub>內國之口<sub>一</sub>。とあり。人身之布とあるは。此に云男身調と同じ。是時また人身の調を罷て。戶別の調を收給ひしなり。故令に男身の調のことはなくて。戶別之調のことを載たり○凡仕丁者每五十戶一人。凡以下十字。既に上に見えたり。此は衍なるへし○或書或圖持來奉示。通證云。今按。此民部省圖帳之原也。職原鈔。民部省周禮地官大司徒之職也。邦國土地之圖。戶口人民之數。此官之所<sub>レ</sub>知也。又有<sub>二</sub>圖帳國郡勝示<sub>一</sub>。載以明白。謂<sub>二</sub>之民部省圖帳<sub>一</sub>。百鍊抄。後堀河天皇嘉祿二年。盜人切<sub>二</sub>穿民部省文庫<sub>一</sub>。盜<sub>二</sub>取文書<sub>一</sub>。諸國圖帳。少々紛失。本朝書籍目錄。亦載<sub>レ</sub>之。無<sub>二</sub>卷數目撰者名<sub>一</sub>。今唯見<sub>二</sub>一二殘篇<sub>一</sub>而已。とあり。世にある元亨二年の民部省圖帳と云ものは。後世の贋作なり。中山信名説に。東山天皇の御世の頃の偽作。駿河淺間神主某の偽作せしものと云。類聚國史(二册あり)新國史(二册ばかり)續紀天<sub>レ</sub>平十年八月甲午。德風土記。民部省圖帳。みな同人の贋作なり。と云り。但し德風土記は。今少し古し。或人云へり。續紀天<sub>レ</sub>平十年八月甲午。停<sub>二</sub>山陽道諸國借貸大稅出舉<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>舊。辛卯。令<sub>二</sub>天下諸國造<sub>一</sub>。國郡圖<sub>一</sub>。進<sub>二</sub>後紀延曆十五年八月勅<sub>一</sub>。諸國地圖。事迹疎略。加以年序已久。文字缺逸。宜<sub>二</sub>更令<sub>レ</sub>作之<sub>一</sub>。など。此後地圖の事の見えたるなり○國縣之名來時將定。國縣の名に。今まで天皇皇子等の御名を唱へ來りたるを。書圖に書付て持來たらん時に。前制に隨て。改定給はむとなり。續紀。和銅六年五月。畿内七道。諸國郡名着<sub>二</sub>好字<sub>一</sub>。とあるは。此と聊か異



なり。元明天皇の御世まで傳はりたる。國郡の名は。此御世に定給ひしか多くありしなるへし。

九月遣小德高向博士黑麻呂於新羅。而使貢質。遂罷任那之調。黑麻呂。更名玄理。是月天皇御蝦蟇行宮。或本云。離宮。是歲越國之鼠晝夜相連向東移去。

新羅。東國通鑑に據に。此年新羅善德女王十五年に當れり。○蝦蟇行宮。通證に。空穗談に。難波の祓に。冠柳に至りたまひて。大宮。河津なる柳か枝に居鸞を。白くさくとも先見つる哉。今所謂高津かと云り。記傳にも此に據られたり。攝津志云。西成郡村里。西高津。或作郡戸。雜糅大坂。呼曰高津町。又東生郡東高津。王子記作郡戸とあり。按に難波上古圖說云。高津は今東西の高津村を云ふ。此所難波津の内にて。わきて高き地故。然號たまひしなり。仁徳の條。難波に都す。是を高津宮といふとあり。又云。高津の宮地は。今の東高津村なりとあり。なほ此宮の事は。仁徳紀に云へり。されは今の高津は。高津の高を。後に音に呼じものなり。この蝦蟇は。後の高津なりと云説は。心得かたし。さらは一訓にカヘルとある方ならんも知かたし。行宮の蹟は異なるものなるへし。なほよく考へし。○越國。下文に依に越後なり。○晝夜。本に夜下一夜字あるは衍なり。今中臣本及集解に據て削る。

### 日本書紀通釋卷之五十九

飯田武郷謹撰

孝德天皇  
大化三年  
丁未

三年春正月戊子朔壬寅射於朝庭。是日高麗新羅並遣使貢獻調賦。夏四月丁巳朔壬午詔曰。惟神惟神者謂隨三神道。亦自有三神道也。我子應治故寄。是以與天地之初。君臨之國也。自始治國皇祖之時。天下大同。都無彼此者也。既而頃者。始於神名天皇名々。或別爲臣連之氏。或別爲造等之色。由是率土民心固執彼此。深生我汝。各守名名。又拙弱臣連伴造國造。以彼爲姓。神名王名。逐自心之所歸。妄付前前處處。前々猶謂人々也。爰以神名王名爲人賂物之故。入他奴婢。穢汙清名。遂即民心不整。國政難治。是故今者隨在天神。屬可治平之運。使悟斯等。而治國治民。是先。是後。今明日。次而續詔。然素賴天皇聖化。而習舊俗之民。未詔之間。必當



難待故始於皇子。群臣及諸百姓將賜庸調。

壬寅。十五日なり。射於朝廷。朝廷射の事は。清寧紀四年九月朔。天皇御射殿。詔百寮及海表使者射。とあり。景行紀に的イクハと訓り。訓意そこ云り。通證云。雜令曰。凡大射者。正月月中旬。親王以下初位以上。皆射之。國史收入十七日射禮條。公事根源曰。射禮十七日。見天武紀。十五日先有兵部省手番。と云り。公事根源云。射禮十七日。是は建禮門にて行侍る事也。代の始には豐樂院にてあり。十五日に先兵部省手つかひといふ事有。天皇四年九月一日に。詔して弓をいさしむ。孝德天皇の御宇には正月に有き。天智天皇九年。正月に。大夫士に詔有て。宮門に大射すとあり。これみな射禮のはじめならむかしとあり。○高麗新羅。東國通鑑を按に。此年高句麗寶藏王六年。新羅眞德女王元年に當る。○壬午。二十九日なり。○惟神我子應治故寄。惟神とは。天皇の神に御座するまゝにと云意なり。神に座すと。現御身は人にませとも。神たる御態を備へて坐々は。其御態の隨に天下を治しめせとなり。さて此御言は。神代紀に。天照大神勅皇孫曰。豐葦原千五百秋之瑞穗國。是吾子孫可王之地也。と詔へる是なり。寄とは。豐葦原國を擧て。皇孫に寄し給へるなり。祝詞に事寄とある此意にて。なほ事任と云か如し。さて此の注に。惟神者謂隨神道亦自有神道也。とあるは。後人の攙入なり。集解にも。十三字後人所加。文不爲語。と云て削去れり。信に然り。人の惑ひ易きを以て。此に因に此神奈賀良と云語の事を解へし。近き頃は此詞を心得あやまりて。自然に行はるる道理を云る詞のやうに思めれど。さる空理を云ることに非ず。古はみな實物ありて。それに附て云辭なり。實物とは。神又人にもあれ

國にもあれ。山にもあれ海にもあれ。其物ありての上に云語なり。まつ神人の上に申す例は。即こなる惟神我子應治とあるを始て。萬葉一に。八隅知之。吾大王。高照。日之皇子。神長柄。神左備世須登云々。かゝる類はいと多し。これ天皇の神と坐す御上につきて申奉るなり。二に神葬伊坐而云々。神隨安定座奴。此は御靈の神に坐す上に就て申すなり。五に。故布乃波良爾。美豆豆可良。意可志多麻比。可武奈何良。可武佐備伊麻須。久志美多麻云々。此は神功皇后の御上を稱へて申せるなり。十三。葦原水穗國者。神在隨事舉不爲國。此は國に云語なり。土佐日記に。神からにやあらん。國人の心の常としてとある。神かあらん。といふ意なり。十七。阿佐比左之。曾我比爾見由流。可無奈我良。彌奈爾於婆勢流云々。多可吉多知夜麻。此は越の立山を云り。かく云るは。國をも山をも神と崇むる上より云なり。かくの如く。其人其國其山を神と尊み崇め。即て其物の神に坐隨ら。神の行事ある事に云る語にして。自然に行はるる空理を云にあらす。また一に。五十日太爾作。派須良牟。伊蘇波久見者。神隨爾有之。とあるなどは。隨かに天皇の神に坐よしを。決定て申せる語なり。然るに此を自然の事のやうに。心得あやまれる其根源は。全く此注文に。隨神道亦自有神道也とある。攙入文に欺かれたるなり。いひもてゆけば。何の事とも通えぬ語なり。近世神道を奉する輩。何の上にも。神道と云わくこそ。をかしけれ。問つむれば。何か神隨の道理なりや。とに記しおくものなり。○與天地之初君臨之國也。重胤云。是は伊弉諾伊弉冊尊の。何不<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>天下之主<sub>一</sub>者歟。また立<sub>二</sub>皇孫天津彦々火瓊々杵尊<sub>一</sub>。以爲<sub>二</sub>葦原中國之主<sub>一</sub>とある事を詔へるなり。と云れたるか如し



○自始治國皇祖之時は。神武天皇を申す。神武紀云。始取天下之天皇。○造等之色。色も亦氏と云るに同じ。其色に隨ひて。其氏を異にするか故に云○固執彼此とは。或は神裔なりと云て自ら高ふり。或は皇裔なりと云て人を卑むるの類なり○各守名々。上文に臣連伴造國造。分其品部。別彼名々。○あり。守とは其名々を固く守るなり。上の執と云も同じ○以彼爲姓神名王名は。本の訓はたかへり。以彼爲姓。神名王名と訓へし○自心之所歸とは。我心に詣ひ歸る處の主を云なり○安付前々處々。前々とは神社に幾座と云と同じく。神にも人にも其員を云なり。付とは屬るなり。賂物として人に屬贈るなり。考云。輕き百姓までも。神名王名を掛たるものか出來てある故。其を人の召使に贈れば。先の人も悦ぶ故。賂物にもする故。尊き名かいよく穢れてくるなりと云り。記傳に。付とは名に附るを云。神名又古の皇子等の名を。安に人々の姓名に付るなり。と云れたるはよからず。○前々猶謂人々也の七字。集解には私記攪入と爲たり○爲人賂物云々。爰以下。上文を承て言るにて。奴婢を賂物とするに付て云なり。集解説よろし。次に云○穢汗清名。清名とは貴き名なり。門流の清淨くして。他種に混せざるを云。集解云。按以神名王名。號奴婢。奴婢人有賂贈。故謂神名王名爲賂物也。とあり○民心不整云々。上の天下大同云々とあるに應じたる文なり○隨在天神。文武紀聖武紀に隨神とある訓同じ。此文字を以ても。自然の道に非ざること知へし。即天皇の神に在し隨らと云義なり○治國治民。上の治字の上に。薩摩本將字あり。よろし○是先是後は。或は先にし或は後にして。便利に隨ひて。次々に詔し給はむとなり○必當難待は。舊俗に習へる人。祖

業を失はんかの危懼を抱きて。後詔を待難ぬる心あらんとなり○將賜庸調。集解に。按以庸調爲賜。以定執舊拒新人心所危懼也。とあるか如し。さて此時の詔の大意は。栗田寛云。民情を慰安給へるなり。爰に始於神名天皇名々。或別爲臣連之民云々とは。前詔に所謂始王之名々とあるに同じく。拙弱臣連國造。以彼爲姓神名王名云々。安付前々處々とは。或者全無容針少地と云るに同じ。以神名王名爲人賂物云々とは。以其民品部。交雜使居國縣。遂使父子易姓兄弟異宗云々。由是爭競之訟。盈國充朝。また以王名輕掛川野。呼名百姓とあるを云るにて。上の詔旨と異同はなきを。かゝる弊政ありて。國家の大害となる由を。丁寧に反復告給へるなり。かく制給ひしより。後。臣連伴造國造等。其遠祖より傳來し職を失ひし程に。職號即姓なる古義はうせて。姓と云ものは。字運と連ね呼ひて。家の尊卑を分つ外には。さして用なきものこそなれりける。上古は氏々の貢調賦役を。氏上にて掌りしを。大化以來諸氏の部曲を除きて。皆公民とせしより。其公民を統治むる官職。即國司郡司を置ける後も。なほ上古の如く。一氏々々を統る者なくて得あらぬ勢なれば。氏上をはなほしかすかに其名を存して。後々までも任されたり。所謂氏上を殊に重くせられしことは。天武天皇八年正月詔にありと云れたり。

是歲。壞小郡營宮。天皇處小郡宮。而定禮法。



小郡は。天武紀に難波小郡に作れり。攝津志に。西成郡上古難波小郡と云り。推古紀に大郡あり。浪速上古圖說云。大郡は今の上町。小郡は從天滿鄉長柄本莊等を亘るの名。此間も生國と稱する處。神名帳に生國魂神社あり。生國は往古今上町より。長柄本莊に亘る地にて。仁德帝時。東江を堀て西海に疏し。其地を分割て二と爲し。上町を大郡と號し。北を小郡と號く。其後大郡を東生郡と爲し。小郡を西生郡と爲したるなり。推古十六年下併見るへし。難波古圖を見るに亦小郡あり。と云り。壤とは民戸を壞つなり。上に見えたり。上古圖說に壤とあるは是からす○而字。本になし。今中臣本水戸本に據て補へり。

其制曰。凡有位者。要於寅時。南門之外。左右羅列。候日初出。就庭再拜。乃侍于廳。若晚參者。不得入侍。臨到午時。聽鐘而罷。其擊鐘吏者。垂赤巾於前。其鍾臺者。起於中庭。工人大山位倭漢直荒田井比羅夫。誤穿溝瀆。控引難波。而改穿疲勞百姓。爰有上疏切諫者。天皇詔曰。妄聽比羅夫所詐。而空穿瀆。朕之過也。即日罷役。

臨到午時。本に臨下に一臨字あるは衍なり。集解に中本に據て削れり。考本にもなし○聽鐘而罷。此

事舒明紀に既に議ありしかども。行はれさりしなり。公式令に。凡京官皆開門前上。閉門後下。義解謂。第二開門鼓前。退朝鼓後也。○擊鐘吏者。令陰陽寮の條に。漏刻博士二人。掌守辰丁。伺漏刻之節。守辰丁二十人。掌伺漏刻之節。以時擊鐘鼓とあり。高田與清か更鐘略考に云。按漏刻博士二人にて。守辰丁二十人を率て。漏刻の刻限を伺ひ。其刻限に合せて。時の鐘鼓を擊よしなり。但博士二人にて交替し。丁も二十人にて交替して。勤仕する事と知へし。開門鼓。閉門鼓。曉鼓。夜鼓。日入前鼓。退朝鼓等の名目。宮衛令。關市令。儀式。陰陽寮式。左右近衛式。左右衛門式などに見え。彈正式に會僧鐘も見えたり。これは江家次第等諸書に。集會鐘といへるにおなじ。延喜陰陽寮式十六に。凡撞漏刻鐘料。松木一枚。本周三尺。長一丈六尺。隨損令左右衛門卒探送。其綱料熟麻三十斤。隨損申省。請大藏云々。又同卷。諸時擊鼓。子午各九下。丑未八下。寅申七下。卯酉六下。辰戌五下。巳亥四下。並平聲鐘。依刻數云々。按此文にて。時の鐘の撞木にて撞事も。釣鐘なるよしも想像べし。又朝の卯時。夕の酉の時。共に六つ。晝の辰時。夜戌時は五つ。晝の巳時。夜の亥時は四つ。晝の午時。夜の子時は九つ。晝の未時。夜の丑時は八つ。晝の申時。夜の寅時は七つといふ出所も知らる。さて此時鼓の數は。納音五行の數にもとつけるよし。續各響集に。二輟耕錄。夢溪筆談。瑞桂堂暇錄を引ていひ。槿囊抄七にも。十二時の鼓の説ありと云り。なほ本書に精しく云へり見るべし。天智紀十年の下に引て云ることあり○垂赤巾於前。集解云。說文曰。巾佩巾也。玉篇曰。佩巾本以拭物。後人著之於頭。按赤巾蓋絳幘鷄人之類。



蒙<sub>レ</sub>首衣也。非<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>蔽<sub>レ</sub>膝爲<sub>レ</sub>巾之巾也。倭名抄。釋名云。帽。知岐利加字不利。覆<sub>二</sub>髻上<sub>一</sub>者也。唐韻云。帽婦人喪冠也。箋注云。孝禮紀。巾訓。知幾利。蓋知岐利。加字布利之名依<sub>レ</sub>之。云。今老婦戴<sub>レ</sub>之者未<sub>レ</sub>詳。村瀨氏曰。今以<sub>二</sub>幅紗<sub>一</sub>打疊。自<sub>レ</sub>項環<sub>レ</sub>代<sub>レ</sub>醉<sub>レ</sub>。古謂<sub>二</sub>。繞<sub>二</sub>兩鬢<sub>一</sub>。交加蓋<sub>レ</sub>髻者。亦謂<sub>二</sub>。其小蓋<sub>一</sub>。髻者。謂<sub>二</sub>。之阿儻<sub>一</sub>。方言所謂紗縵。郭璞謂<sub>二</sub>。之結籠<sub>一</sub>。燕京謂<sub>二</sub>。之雲髻<sub>一</sub>。見<sub>レ</sub>之概<sub>レ</sub>者。蓋此類也。とあり○鍾臺。通證に所謂漏刻樓とあり○工人。白雉元年に將作大匠とあり○大山位。次の五年紀に出。こゝは上に廻らして書るなり○倭漢直荒田井比羅夫。下文に荒田井直比羅夫とあり○改穿二字。集解に撥入と爲て削れり○切諫。本に切字なし。中臣本京極本にあり。補ふ○空穿の下。集解に溝字を補へり。按に空は穿の誤て複れるものならんか。

冬十月、甲寅朔甲子。天皇幸<sub>二</sub>有間<sub>一</sub>溫湯。左右大臣群卿大夫從焉。十二月、晦。天皇還<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>溫湯<sub>一</sub>。而停<sub>二</sub>武庫行宮<sub>一</sub>。武庫地名也。是日。災<sub>二</sub>皇太子宮<sub>一</sub>。時人大驚怪。

甲子は十一日なり○有間溫湯は。攝津國有馬郡なり○晦は。辛巳の日なり。十二月の下に。朔干支脱したるなるへし○武庫行宮。攝津志云。在<sub>二</sub>武庫郡藏人村<sub>一</sub>とあり○大驚怪。此事詳ならず。按に皇太子當時大に事を用ひ給ひしか故に。人々危懼を抱きしならん。しかるに今其宮に災けるは。叛く者などのありしとおもひて。時人の驚怪めるにもあるへきか。

是歲。制<sub>二</sub>七色<sub>一</sub>。一十二階之冠。一曰織冠。有<sub>二</sub>大小二階<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>織爲<sub>レ</sub>之。以<sub>レ</sub>繡裁<sub>二</sub>冠之緣<sub>一</sub>。服色並用<sub>二</sub>深紫<sub>一</sub>。二曰繡冠。有<sub>二</sub>大小二階<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>繡爲<sub>レ</sub>之。以<sub>レ</sub>織裁<sub>二</sub>冠之緣<sub>一</sub>。服色並同<sub>二</sub>織冠<sub>一</sub>。三曰紫冠。有<sub>二</sub>大小二階<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>紫爲<sub>レ</sub>之。以<sub>レ</sub>織裁<sub>二</sub>冠之緣<sub>一</sub>。服色用<sub>二</sub>淺紫<sub>一</sub>。四曰錦冠。有<sub>二</sub>大小二階<sub>一</sub>。其大錦冠。以<sub>レ</sub>大伯仙錦爲<sub>レ</sub>之。以<sub>レ</sub>織裁<sub>二</sub>冠之緣<sub>一</sub>。其小錦冠。以<sub>レ</sub>小伯仙錦爲<sub>レ</sub>之。以<sub>レ</sub>大伯仙錦裁<sub>二</sub>冠之緣<sub>一</sub>。服色並用<sub>二</sub>眞緋<sub>一</sub>。五曰青冠。以<sub>レ</sub>青絹爲<sub>レ</sub>之。有<sub>二</sub>大小二階<sub>一</sub>。其大青冠。以<sub>レ</sub>大伯仙錦裁<sub>二</sub>冠之緣<sub>一</sub>。其小青冠。以<sub>レ</sub>小伯仙錦裁<sub>二</sub>冠之緣<sub>一</sub>。服色並用<sub>二</sub>紺<sub>一</sub>。六曰黑冠。以<sub>レ</sub>黑絹爲<sub>レ</sub>之。有<sub>二</sub>大小二階<sub>一</sub>。其大黑冠。以<sub>レ</sub>車形錦裁<sub>二</sub>冠之緣<sub>一</sub>。其小黑冠。以<sub>レ</sub>菱形錦裁<sub>二</sub>冠之緣<sub>一</sub>。服色並用<sub>二</sub>綠<sub>一</sub>。七曰建武。初位。又名立身。以<sub>レ</sub>黑絹爲<sub>レ</sub>之。以<sub>レ</sub>紺裁<sub>二</sub>冠之緣<sub>一</sub>。別有<sub>二</sub>鍙冠<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>黑絹爲<sub>レ</sub>之。其冠之背。張<sub>二</sub>漆羅<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>綠與<sub>レ</sub>鍙異<sub>二</sub>其高下<sub>一</sub>。形似蟬。小錦冠以上之鍙。雜<sub>二</sub>金銀<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>之。大小青冠之鍙。以<sub>レ</sub>銀爲<sub>レ</sub>之。大小黑冠之鍙。以<sub>レ</sub>銅爲<sub>レ</sub>之。建武之冠無<sub>レ</sub>鍙也。此冠者。



大會饗客。四月七月齋時所着焉。

制一十三階之冠。推古十一年より此年まで。四十四年なり。○織冠。集解云。按織即錦綺之屬。則疑與錦冠不異。蓋錦冠則大小博山之文。文有定制。不相混也。織之文。不知織爲何文。蓋用金采。故無所定之文。と云り。○深紫。コキムラサキと讀へし。延喜縫殿式云。深紫綾一疋。紫草三十斤。酢二升。灰二石。薪三百六十斤。正字通曰。其紫近絳。謂之北紫。以月白或藍。爲初染地。加以紅花成之。惡奢朱者。謂淺紫色也。六書故曰。宋仁宗時有紫帕。爲油所漬。其色竊玄。因命染人。放而爲之。謂之油紫。今四品以上朝服用此。其染之以紫草色近玄。昔之紫近絳亂朱者北紫也。朱子曰。自隋煬帝。令百官以戎服。從一品賜紫。次朱。次青。後世遂爲朝服。唐書馬周傳曰。三品服紫。四五品朱。六七品綠。八九品青。とあり。此説ともに據れば。皇國にて紫を貴き色と定め給ひしは。此時を始にて。其は隋の制に擬されたるなりけり。○繡冠。ヌヒモノ、冠と訓へし。○以織裁冠之綠。本に以織裁の三字。其一字に作れるは誤なるへし。今考本に據て改め訂せり。○以紫爲之。以文云。紫下脫字あるへしと云り。さることなり。紫は色の名なれば。其物なくてはいかとなり。紫地の綾なるへし。○淺紫。ウスムラサキと訓へし。縫殿式に。淺紫綾一匹。紫草五斤。酢二升。灰五斗。薪六十斤とあり。○大伯仙錦。錦文なり。初學記云。錦有大登高。小登高。大明光。小明光。大博山。小博山。卓氏藻林云。博山爐。烟象海中博

山。故名。今は絶えて聞えず。○眞緋。本に眞を直に誤る。今秘閣本中臣本其他の本ともに據て改む。類篇に緋絳色又赤練とあり。○紺。フカキハナタと訓む。また舊くコキハナタともよめり。説文に。紺。帛深青。揚赤色也とあり。催馬樂歌に花田の帶。○以黑絹爲之。本に此五字脱たり。今集解及職原抄注所引古本ともに據て補へり。○車形錦。通證に。所謂佐々良賀多也。見允恭紀歌。正中御飾秘記曰。刺車錦御被。黃地以黑糸奉織。小車文形。集解に。嘗得此御被裁餘。黃綾黑文。織車輪。輪大徑六分。とあり。○菱形錦。倭名抄。菱和名比之。今花菱武田菱等の名あり。並に紋形に云り。○建武。通證云。通典曰。鷓冠一名建冠。即惠文冠也。蓋取之而名也。鷓性雄健武毅。故改曰建武。耶。とあり。○初位。伊勢物語に。うひかうふりして云々。○以黑絹。本に以字なし。今契沖校本。考本。集解に據て補ふ。○鏡冠。鏡とは冠の形鏡に似たるを以て名けたるなり。さて鏡を都保と云るは。古代の鏡の狀。壺に似たるか故にしか云るにて。即後の壺鏡なり。延喜馬寮式に。大壺鏡一具。桃華葉葉に。鏡壺。舌長。半舌。また大滑の時壺鏡。切付の時舌長鏡などあり。新井氏云。法隆寺に上宮太子鏡あり。鏡にて造れり。金銅。鏡具を附たり。此物年中行事繪に見ゆ。蓋壺鏡なりと云り。今も此鏡をり。土中より掘出ることあり。さて其冠のさまは壺囊抄に。日本の冠は。偏に蟬の羽に象れり。壺冠と云へり。當世に用る冠是なりと。江帥記に侍り。とあるにて明らけし。田沼善一云。壺鏡は狀香の如しと云り。傍抄。源朝臣事。の條に。或借用大夫尉騎馬鞍赤手綱壺鏡などあり。○張漆羅。これ天武紀に見えたる漆紗冠なり。李時珍曰。古以尺布裹頭爲巾。後世以紗羅布葛縫合。方者爲巾。圓者曰帽。加以



漆製一曰冠。と云り。○銅は。髻華なり。推古紀に云り。○形似蟬。璫囊抄に。日本には貂尾を着されども。蟬をは附くるなりと云り。是を蟬冠とも云りしこと。靈異記上卷に。中納言從三位大神高市麻呂。脱其蟬冠。擊上朝廷云々。蟬訓奈波世美。とあるにて知られたり。加邪理具志は飾串にて。蟬を飾りて串に附たる名なるへし。奈波世美とは。未以て蟬の形を結ひて附たるものか。考ふへし。通證に。漢燕刺王傳。郎中侍從著貂羽。黃金附蟬。師古曰。貂羽以貂尾。爲冠之羽也。附蟬爲金蟬。以附冠前也。正字通曰。漢魏晉以來。謂漆紗之冠曰蟬。耳者即今紗帽翅。所謂高蟬也。とあり。璫囊抄に。日本の冠は蟬の羽に象れりと云へど。漢魏のに倣へるなりけり。○大會は。即位元日等をいふ。○饗客は。唐及び三韓人來聘の時の饗なり。○齋時は。推古紀に。四月八日七月十五日設齋とあり。

新羅遣上臣大阿淦金春秋等。送博士小德高向黑麻呂。小山中中臣連押熊。來獻孔雀一隻。鸚鵡一隻。仍以春秋爲質。春秋美姿顏。善談咲造淳足柵。置柵戸。老人等相謂之曰。數年鼠向東行。此造柵之兆乎。

上臣は。音讀にすへし。舊訓は非なり。中臣本臣を官に作るは誤なり。○大阿淦。本に淦を淦に作る。今中臣本其他の本ともに據て改。東國通鑑に。五日。大阿淦。授眞骨眞骨王族也。とあり。○金春秋等。此人は後に新羅王となりし春秋智と。同人と見えたり。齊明紀六年紀より。つきく見えたり。又云。唐貞

觀十六年。新羅善德女主十一年曰。新羅遣伊淦金春秋。乞師高勾麗。初大耶之敗。品釋之妻金氏死。金氏即春秋之女。春秋聞之。倚柱而立。終日不寐。既而言曰。嗟大丈夫。不能滅敵國乎。乃詣王曰。臣願奉使高勾麗。請兵報怨百濟。主許之。按善德女主十一年は。皇極天皇元年にあたり。○小山中中臣連云々。此時末小山の位なし。かつ五年紀を按に。小山中の中は。上又は下の誤なるへし。○一隻。説文鳥一枚也。とあり。○善談咲。字鏡。嚶語也。伊豆波留。又保大支天云とあれど。こゝの訓ホタキは。ホサキの誤なるへし。○淳足柵。通證云。倭名抄。越後國沼垂郡沼垂奴多利。柵與城同訓。國史多賀柵壺碑作多賀城。小勝柵倭名抄作雄勝城。蓋古通稱之也。唐書日本傳曰。國無城郭。聯木爲柵。落通鑑唐紀鴨綠柵。とあり。○柵戸。廢帝紀に。陸奥國桃生柵戸。出羽國小勝柵戸などあり。萬葉集伎倍とあり。戸は戸令に。所謂陵戸官戸の類にして。城柵に住る民戸なり。○老人等相謂之。秘閣本に謂を語に作る。○數年鼠云々。數は恐らくは去の誤ならんか。さて壞小郡營宮。并に制七色冠階。及び新羅來使。使造淳足柵など。其月しられぬか故に。是歲の末に繋るなり。

四年春正月壬午朔。賀正焉。是夕。天皇幸于難波碕宮。二月壬子朔。遣於三韓學問僧。己未。阿倍大臣請四衆於四天王寺。迎佛像四軀。使坐于塔內。造靈鷲山像。累積鼓爲之。夏四月辛亥朔。罷古冠。左右大臣猶

大化四年  
戊申



著<sup>カウフルフル</sup>古冠<sup>ゴクワン</sup>。是歲<sup>シサイ</sup>。新羅遣<sup>シンラツテ</sup>使貢調<sup>シキキウテウ</sup>。治<sup>チ</sup>磐舟柵<sup>イハフネササ</sup>。以備<sup>イヒ</sup>蝦夷<sup>エミ</sup>。遂選<sup>スヱン</sup>越與<sup>エツ</sup>信濃<sup>シノノ</sup>之民<sup>ノタチ</sup>。始置<sup>ハジメテ</sup>柵戶<sup>ササド</sup>。

此賀正は。武庫行宮にて行はれしものなるへし。難波碇宮。前文に據に。或は豊碇宮と稱し。或は難波碇宮とも稱せしものなるへし。集解にこゝに豊字を補ひしは私なるへし。遣於三韓學問僧。本に遣字三韓下に在は誤なり。今中臣本水戸本考本に據て正せり。己未。五日なり。本に未を來に作れり。今中臣本考本ともに據て改む。四衆は。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。爲四衆。と名義集に見えたり。靈鷲山像。西域記に。耆闍崛山有兩峰。雙立。鷲鳥常居其嶺。山遠望如鷲形。故爲靈鷲山。とあり。佛坐禪の處なりと云り。後の歌に鷲の山とよめり。古冠は。推古十一年に製する所の冠なり。上なる七色十三階の冠にはあらし。磐舟柵。倭名抄越後國磐船部なり。名義は。當國二田宮傳記と云書に。於是天香山命。乘天之磐船。而梶音響々。榜回。雲路。而停泊之地。之謂磐船里。即有祠。とあり。人の此書の考に。之謂磐船里は。日本書紀大化四年條に。是歲治磐船柵。以備蝦夷。とある處にして。現今の岩船郡岩船町大字岩船所なり。此處に石船神社あればなり。即有祠は。式部後國磐船郡石船神社とある是なり。この祭神本文に據れば。天香山命なるへしとおもひしに。北風土記の磐船郡の條に。石船神社。郡中磐船守。祭神饒速日命也。神武天皇七十年勸請云々。磐船村鎮座。とあるは。後人の作爲せし説にもあらざるへし。天香山命の此處に暫時住居し給ひて。其父神を齋奉給ひたりし事にも有けんかし。と云り。

五年春正月丙午朔。賀正焉。二月。制冠十九階。一日大織。二日小織。三日

大化五年  
己酉

日大繡。四日小繡。五日大紫。六日小紫。七日大華上。八日大華下。九日小華上。十日小華下。十一日大山上。十二日大山下。十三日小山上。十四日小山下。十五日大乙上。十六日大乙下。十七日小乙上。十八日小乙下。十九日立身。是月。詔博士高向玄理。與釋僧旻。置八省百官。

制冠十九階。通證云。織繡紫已見前。其曰華。曰山。曰乙。蓋因漢建華冠。方山冠。通天冠。命名也。乙取鷓鴣音。正韻鷓以律切。通典通天冠。晉依漢制。前加金博山。述即鷓也。鷓知天雨。故冠像焉。廣雅註鷓鴣音述。とあり。○大織の訓。ダイシキ。シキとある。とあれど。古訓にタイシヨクともあり。當昔はいつれに呼しならん。詳ならず。後世にも。彼鎌足公を大織冠と云り。但し大を清音に唱へしは非なり。織をシヨクと云る。○大繡。一訓にセウとあり。秘閣本にもしか訓たり。○大華小華の華を。古本には花ともさままゝに書たり。さて此華を。後文には往々錦に作れり。當昔より華錦通用せしものと見えたり。○乙は取鷓鴣音とあれは。イツと訓たるなるへけれど。また舊くオツと訓るもあり。○八省百官。通證に。八省准唐六部。謂中務式部治部民部兵部刑部大藏宮内。と云り。後の八省は。全く此御世に基かれしものなるへし。集解云。按職員令。八省之上有太政官總焉。而此直謂八省。則疑不置。所總之官。蓋既置左右大臣

○日本書紀通釋卷之五十九



及内臣等。則既有總官。此時置八省。分其職也。謂三百官者。職察司臺之類所備之名也。とあり。但  
太政大臣の名目。天智紀に見えたるは。此時既に太政官有しも知かたし。

三月乙巳朔辛酉。阿倍大臣薨。天皇幸朱雀門。舉哀而慟。皇祖母尊。皇太子等。及諸公卿。悉隨哀哭。戊辰。蘇我臣日向。日向字。日向山田大臣於皇太子曰。僕之異母兄麻呂。伺皇太子遊於海濱。而將害之。將反其不久。皇太子信之。天皇使大伴狛連。三國麻呂公。穗積嚙臣。於蘇我倉山田麻呂大臣所。而問反之虛實。大臣答曰。被問之報。僕面當陳天皇之所。天皇更遣三國麻呂公。穗積嚙臣。審其反狀。麻呂大臣亦如前答。天皇乃將興軍圍大臣宅。大臣乃將一子法師與赤狗。自茅渟道。逃向於倭國境。大臣長子興志。先是在倭田之家。營造其寺。今忽聞父逃來之事。迎於今來大槻近。就前行入寺。願謂大臣曰。興志請自直進。迎拒來軍。大臣不許焉。是夜。興志意欲燒宮。猶聚士卒。己巳。大

臣謂長子興志曰。汝愛身乎。興志對曰。不愛也。大臣仍陳說於山田寺衆僧。及長子興志。與數十人曰。夫為人臣者。安構逆於君。何失孝於父。凡此伽藍者。元非自身故造。奉為天皇誓作。今我見譖身刺而恐橫誅。聊望黃泉。尚懷忠退。所以來寺。使易終時。言畢。開佛殿之戶。作發誓曰。願我生々世々。不怨君王。誓訖。自經而死。妻子殉死者八人。

辛酉。十七日なり。朱雀門。通證云。三代實錄曰。長安南面皇城門。是謂朱雀門。又大明宮南面五門。正南曰丹鳳門。夫丹鳳。朱雀。其義一。然則以三其在南方。故謂之朱雀乎。とあり。後の大内裏十二門の内にて。拾芥抄に。朱雀門伴氏造之。二階七間戸五間。號朱雀御門。中二階門。とあり。諸公卿下。水戸本等字あり。○戊辰。二十四日なり。○注日向字身刺。本に刺を判に誤れり。今正せり。さて釋紀に此五字なし。○三國。繼體紀に出。○法師赤狗。二人の名なり。狗。釋紀秘閣本中臣本に猪とあり。○更名秦。本に秦を奏に作る。秘閣本中臣本考本に據て改む。○茅渟道。和泉國なり。既出。さて道とは。今の大阪天王寺邊より。阿部野を南に行。茅渟より河内路を越て。大和に入しものと見えたり。次々の地理



しかみえたり○長子をニコと訓る。他に見あたらねど。兄比賣などの例に。しか書し稱もありしなるへし○注山田之家は。十市郡山田村なり。集解には。此六字私記攷入として削れり○其寺。下にみゆ。大和志云。山田寺一名華嚴寺○今來は。高市郡の舊名なること。系圖纂に引く姓氏錄坂上系圖に見えて。既に雄略紀に引り。今來また新漢とも書り○大槻近。大槻の事も既に云り。さて本の近は。邊の誤なるへし。大槻邊と云ふは。大槻下と云も同じ。これを本のまゝにて。下の句へ附て。近就前行と訓たるは語をなさす。必誤なるへし。釋紀には。字はもとのまゝにて。大槻近。○迎拒來軍。本に迎を送に作るは誤なり。今京極本に據て改む。通證に送當作逆とあるに據て。集解に改めたれど。さる本はなし

○注宮謂小墾田宮。集解に六字私記攷入と云り。偕小墾田宮は。高市郡に在り。山田寺は十市郡に在て。郡堺相接けり。此寺は石河麻呂之長子興志建之と。扶桑略記に記せり。色葉字類抄に引り。續紀一に。施山田寺封三百戸。限三十年。○己巳。二十五日なり○夫為人臣。本に夫を大に誤れり。今秘閣本考本通證集解等に據て改。臣下恐は子字を脱せしならん○聊望黃泉は。漢文の飾なり。聊か死に望ての意なり。本の訓は非なり○作發誓。中臣本。作を仰に作る。薩摩本には仰而二字に作れり○死者八人。本に入下人字なし。今中臣本水戸本考本等に據て補ふ。

是日。以大伴狛連。與蘇我日向臣。爲將領衆。使追大臣。將軍大伴連

等。及到黑山。土師連身。采女臣使主麻呂。從山田寺馳來告曰。蘇我大臣。既與二男一女。俱自經死。由是將軍等。從丹比坂歸。庚午。山田大臣之妻子。及隨身者。亦自經死者衆。穗積臣嚙。捉聚大臣。伴黨田口臣筑紫等。著枷反縛。是夕。木臣麻呂。蘇我臣日向。穗積臣嚙。以軍圍寺。喚物部二田造鹽。使斬大臣之頭。於是二田鹽。仍拔大刀。刺舉其完。叱叱啼叫而始斬之。甲戌。坐蘇我山田大臣。而被戮者。田口臣筑紫。耳梨道德。高田醜。醜。此云之渠。雄。額田部湯坐連。名。秦吾寺等。凡十四人。被絞者九人。被流者十五人。

黑山。倭名抄河内國丹比郡黑山。志云。今屬丹南郡。有黑山村。延喜式黑山席あり。即此地なり○身は。名なり。天智紀には竹田史身と云人もみゆ○丹比坂。河内志。丹南郡羽曳山。在郡東南。山勢起伏透迤。連亘石川古市錦部三郡。本郡平尾丘。丹比丘。植生坂。皆此山脉。とあり○庚午。二十六日なり○隨身者亦。本に亦字なし。今中臣本に據て補○田口臣。二年紀に出。筑紫は名か。釋紀には田口臣と筑紫とを。二人名也と爲り。次にも出○二田造鹽。天孫本紀に。五部造。一曰二田造。又天物部二十五部。一曰



二田物部。とあり。二田地名。越後國新羽郡二田宮傳記云。稱天之物部命。曰三田天物部命。此命薨居坐之。則奉葬于二田里土生田山之高陵。と云ことあれば。越後なるへし。また倭名鈔筑前國鞍手郡二田布多多あり。訓は釋紀私記に。二田不都多とあるによるへし。鹽は名なり。次にこの事あり○使斬大臣之頭。賊盜律に。凡謀反及大逆者皆斬。史學指南に。斬謂下以刀及殺。殊其身首者。とあり○完は。完の古字なり○叱咤啼叫。本に叱を咤に作るは誤なり。啼は號の誤なるへし。本の訓に啼叫をタケヒサケヒオラヒサケヒの誤なるへし。とあるには。啼叫しても叶ふへけれと。こゝは唯泣く事にはあらずして。怒り言る状なるへければ。啼にては叶ひかたし。成説に。二田鹽悲大臣之冤。難其斬也。とあれど。さる義にはあらず。○始をイマシと訓るは。今しにて。辭なり。其斬時に當れるを云なり。殆字の誤ならむと云る説は。信られず○甲戌は二十日なり○田口臣筑紫。一人也○耳梨道德。耳梨は氏なるへけれと。系詳ならず。大和十市郡耳梨あり。道德は。釋古本訓タウトコとあり。さて釋には。別に筑紫耳梨道德と擧たり。誤なるへし○高田醜雄。姓氏錄右京諸蕃。高田首。出。自高麗國人多高子使主。とあり。下文白雉四年に。高田首根麻呂あり。同族なり。其下に云り○注醜此云之渠。本に醜字を脱せり。今中臣本考本に據て補。さて此訓注。本に醜雄の中間にあるはいか。必名下にあるへし○額田部湯坐連。記云。天津日子根命之後。姓氏錄左京神別。額田部湯坐連。天津彥根命子。明立天御影命之後也。允恭天皇御世。被遣薩摩國。平隼人。復奏之日。獻御馬一匹。額有町形廻毛。天皇喜之。賜姓額田部。とあり。なほ此姓の事は神代紀に云り○被絞。所謂絞刑なり。

賊盜律云。謀大逆者絞。史學指南曰。絞謂身首不殊。纏縛而縊者。隋唐制。死二等。一曰絞。二曰斬○被流。流刑なり。又云。謀反祖孫兄弟皆配遠流。とあり。流に三流あり。近流中流遠流なり。其路程に依て定む。式にみゆ。

是月遣使者收山田大臣資財。資財之中。於好書上題皇太子書。於重寶上題皇太子物。使者還申所收之狀。皇太子始知大臣心猶貞淨。追生悔耻。哀歎難休。即拜日向臣於筑紫大宰帥。世人相謂之曰。是隱流乎。皇太子妃蘇我造媛。聞父大臣爲鹽所斬。傷心痛惋。惡聞鹽名。所以近待於造媛者。忌稱鹽名。改曰堅鹽。造媛遂因傷心而致死焉。皇太子聞造媛徂逝。愴然傷怛。哀泣極甚。於是野中川原史滿。進而奉歌。歌曰。耶麻鷲播爾。烏志賦拖都威底。陀虞毘預俱。陀虞陞屢伊慕乎。多例柯威爾雞武。一模騰渠等爾。婆那播左該騰摸。那爾騰柯母。于都俱之伊母我。磨陀左枳涅渠農。其皇太子慨然頽歎。褒美曰。善矣悲矣。乃授御琴而



使唱。賜絹四疋。布二十端。綿一裹。

收資財。賊盜律謀反云。父子若家人資財田宅。並沒官。○大宰帥。大宰の事は既に云り。さて大宰帥は。職員令に。帥一人。掌<sub>下</sub>神社戸口簿帳。字<sub>三</sub>養百姓。勸<sub>三</sub>課農桑。糺<sub>三</sub>察所部。貢<sub>三</sub>舉孝義。田宅良賤訴訟租調倉廩徭役郵驛傳馬烽候城牧過所公私馬牛關遺雜物及寺僧尼名籍蕃客歸化蠻語事とあり。さてこの帥を。むかしより入聲音卒に讀むは。太宰卒と書。いかなる由にかあらん。心得す。字義のまよによまは。スキと云へきなり。この事は既に先哲も疑ひおかれたり。○相謂。秘閣本謂を語に作る。○是隱流乎。通證に。今按。言陽進拜。而陰退<sub>三</sub>遷之<sub>二</sub>也。後世左<sub>三</sub>遷權帥<sub>一</sub>者。蓋始<sub>三</sub>于此<sub>一</sub>。職原抄曰。爲<sub>三</sub>大臣<sub>一</sub>之人。左遷之時任<sub>三</sub>權帥<sub>一</sub>。然而不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>府縣<sub>一</sub>也。其例孝謙天皇天平寶字元年。右大臣豐成。被<sub>レ</sub>遷<sub>三</sub>太宰權帥<sub>一</sub>。醍醐天皇昌泰四年。右大臣菅原公。被<sub>レ</sub>遷<sub>三</sub>權帥<sub>一</sub>。冷泉院安和二年。左大臣高明。一條院長德二年。內大臣伊周。皆同。とあり。○痛惋の訓。既出。ミツカフはアツカフの誤なり。繼體紀に惋痛。雄略紀に駭惋などあり。榮花物語音樂卷に。心くるしうあつかはしけなり。○忌稱鹽名。本に忌を名に誤る。今京極本小寺本に據て改。中臣本考本には諱に作る。集解には各に改む。さて鹽名とは。食鹽を云るなるへし。海鹽までを云にはあらし。○堅鹽のことは。欽明紀に云り。○野中川原史。姓氏錄右京皇別。野中。彥國菴命之後也。諸蕃河原連。陳思王植之後也。續紀九。河內國丹比郡人。正六位下川原椋人子虫等四十六人。賜<sub>三</sub>河原史姓<sub>一</sub>。と

あり。野中川原共に。地名に據れる複姓なるへし。和名抄河內國丹比郡鄉名野中乃奈加。志に野中村あり。川原も河内の地にあるへし。○耶麻鷲播爾。於<sub>三</sub>山川<sub>一</sub>なり。○鳥志賦拖都威底。鷲鷲二居而なり。萬葉に。爾保鳥能。布多利那良毗爲。○陀虞毗預俱。匹好なり。○陀虞陸履伊慕乎。所<sub>レ</sub>匹妹をなり。○多例柯威爾鷄武。誰將<sub>レ</sub>去なり。守部云。一首の意は。關々雌鳩在<sub>三</sub>河之洲<sub>一</sub>。窈窕淑女子好仇。と云古ことと思ひ出るに。實に山川に。鷲鷲雌雄居て。副宜く耦<sub>レ</sub>へるさまなりけるに。其妹命を。誰か率て去けん。惜らしく悔しき事を爲にけるかな。となり。史生の事なれば。毛詩句を思ひて。本句は置るならんか。と云り。聊か穿ちたるやうなれども。此頃となりては。さることを思へることもありけん。○其一。信友云。皇極紀には。歌の上に其一其二と書たり。此紀以下には。歌の後に書たるは。恐くは非ならんと云り。○模騰渠等爾は。毎本なり。本とは本草の莖をいふ。即木毎にと云意なり。萬十四。於布之毛等。許乃母登夜麻乃。麻之波爾毛。とよめる。此等の母等も同じ。○婆那播左該騰摸。花者雖<sub>レ</sub>開なり。○那爾騰柯母は。何歟母なり。何とは何とてかなり。柯母は語助なり。○于都俱之伊母我。愛妹之なり。萬葉に。愛夫。愛妻と云こともあり。○磨陀左枳涅渠農は。不<sub>レ</sub>復開出來<sub>一</sub>なり。解云。花の開を。女のゑめるに譬云ること。古歌に例多し。咲とは即ゑむなりと云り。釋紀には。歌意者。花者雖<sub>レ</sub>散亦開。造媛者。逝後不<sub>レ</sub>歸之由也。と云り。守部も此意に解たり。いつれにても聞ゆへし。萬葉廿。等伎騰吉乃。波奈播左家登母。奈爾須禮會。波々登布波奈乃。佐吉低己受祁牟。とあるは。解の意に近し。さて



守部云。若自の悼歌ならば。うつくし妹などは。申まじきことなれども。此は皇太子の御心になりて。よめる故なりと云り。さることなり○美矣悲矣。一には此歌をうるはしと聞召し。一にはまた其詞を悲しと思はしめしての御言なり。釋紀に悲矣二字なきは足らはず。釋の古本にはあり。脱たるものなること著明し。○綿二裏。通證云。加末須蒲篋也。編蒲爲袋也。袖中抄。裏訓久具都。今西鄙俗。以具具編之。名加末伎。蒲篋也。倭名抄。莎草和名具具。又曰。傀儡子和名久久豆。蓋以負裏物得名とあり。名義具々實なるへし。又稱た其他の物を以。編る袋をも。かますと云るは。轉れる名なり。

夏四月乙亥朔甲午。於小紫巨勢德陀古臣。授大紫。爲左大臣。於小紫大伴長德連。授大紫。爲右大臣。五月癸卯朔。遣小華下三輪君色夫。大山上掃部連角麻呂等於新羅。

乙亥朔。本に亥を卯に作る。長曆を考るに。乙亥朔なり。故今考本小寺本集解に據て改む○甲午。二十日なり○巨勢德陀古は。皇極紀元年に云り○爲左大臣。扶桑略紀に。任左大臣五十七とあり。廢帝紀を按るに。稱難波長柄豐崎朝大臣大織德太古とあり。本紀に大織に進みしことを載せず○大伴長德連。皇極紀元年に出○字馬飼。前紀に既に見えたるを。こゝに字とあるはいかゞ。扶桑略紀に。長德昨子男。金村孫。白雉二年七月。右大臣長德薨。世云馬飼大臣とあり○五月癸卯朔。長曆に據に。五

月は甲辰朔なり。癸卯は七月朔なり。考本に五月を秋七月の三字に作れり。恐くは私に改めしものなるへし。今姑く本のまゝにてあるなり○掃部連。掃部或は掃守とも書くも同じ。古語拾遺云。彦瀲尊誕育之日。海濱立室。于時掃守連遠祖天忍人命。供奉陪侍。作帚掃蟹。仍掌鋪設。遂以爲職。號曰蟹守。今俗謂之掃守。詞轉也。舊事本紀に。振魂命于前玉命を掃守連祖とあり。姓氏錄和泉國神別。掃守連。振魂命四世孫。天忍人命之後也。雄略天皇御代。監掃除事。賜姓掃守連とあり。なほ左京神別掃守連。大和掃守。河内に掃守宿禰。掃守連。掃守造等あり。みな和泉なるに同じ。天武紀十三年十二月。掃守連賜姓曰宿禰。氏人には。文武紀。山代相樂郡々領。掃部宿禰阿賀流。聖武紀に。攝津人少初位下掃守連族廣山等除族字よし見えたり。又首姓もあり。同族なり。東大寺正倉院文書に。天平中出雲人掃部首弟身。外記日記に。一條帝時。織部佑掃守親扶。除目大成鈔に。鳥羽帝時。和泉權掾掃部宿禰永行。見えたり。

是歲。新羅王遣沙喙部沙凜金多遂爲質。從者三十七人。僧一人。侍郎二人。人。中客五人。才伎十人。譯語一人。

雜。倭人十六人。並三十七人也。

沙喙部。通證に喙を喙に作るへしといひ。小寺本に改めたるは。却りて非なり。推古紀十八年に云り○沙凜。本に凜を食に作る。今中臣本小寺本集解に據て改む。東國通鑑に。新羅設官十七等。八曰沙凜と